岩内遺跡・長滝遺跡群

発掘調査報告

1993年3月

石川県立埋蔵文化財センター

岩内遺跡・長滝遺跡群

発 掘 調 査 報 告

１９９３年3月

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

1　本書は石川県能美郡辰口町岩内地内の岩内遺跡と、同町長滝地内の長滝遺跡群の発掘調査報告である。

2　本書は、県営圃場整備事業辰口中部地区の施工にかかる緊急発掘調査の記録である。それぞれの遺跡の調査年次及び調査位置は本文中に記してある。

3　岩内遺跡の発掘調査は、以下の日程で実施した。（＊印は本文執筆者）

1986年度　6月後半～9月中旬

担当者　県立埋蔵文化財センター主事　小嶋芳孝＊

主事　越坂一也

1988年度　10月17日～24日

担当者　県立埋蔵文化財センター主事　北野博司＊

辰口町教育委員会主事　橋場和彦（長期研究生）

4　長滝遺跡群の発掘調査は、以下の日程で実施した。

1987年度　5月7日～7月15日

担当者　県立埋蔵文化財センター主事　藤田邦夫＊

1990年度　4月27日～8月1日

担当者　県立埋蔵文化財センター主事　松山和彦＊

5　各遺跡の出土品の実測・トレースは、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施した。

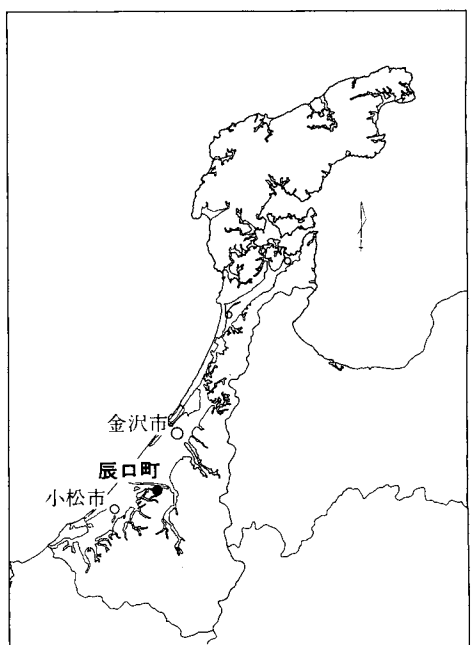
岩　内　遺　跡

Ⅰ　遺跡の位置と環境

岩内遺跡は、石川県能美郡辰口町に所在する縄文時代から中世の遺跡である。辰口町は金沢市の南西約15kmに位置し、面積は56.15km²である。町の東側は、標高2702mの白山に源を発する手取川が流れている。手取川は、白山山系から平野に出て広大な扇状地を形成しているが、辰口町はこの扇状地の下流に向かって左岸に位置している。鶴来町から天狗橋で手取川を渡って町内を東西に走る県道小松鶴来線の北側では、耕土直下が礫層となっており手取川の氾濫源であったことを示唆している。県道の南側では耕土直下に礫層が分布するのは岩本・灯台笹の周辺で、西に向かうにしたがって礫層のレベルは深くなって灰色ないし黒色の土壌が発達している。岩内遺跡は礫層が深くなり土壌が発達しはじめる場所に位置している。

岩内遺跡は、県道に接して東西に延びる岩内集落と背後の丘陵にはさまれた水田地帯に位置する。遺跡の東部では縄文時代中期前後の集落があり、西部では平安から中世の集落が営まれたようである。岩内の周辺では、灯台笹遺跡が県内で最初に発掘調査された旧石器遺跡として知られている。この遺跡は標高約110mの丘陵にあり、1962に田中勲氏によって発見され、1968年に県から依託を受けた石川考古学研究会によって県営開拓パイロット事業計画に伴う緊急調査が行われている。頁岩製のナイフ形石器や掻器・縦長剥片等が出土し、平口哲夫によって16,000～13,000年前の年代観が与えられている。

縄文時代早期の遺跡は、1992年度に石川県立埋蔵文化財センターが行ったサイエンスパーク建設に伴う宮竹地内の庄が屋敷Ｂ遺跡で押型文土器などが若干量検出されている。また、この遺跡に続く丘陵では掻器状の旧石器も検出されており、旧石器から縄文早期の遺跡がいくつか点在しているものと思われる。縄文時代前期には、岩内集落の西方の丘陵上の旭台遺跡群が知られている。中期に入ると、宮竹地内の庄が屋敷遺跡群などのまとまった集落が丘陵上に営まれている。長滝集落の背後の丘陵にある莇生遺跡では、中期の遺跡があり1975年から３年間にわたって辰口町が石川考古学研究会の協力を得て発掘調査を行っている。今回報告する岩内遺跡でも、中期初頭の新崎式の資料が出土している。また、岩内遺跡の北方にある長滝遺跡では平野部に中期から後期の集落が営まれ、その背後の莇生遺跡では中期の集落が丘陵上に営まれている。岩内遺跡では、遺跡の北部に後期から晩期の集落が形成されており、1985年に石川県立埋蔵文化財センターが加賀産業道路の拡幅工事に伴う緊急調査を実施している。



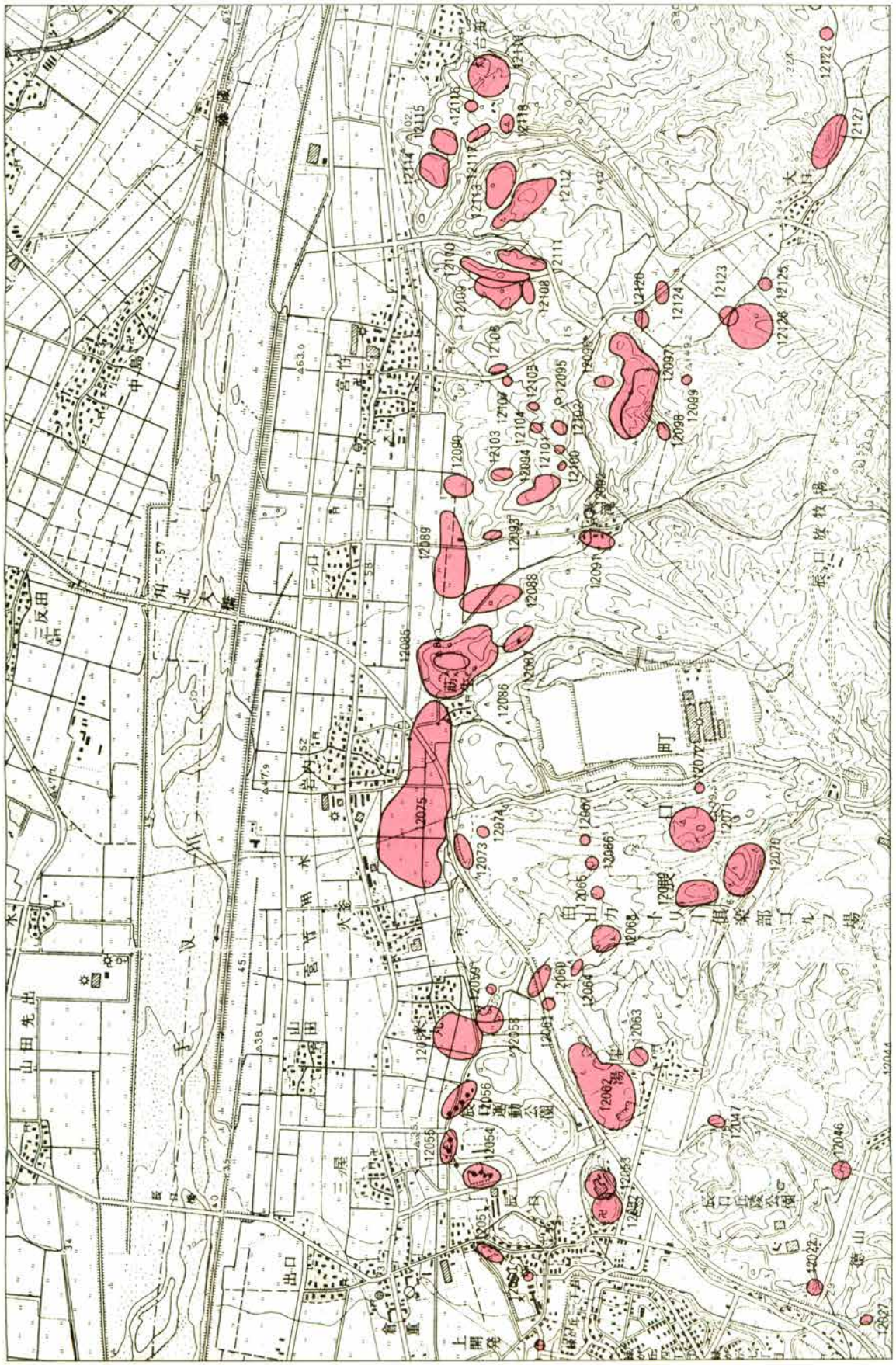
第１図　辰口町の位置（黒丸）

弥生時代の遺跡は、辰口町地内であまり多く見つかっていない。特に前期から中期の遺跡のようすは、全くつかめていない。後期に入ると、西山丘陵に墳墓が営まれており、つづいて古墳時代前期から中期にかけては1977年に県営圃場整備事業に伴って石川県立埋蔵文化財センターによって高座地内で良好な遺跡が調査されている。

古墳時代後期は、茶臼山古墳群や西山古墳群が造営されて、能美古墳群の一角を形成しているが、この時期の集落遺跡は未確認である。7世紀後半には、湯屋地内で瓦の生産が行われ、手取扇状地の中央部に建立された末松廃寺に供給されていた。ちなみに、辰口丘陵一帯には7世紀初頭頃から10世紀にかけて須恵器生産が盛んに行われており、その製品は近辺のみならず手取扇状地一帯に広く供給されていた。

奈良時代に入ると、下開発周辺に集落が形成され9世紀前半にかけて多くの遺構や遺物が検出されている。北野博司は、この遺跡の性格について東大寺領幡生庄に関係するとしている。平安後期から中世にかけて、白山信仰に伴う社寺が丘陵に営まれ、長滝集落奥の経塚からいずれも13前半に比定できる世紀珠洲焼の四耳壺と加賀陶の片口鉢・和鏡四面が出土している。

長滝・岩内遺跡周辺の遺跡の動態を整理すると、旧石器から縄文中期にかけて丘陵上に集落が営まれ、中期初頭から晩期にかけて平地で集落が営まれている。弥生から古墳時代は実体が不明だが、平安時代初頭には堀立柱建物が数棟ある小村落が形成されているもようである。岩内遺跡の丘陵沿いに採集された珠洲焼片等の中世関係資料は、この丘陵縁辺になんらかの遺跡の存在していることを物語っている。



第２図　岩内遺跡周辺の遺跡分布図

遺跡番号	枝番号	地図番号	名称	所在地	所在地通称	種別	現状	立地	時代	出土品	備考
12046		22	上徳山近世窯跡	辰口町上徳山		窯跡	畑	丘陵裾	近世		
12047		22	湯屋チョウヅカ遺跡	辰口町湯屋	チョウヅカ	墳墓	山林・道路	丘陵	中世	中世陶器、青磁、土師質土器	1983年町教委発掘調査11基の塚を確認。
12048		22	上開発カワリダ遺跡	辰口町上開発	カワリダ	散布地	田	平地	中世	土師質土器	
12049		22	上開発古墳	辰口町上開発		古墳	山林	丘陵	古墳		円墳、土取りのため消滅。
12050		22	辰口ましじやま古墳	辰口町辰口	マシジヤマ	古墳	校地	台地	古墳後期	須恵器	円墳、消滅。
12051	1	22	辰口本村遺跡	辰口町辰口		散布地	社地・田	平地	不詳	土器	
	2	22	辰口八幡神社1号墳	辰口町辰口		古墳	社地	丘陵	古墳		円墳、径10m、高1m 墳裾部のみ残存。
	3	22	辰口八幡神社2号墳	辰口町辰口		古墳	社地	丘陵	古墳		円墳、径8.5m、高2m 一部損壊。
12052		22	辰口廃寺跡	辰口町辰口		寺院跡	寺地	台地	不詳		石段、平坦面残存、現集福寺建立のため一部損壊。
12053		22	辰口縄文遺跡	辰口町辰口		散布地	公共施設用地	丘陵	縄文		辰口町社会福祉会館建設により消滅。
12054	1	22	来丸古寺1号墳	辰口町来丸	フルデラ	古墳	山林	丘陵	古墳		円墳、径14m、高1m
	2	22	来丸古寺2号墳	辰口町来丸	フルデラ	古墳	山林	丘陵	古墳		円墳、径12m、高2.5m 一部損壊。
	3	22	来丸古寺3号墳	辰口町来丸	フルデラ	古墳	山林	丘陵	古墳		円墳、径11m、高1.5m 一部損壊。
	4	22	来丸古寺4号墳	辰口町来丸	フルデラ	古墳	山林	丘陵	古墳		円墳、径7.5m、高0.5m 裾部を残し削平。
	5	22	来丸古寺5号墳	辰口町来丸	フルデラ	古墳	山林	丘陵	古墳		円墳、径11m、高1m
	6	22	来丸古寺6号墳	辰口町来丸	フルデラ	古墳	山林	丘陵	古墳		円墳、径12m、高3m
	7	22	来丸古寺7号墳	辰口町来丸	フルデラ	古墳	山林	丘陵	古墳		円墳
	8	22	来丸古寺8号墳	辰口町来丸	フルデラ	古墳	山林	丘陵	古墳		円墳
12055	1	22	来丸物見山1号墳	辰口町来丸	モノミヤマ	古墳	山林	丘陵	古墳		円墳、径11m、高1.5m
	2	22	来丸物見山2号古墳	辰口町来丸	モノミヤマ	古墳	山林	丘陵	古墳		円墳、径13m、高1m
	3	22	来丸物見山3号古墳	辰口町来丸	モノミヤマ	古墳	山林	丘陵	古墳		円墳、径8.5m、高1m
12057		22	来丸遺跡	辰口町来丸	シャカドウ	散布地	田	平地	縄文中期・平安		
12058		22	来丸天明寺跡	辰口町来丸		寺院跡	田・山林	丘陵裾	不詳		
12059		22	来丸気多神社1号墳	辰口町来丸		古墳	山林・社地	丘陵	古墳		円墳、径10m、高1.5m 別に古墳状隆起1基近接してあり。
12060		22	来丸丸山遺跡	辰口町来丸	マルヤマ	散布地	田	平地	不詳	須恵器	
12061	1	22	来丸さくらまち1号窯跡	辰口町来丸	サクラマチ	窯跡	道路	丘陵裾	奈良	須恵器	1974・89年県教委・埋文センター発掘調査。
	2	22	来丸さくらまち2号窯跡	辰口町来丸	サクラマチ	窯跡	道路	丘陵裾	不詳		
	3	22	来丸さくらまち3号窯跡	辰口町来丸	サクラマチ	窯跡	道路	丘陵裾	奈良	須恵器	
12062	1	22	湯屋AⅠ－1号窯跡	辰口町湯屋		窯跡	山林	丘陵斜面	古墳	瓦、須恵器	1982～88年町教委発掘調査、瓦陶兼業窯跡群で製品は野々市町末松廃寺（国指定史跡）に供給されている。A－Ⅲ支群で平窯3基B支群で瓦集積地が調査された。旧石器2点も調査時に採取。
	2	22	湯屋AⅠ－2号窯跡	辰口町湯屋		窯跡	山林	丘陵斜面	古墳	瓦、須恵器	
	3	22	湯屋AⅡ－1号窯跡	辰口町湯屋		窯跡	山林	丘陵斜面	古墳	須恵器	
	4	22	湯屋AⅢ－1号窯跡	辰口町湯屋		窯跡	宅地	丘陵斜面	古墳	須恵器	
	5	22	湯屋BⅠ－1号窯跡	辰口町湯屋		窯跡	山林	丘陵斜面	古墳	瓦、須恵器	
12063		22	湯屋遺跡	辰口町湯屋		散布地	田	平地	古墳～平安		
12064		22	来丸五升谷窯跡	辰口町来丸		窯跡	山林	丘陵	不詳		
12065		22	火釜A遺跡	辰口町火釜		散布地	山林	丘陵斜面	縄文前期		
12066		22	火釜B遺跡	辰口町火釜		散布地	山林	丘陵斜面	平安		土取りで損壊。
12067		22	火釜C遺跡	辰口町火釜		散布地	山林	丘陵斜面	平安	須恵器、土師器	
12068		22	来丸旭台遺跡	辰口町来丸		散布地	ゴルフ場	丘陵斜面	縄文		
12069		22	旭台北砦跡	辰口町旭台		砦跡	緑地・ゴルフ場	丘陵	中世		1988年町教委発掘調査
12070		22	旭台南砦跡	辰口町旭台		砦跡	山林	丘陵	中世		ゴルフ場内に現状保存
12071		22	旭台A遺跡	辰口町旭台		散布地	ゴルフ場	丘陵斜面	縄文前期・後期	縄文土器	
12072		22	旭台B遺跡	辰口町旭台		散布地	山林	丘陵裾	平安	須恵器	窯跡の可能性あり。

表1　岩内遺跡周辺の遺跡地名表

遺跡番号	枝番号	地図番号	名称	所在地	所在地通称	種別	現状	立地	時代	出土品	備考
12073		22	岩内茶仙堂遺跡	辰口町岩内	チャセンドウ・オボンヤマ	散布地	山林	丘陵裾	中世	珠洲焼、加賀焼、五輪塔	1973年県教委試掘調査
12074		22	岩内経塚遺跡	辰口町岩内		経塚	駐車場	丘陵	中世		
12075		22	岩内遺跡	辰口町岩内	ゴマダ・ハチマンダ・テラダ	集落跡	田・道路	平地	縄文・平安中世	縄文土器、須恵器土師器、珠洲焼	1985年県埋文センター発掘調査。
12085		22	筋生城跡	辰口町筋生	ジョウガヤマ	城跡	山林・畑	台地	中世		一部土取りにより損壊
12086		22	筋生遺跡	辰口町筋生	ジョウガヤマ	集落跡	山林・畑	台地	縄文～平安	縄文土器、石斧、石鏃、石鍬、玉、須恵器	1975～77年町教委・石考研発掘調査。7棟の竪穴住居などを検出。
12087		22	筋生城山奥窯跡	辰口町筋生		窯跡	山林・畑	丘陵斜面	奈良	須恵器	複数の窯の存在を推定
12088		22	筋生B遺跡	辰口町長滝・筋生		散布地	山林	丘陵裾	古墳～平安	土師器	
12089		22	長滝遺跡	辰口町長滝		散布地	田	平地	縄文・平安	縄文土器、石斧、凹石、石鍬	1990年県埋文センター発掘調査。
12090		22	宮竹遺跡	辰口町宮竹		散布地	田	平地	縄文・古墳平安～中世		
12091		22	長滝宗智寺跡	辰口町長滝		寺院跡	寺地・宅地	平地	不詳		1918年まで寺はあったという。
12092		22	長滝経塚	辰口町長滝		経塚	山林	丘陵裾	中世	和鏡8面、珠洲焼加賀焼	
12093		22	長滝ハチマン遺跡	辰口町長滝	ハチマン	散布地	山林	丘陵	平安		
12101		22	宮竹カンノンビラキB遺跡	辰口町宮竹	カンノンビラキ	散布地	山林	丘陵	平安		
12102		22	宮竹カンノンビラキC遺跡	辰口町宮竹	カンノンビラキ	窯跡	山林	丘陵	不詳		炭窯
12103		22	宮竹シロヤマ遺跡	辰口町宮竹	シロヤマ	散布地	山林	丘陵	縄文		
12104		22	宮竹ナカヤマA遺跡	辰口町宮竹	ナカヤマ	窯跡	山林	丘陵	不詳		
12105		22	宮竹ナカヤマB遺跡	辰口町宮竹	ナカヤマ	窯跡	山林	丘陵	不詳		
12106		22	宮竹オオハゲA遺跡	辰口町宮竹	オオハゲ	散布地	山林	丘陵	不詳		
12107		22	宮竹オオハゲB遺跡	辰口町宮竹	オオハゲ	散布地	山林	丘陵	縄文		
12108		22	宮竹ショウガヤシキA遺跡	辰口町宮竹	ショウガヤシキ	散布地	山林	丘陵	縄文		
12109		22	宮竹ショウガヤシキB遺跡	辰口町宮竹	ショウガヤシキ	集落跡散布地	山林	丘陵	縄文・平安		
12110		22	宮竹ショウガヤシキC遺跡	辰口町宮竹	ショウガヤシキ	集落跡	山林	丘陵	縄文		
12111		22	宮竹ショウガヤシキD遺跡	辰口町宮竹	ショウガヤシキ	集落跡散布地	山林	丘陵	縄文・平安		
12112		22	宮竹ウッショヤマA遺跡	辰口町宮竹	ウッショヤマ	集落跡散布地	山林	丘陵	旧石器・縄文・平安		
12113		22	宮竹ウッショヤマB遺跡	辰口町宮竹	ウッショヤマ	集落跡散布地	山林	丘陵	縄文・平安		
12114		22	宮竹アツサカ遺跡	辰口町宮竹	アツサカ	集落跡散布地	山林	丘陵	縄文・平安		
12115		22	灯台笹ウラノA遺跡	辰口町灯台笹	ウラノ	集落跡散布地	山林	丘陵	縄文・平安		
12116		22	灯台笹ウラノB遺跡	辰口町灯台笹	ウラノ	散布地	山林	丘陵	縄文・平安		
12117		22	灯台笹シモ遺跡	辰口町灯台笹	シモ	集落跡	山林	丘陵	旧石器・縄文		
12118		22	灯台笹ナガゲ遺跡	辰口町灯台笹	ナガゲ	集落跡	山林	丘陵	縄文・平安		
12119		22	灯台笹遺跡	辰口町灯台笹		散布地	畑	丘陵	旧石器・縄文	旧石器、縄文土器	1970年石考研発掘調査
12120		22	大口窯跡群	辰口町大口		窯跡	山林	丘陵裾	平安	須恵器、土師器	1991年町教委発掘調査7基の窯跡を確認、須恵器窯、土師器窯、炭窯跡が混在していた。
12121		22	大口A遺跡	辰口町大口		散布地	山林	丘陵斜面	奈良～平安		
12122		22	大口B遺跡	辰口町大口		散布地	田	平地	平安後期		
12123		22	大口C遺跡	辰口町大口		散布地	田	丘陵裾	縄文		
12124		22	大口D遺跡	辰口町大口	カワラキサ	散布地	田・道路	丘陵裾・平地	平安	須恵器、土師器	1991年町教委発掘調査凹地から大量に出土。
12125		22	大口E遺跡	辰口町大口		散布地	畑	平地	縄文中期		
12126		22	大口長生寺跡	辰口町大口		寺院跡	山林	丘陵斜面	不詳		
12127		22	大口中世墓	辰口町大口		墓地	山林	丘陵裾	中世	五輪塔	

表2　岩内遺跡周辺の遺跡地名表

IV 区の調査状況

IV 区の調査状況

Ⅱ　1986年度の調査

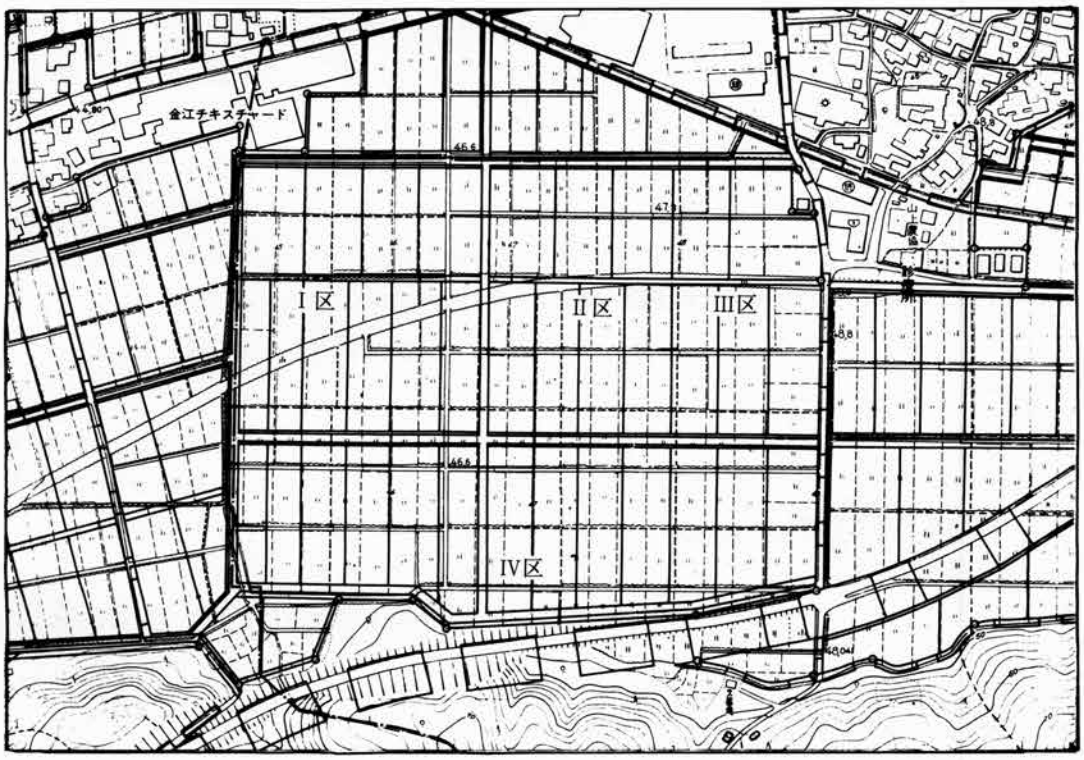
(1)　調査の経緯

本文は、県営圃場整備事業辰口中部地区の1986年度事業計画予定地に所在する岩内遺跡の発掘調査概要の報告である。当該年度の事業施工面積は約6.7ｈａで、この内の排水路施工部分を約1000㎡、幅約２ｍで延長約500ｍにわたって発掘調査を実施した。調査には、６月後半から９月中旬の約３ケ月間を要した。

(2)　調査区の位置

この年度の調査区は、岩内集落の南側に広がる水田が対象である。1980年に廃線となった鶴来町から寺井町の間を走っていた北陸鉄道能美線の軌道敷跡にそって設けられる排水路と、手取川を渡った加賀産業道路が丘陵にとりつく地点の東側の法面下に設けられる排水路を対象に実施した。

調査区は西からⅠ・Ⅱ・Ⅲ区とし、加賀産業道路沿いの調査区をⅣ区とした。またⅠ～Ⅲ区の調査区内では、西から10ｍ毎に算用数字で１・２・３と小区設定した。



第３図　1986年度の調査区

(3) 調査の概要

Ⅰ区（遺構：図４～６　遺物：図13）

Ⅰ区は調査区の西部にあたり、北陸鉄道能美線の軌道敷の盛土が数十センチにわたって厚く堆積していた。この盛土の下には耕作土層があり、その下位に1960年代に実施された流水客土によると思われる盛土層が約10cmの厚さで堆積していた。この客土層は、ⅠからⅢ区の全域にわたって確認できた。この客土層の下層には、客土以前の旧耕作土層が確認できる。旧耕作土層の下位に灰褐色粘砂質土層・黒色系粘質土層が堆積しており、中世から縄文中期の文化層となっていた。

Ⅰ区では自然流路とおもわれるＳＤ01と、小穴・小溝を検出している。遺物は、10世紀前半の須恵器坏（12）や須恵器の甕（14・15）の平安中期の資料と、14世紀ころと推定できる珠洲焼（３・13）と土師椀（４・５）などが出土している。ＳＤ01は幅320cm・深さ40cm前後の溝で調査区内で東西方向から南北方向に蛇行している。この水路の周辺の基盤層には小砂利が大量に含まれており、溝内部には黒色系の粘質土層が堆積していた。Ⅰ－６区～８区では、近代の河川の流路跡を検出している。

Ⅱ区（遺構：図７～10　遺物：図14～15）

Ⅱ区もⅠ区とおなじように、電車の軌道敷の路盤が厚く堆積しており、その下には流水客土の盛土層を挟んで二面の耕作土を確認している。下部の耕作土の下は、黄灰褐色系粘質土と黒色系粘質土が堆積しており、Ⅰ区で見られた中世の遺物は出土しなかった。

Ⅱ区は調査区の中央部で、多数の小穴や溝状遺構、土坑・流水客土以前の溝・掘立柱式建物などを検出している。Ⅱ－４区では黄色土を覆土とする近代の溝を検出している。Ⅱ－７区では、風倒木の跡と思われる土坑を検出した。Ⅱ－９区では、近代の攪乱があった。Ⅱ－10区では、東西方向に四個並ぶ柱穴を検出した。柱間は170cmで、柱穴は80×50cm前後の方形で深さは約35cmを測る。ここで検出した柱列は梁間と思われ、南北方向に主軸を持った梁行510cmの掘立柱建物と思われる。この建物の規模と主軸を確認するために、東端の柱穴の南北に調査区を拡張して試掘坑を設定した。南に拡張した試掘坑で、東端の柱穴から南に240cmの地点で柱穴を確認している。この建物をＳＢ01と呼ぶ。ＳＢ01から東に約10m離れたⅡ－20区で、東西方向に並ぶ４個の柱穴を検出している。柱穴の規模は、平面形が80×60cmの方形で深さは約30cmを測る。柱間は170cmで、東西方向の柱列が梁行とすれば510cmの規模となる。南北方向に、主軸を持つと思われるこの建物をＳＢ02と呼ぶ。ＳＢ02に近いⅡ－18区で、須恵器の盤（18・19）が出土している。この資料は９世紀前半を示すもので、ＳＢ02の年代を考える資料となる。Ⅱ区からは、この他に縄文土器の小破片が多数出土し、また打製石斧（23～28）の石斧作成時に生じたと思われる剝片を検出している。

Ⅲ区（遺構：図11～12　遺物：図16～25）

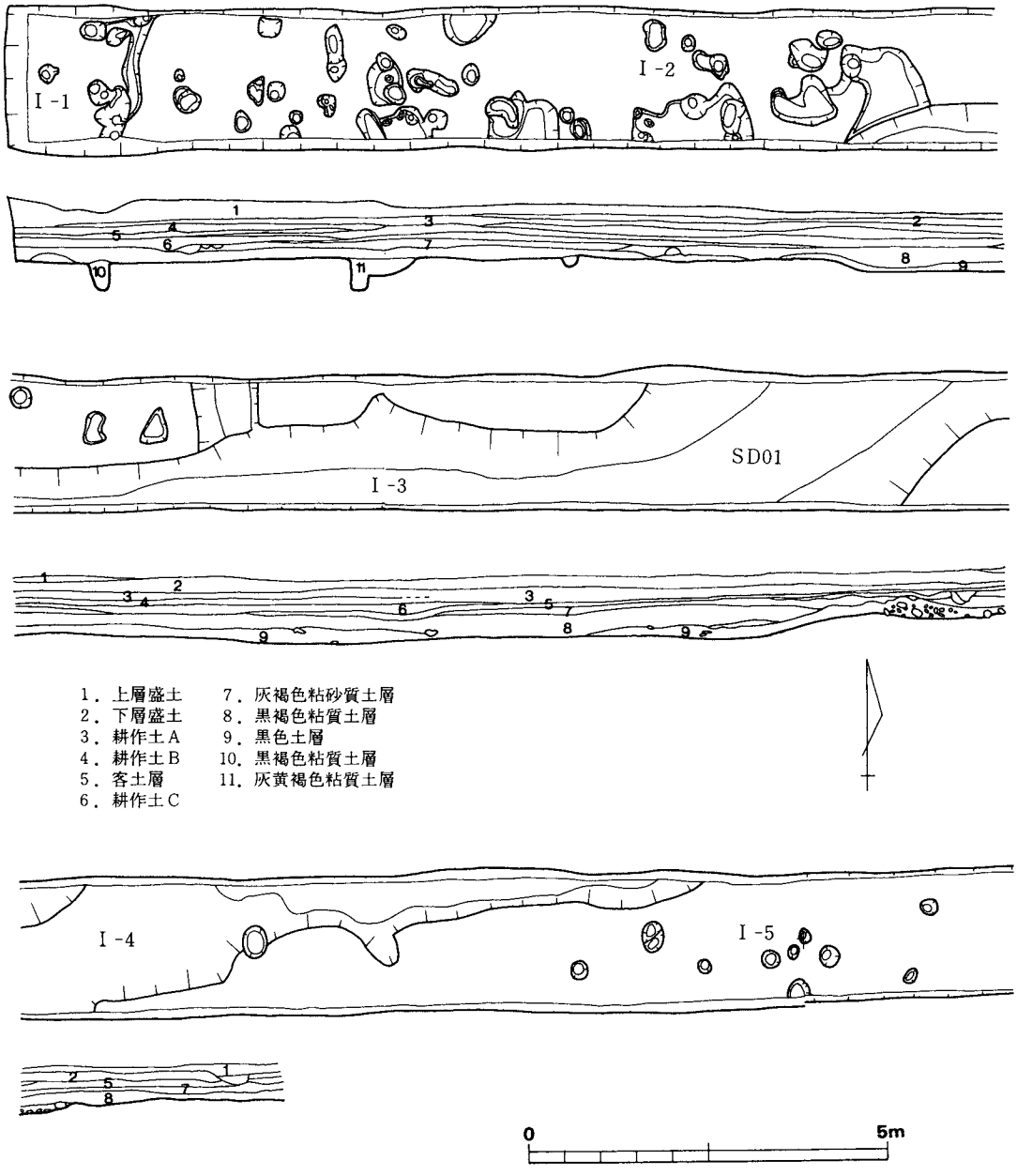
Ⅲ区は調査区の東部で、縄文土器や土坑・小穴を検出している。Ⅲ２区では新崎式を中心とする土器群（65～85）をかなりまとまって検出している。また、この調査区からは後期の土器も検出している。この他、Ⅲ１区では弥生後期の甕片（89）も検出している。

Ⅳ区（遺構：図12　遺物：図25）

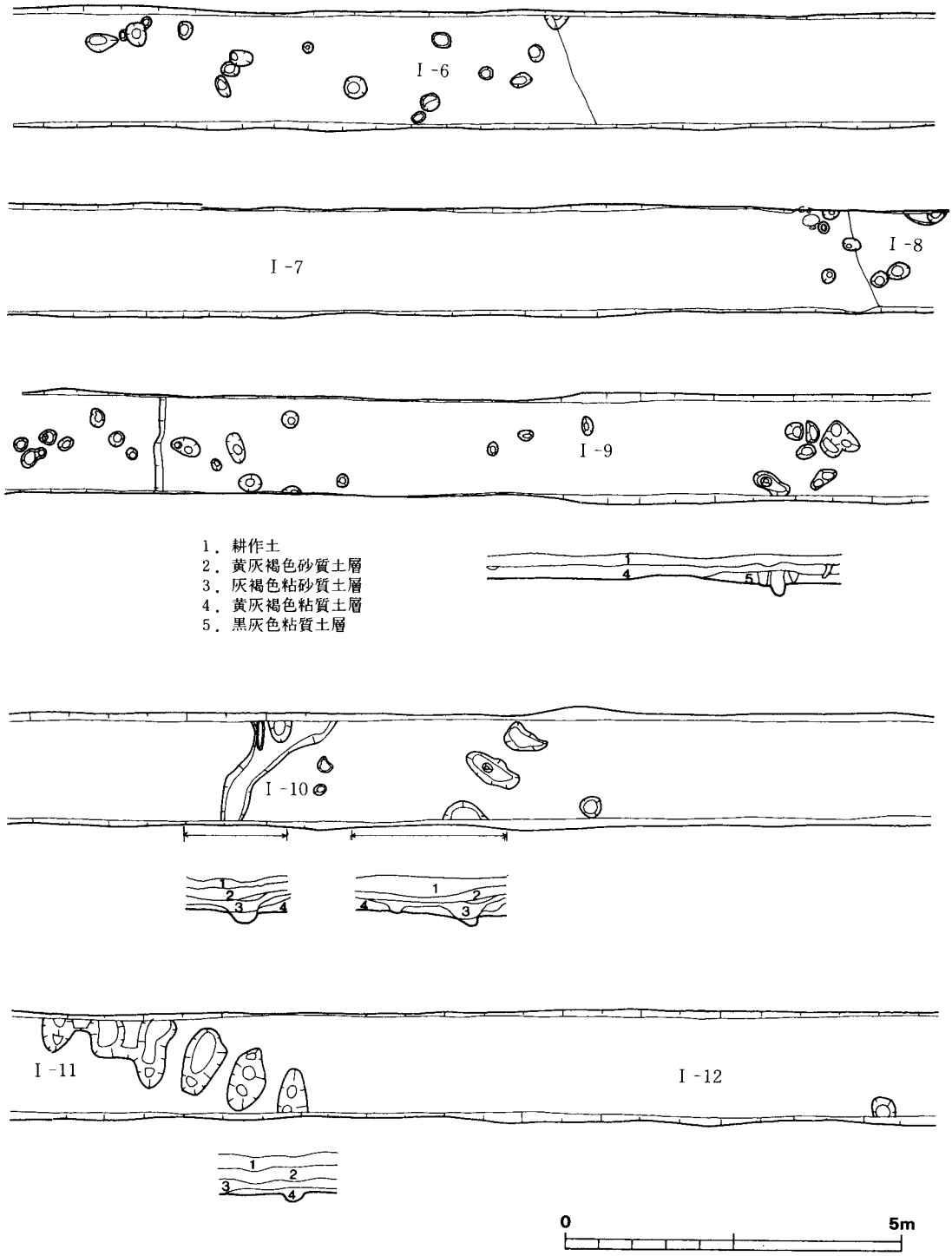
Ⅳ区は、山裾から延びる微高地の西斜面に位置し、調査区の西端では急激に深くなっていた。このため、途中で調査区の壁面が崩壊し始めたため、安全を考えて西部では基盤層までの掘削ができなかった。この傾斜部分から縄文土器片や石錐（88）を検出している。

(4) まとめ

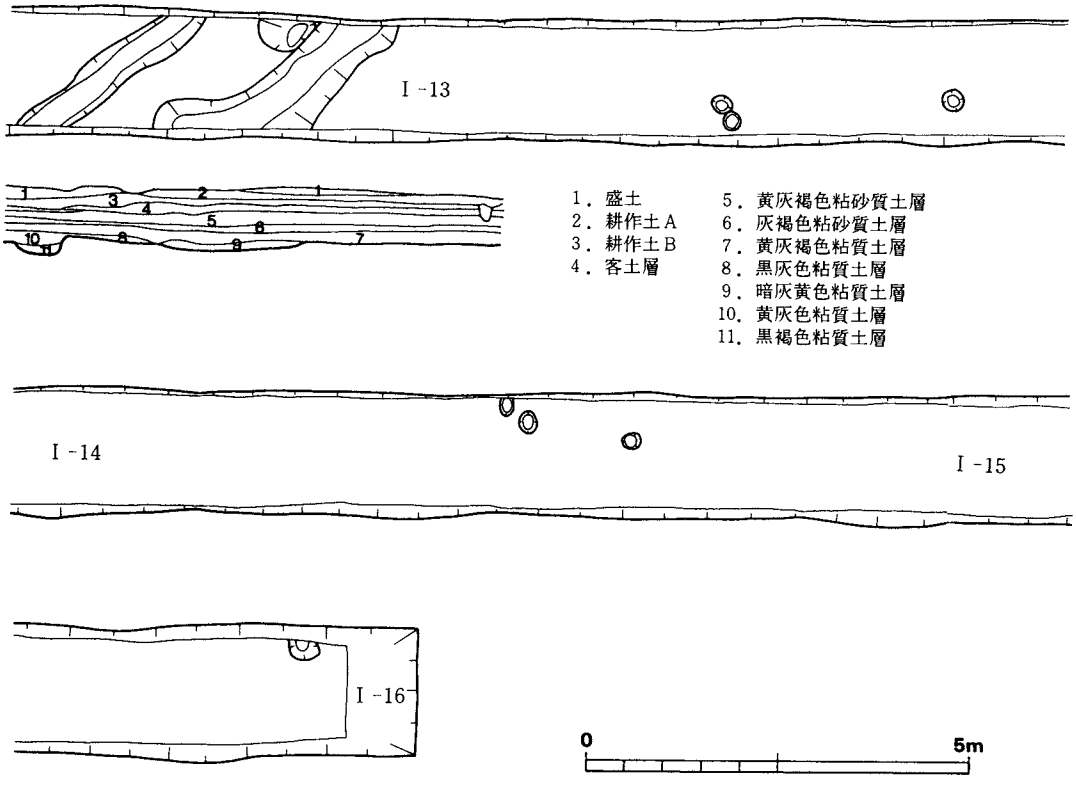
今回の調査によって、Ⅰ区～Ⅱ区にかけては9世紀から13世紀の遺跡が広がり、特にⅡ区の中央部では9世紀代の掘立柱建物が数棟が存在しているようであった。Ⅲ区とⅣ区には縄文中期初頭と後期の遺跡が広がっていることが明らかになった。この他に、圃場の工事中に山裾から中世の珠洲焼片や須恵器片を採集しており、岩内集落の山手には古代から中世の遺跡が存在しているようであった。



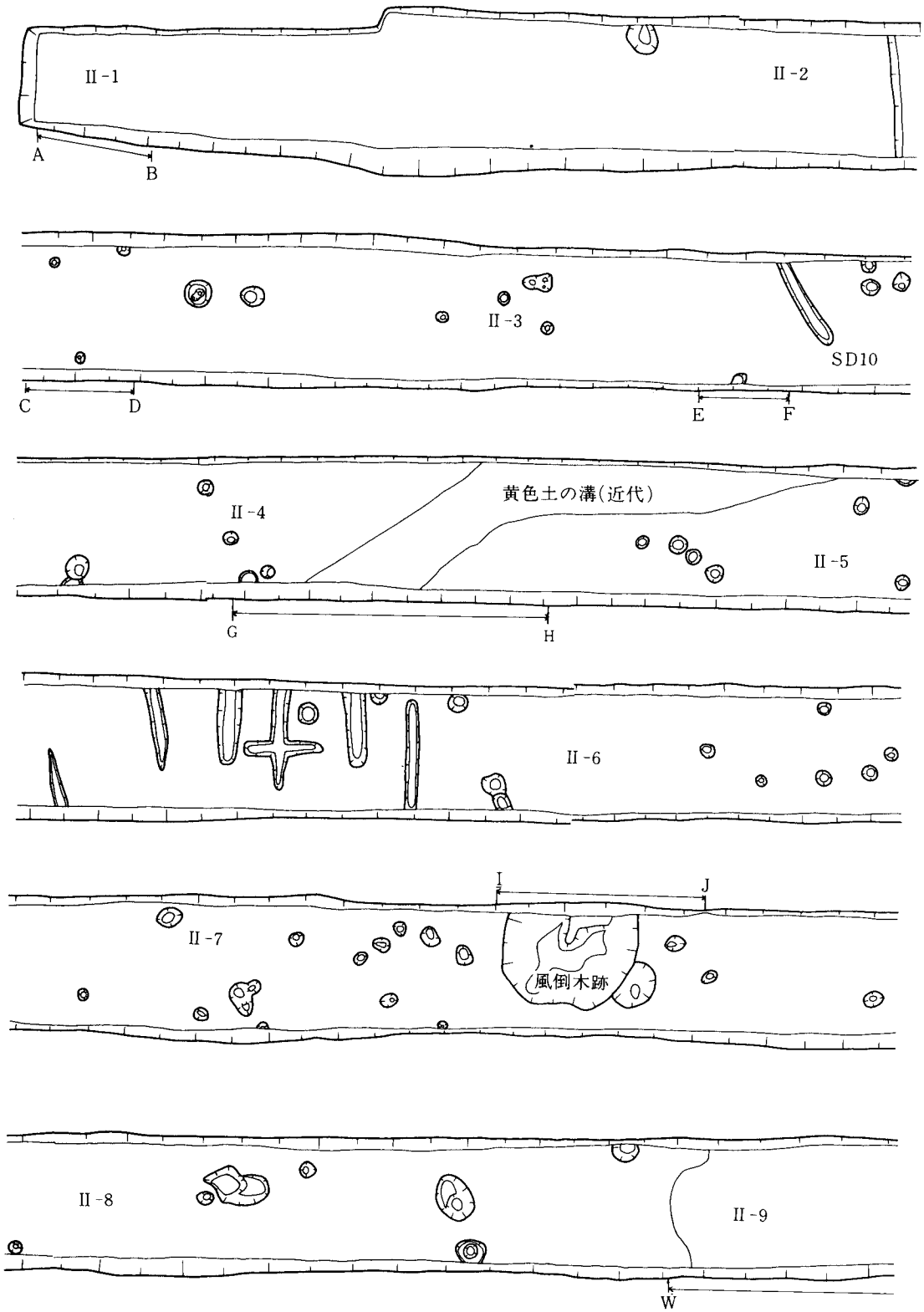
第4図　1986年度調査Ⅰ区の遺構・土層実測図



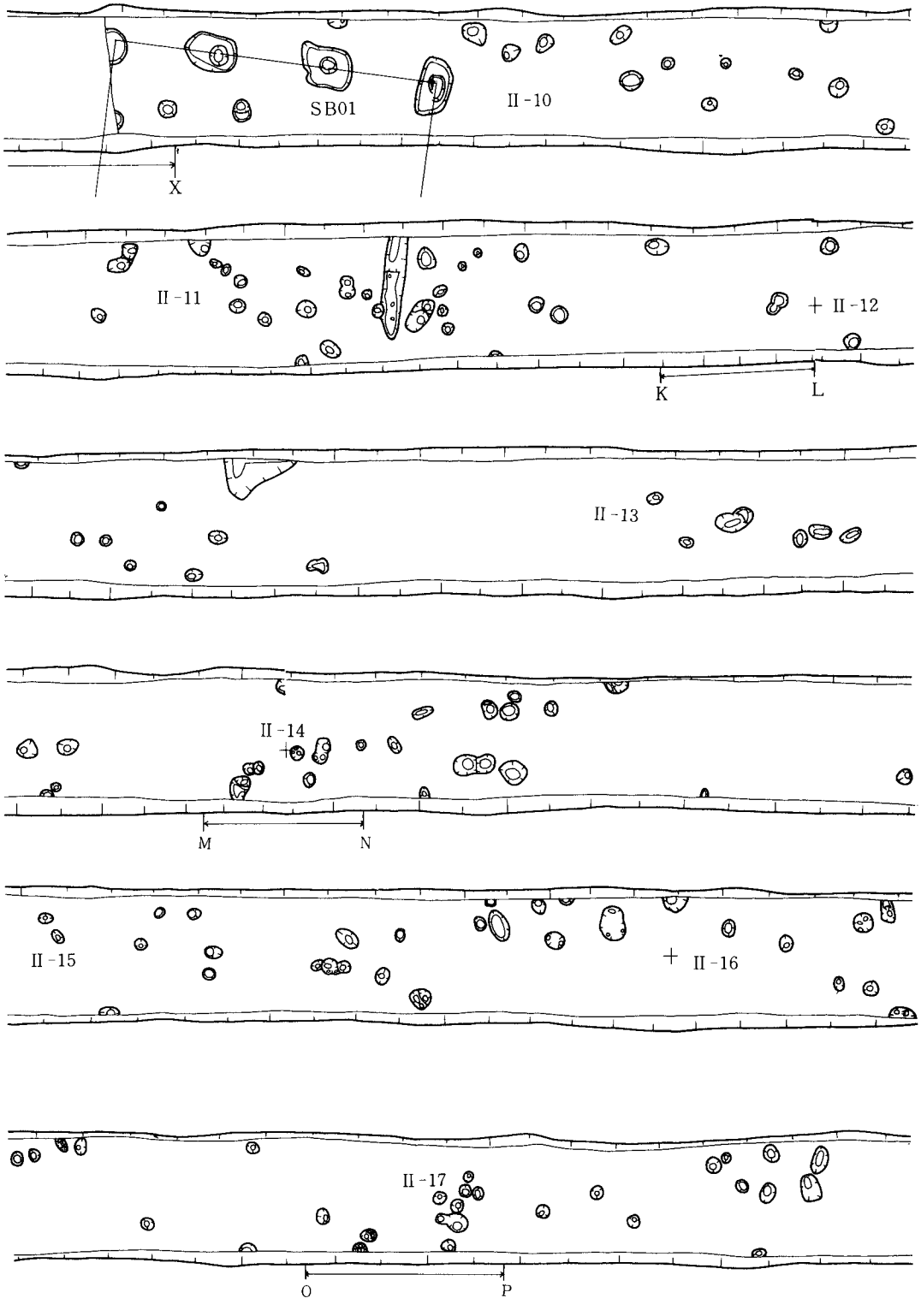
第５図　1986年度調査Ｉ区の遺構・土層実測図



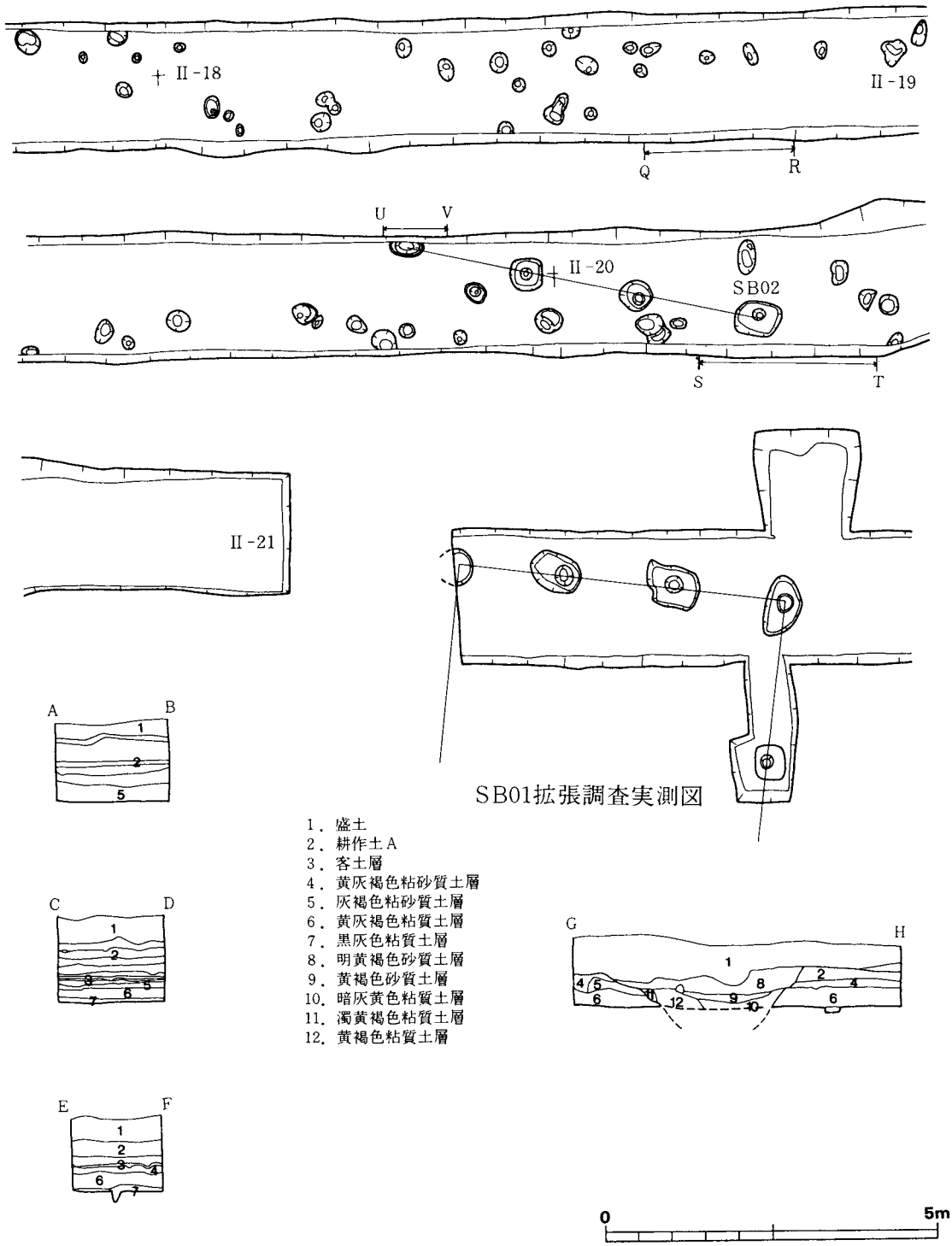
第6図　1986年度調査Ⅰ区の遺構・土層実測図



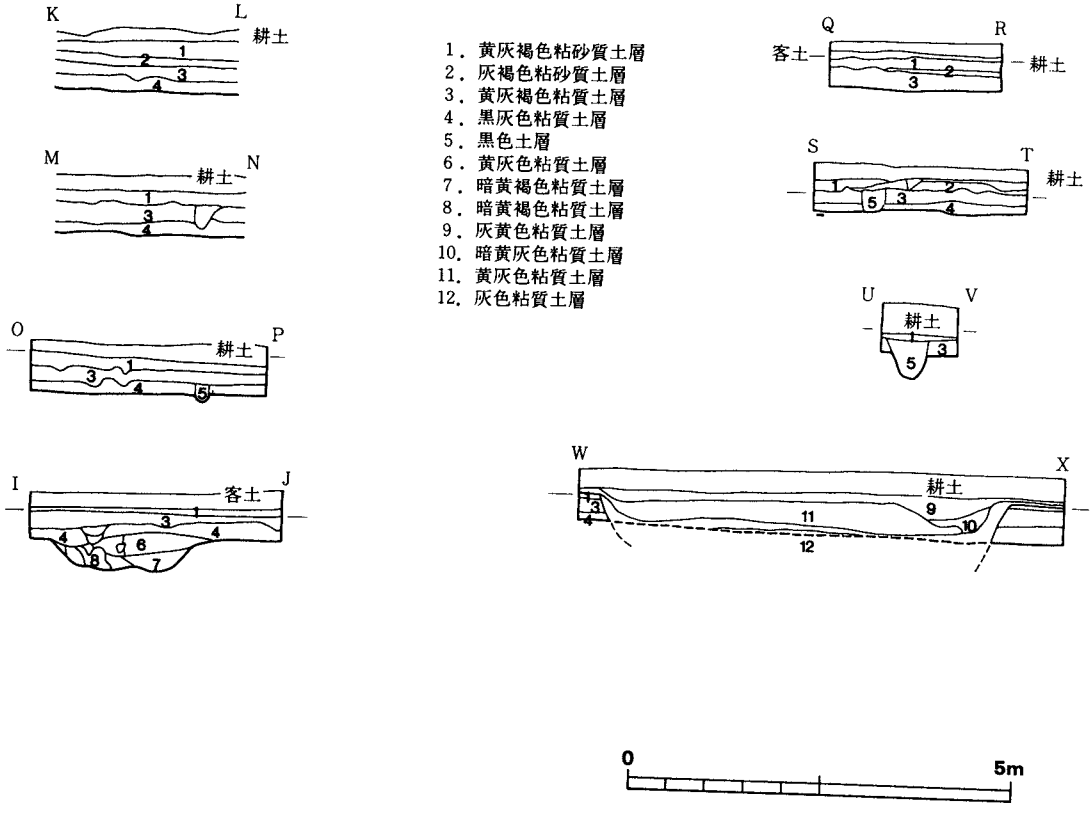
第7図　1986年度調査II区の遺構実測図



第８図　1986年度調査Ⅱ区の遺構実測図

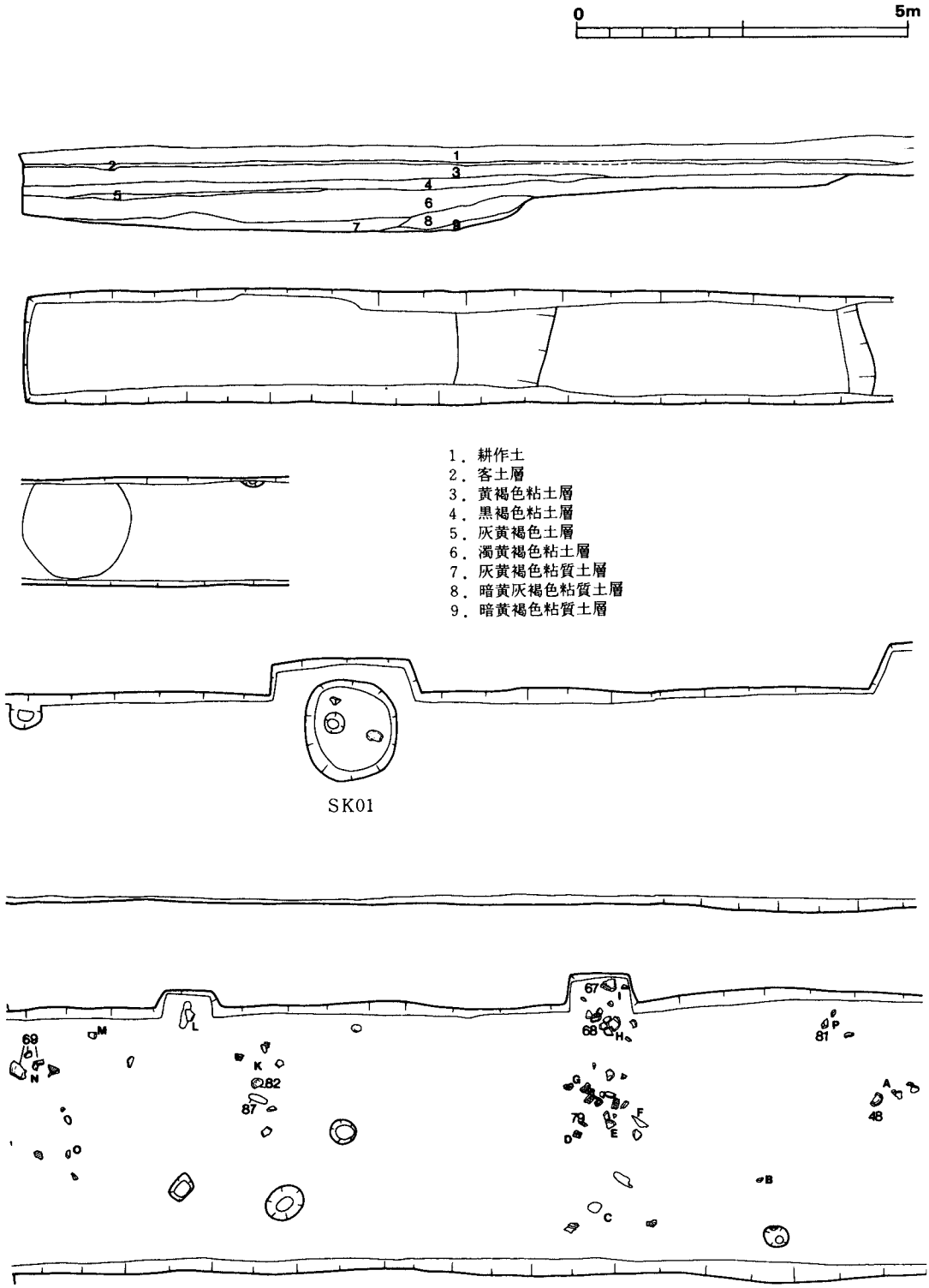


第9図　1986年度調査II区の遺物・土層実測図

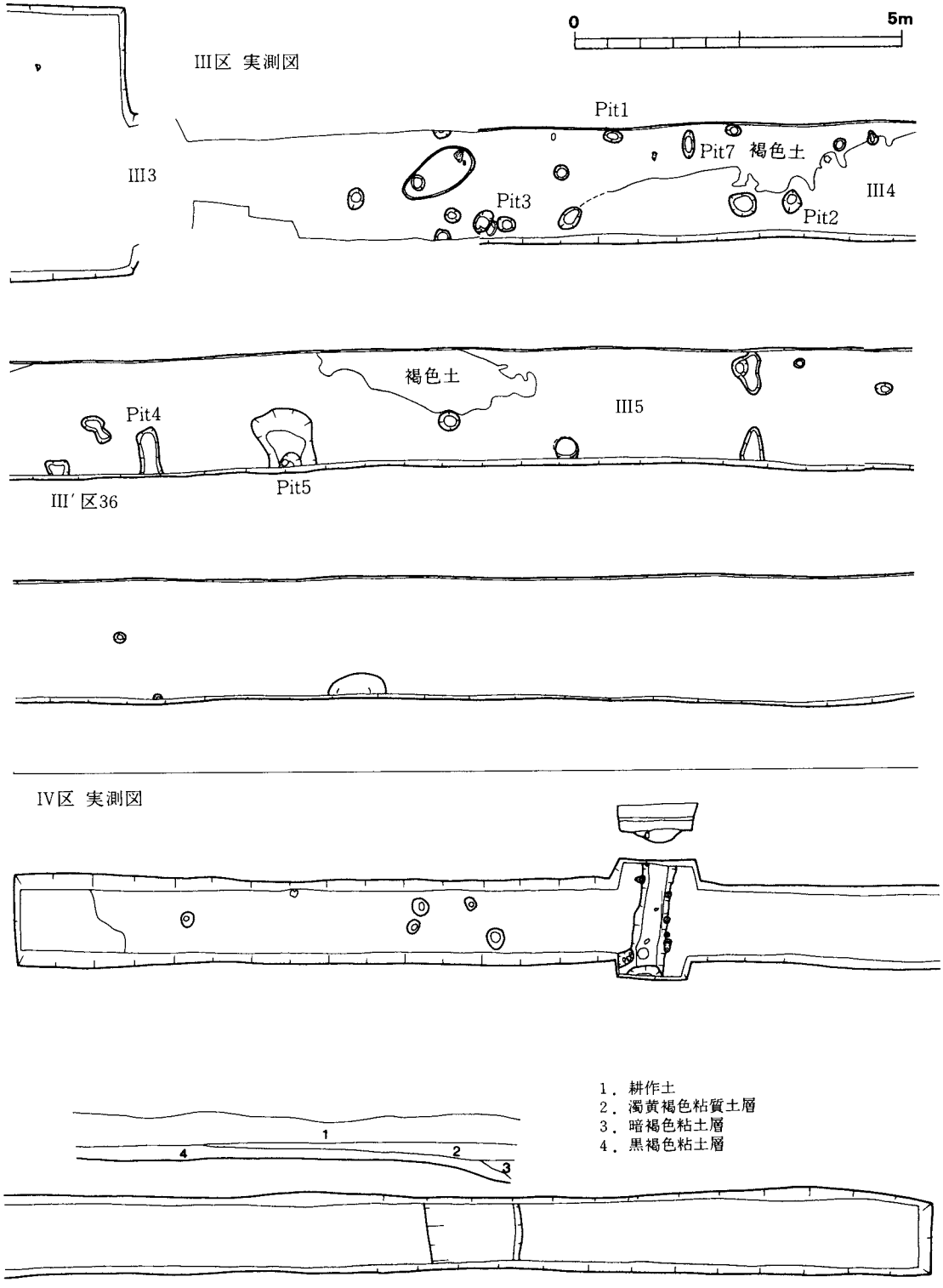


1．黄灰褐色粘砂質土層
2．灰褐色粘砂質土層
3．黄灰褐色粘質土層
4．黒灰色粘質土層
5．黒色土層
6．黄灰色粘質土層
7．暗黄褐色粘質土層
8．暗黄褐色粘質土層
9．灰黄色粘質土層
10．暗黄灰色粘質土層
11．黄灰色粘質土層
12．灰色粘質土層

第10図　1986年度調査II区の土層実測図



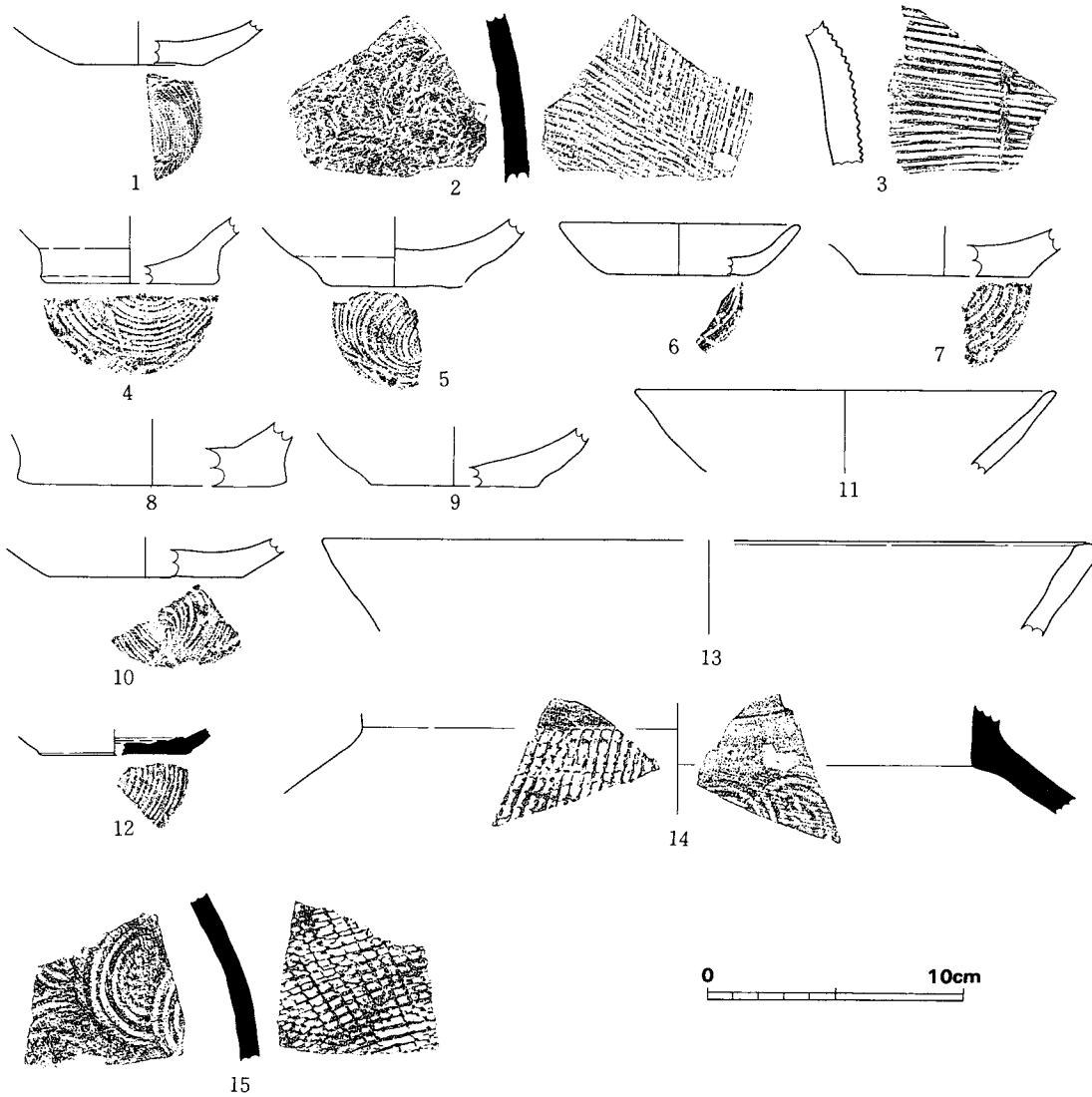
第11図　1986年度調査III区の遺構・土層実測図



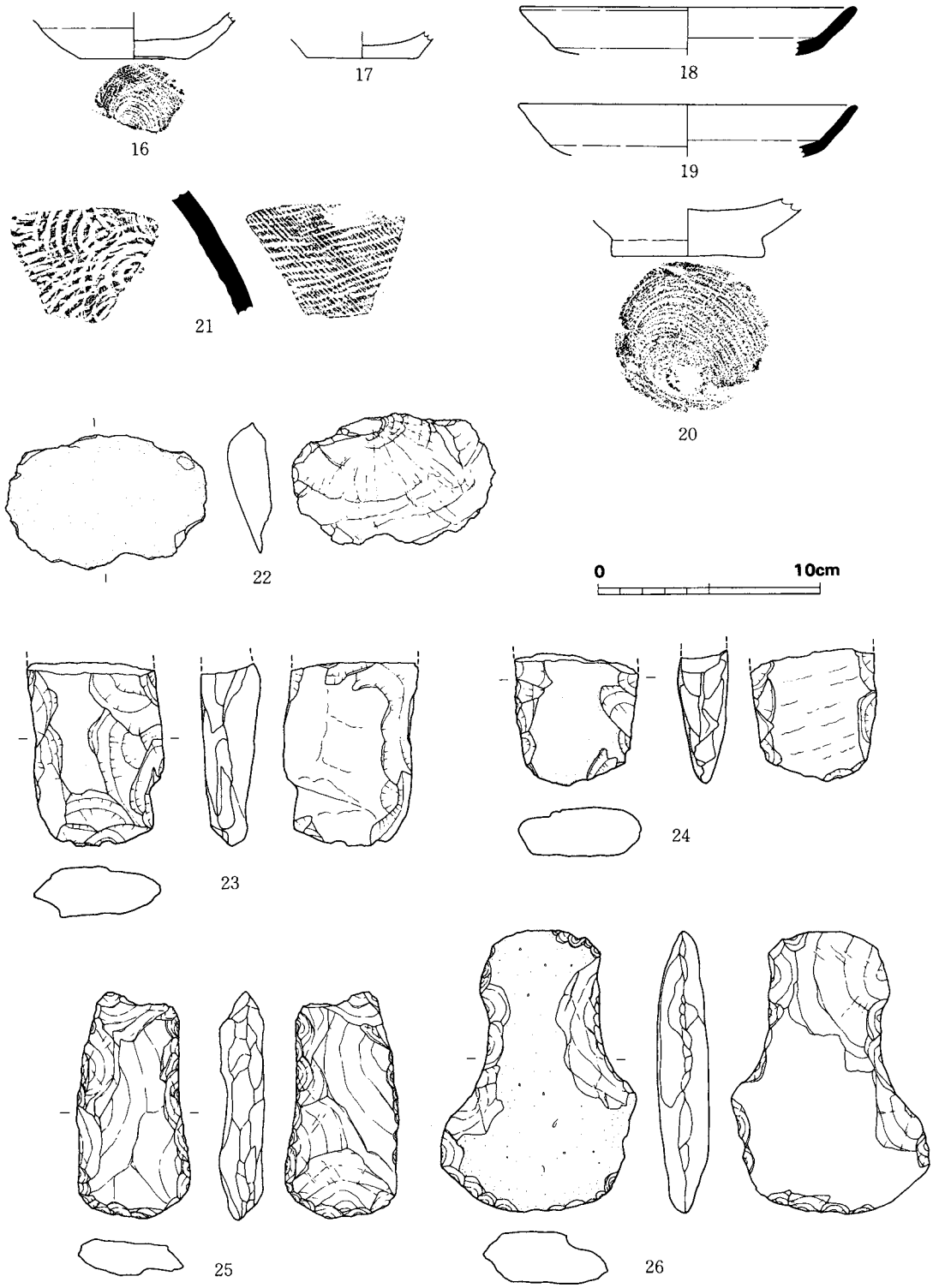
第12図　1986年度調査III、IV区の遺構、土層実測図

図版	番号	種別	種類	部位	調査区	遺構	遺物番号	備考
13	1	土器	土師器椀	底部	表採			
13	2	土器	須恵器甕	体部	表採			
13	3	土器	珠洲焼甕	体部	表採			
13	4	土器	土師器椀	底部	Ⅰ－2区			
13	5	土器	土師器椀	底部	Ⅰ－2区			内面に煤付着
13	6	土器	土師器皿		Ⅰ－3区	ＳＤ０１		
13	7	土器	土師器皿	底部	Ⅰ－3区	ＳＤ０１		
13	8	土器	縄文深鉢	底部	表採			
13	9	土器	土師器椀	底部	Ⅰ－2区	ＰＯ５		
13	10	土器	土師器椀	底部	Ⅰ－3区	ＰＯ３		
13	11	土器	土師器椀	口縁	Ⅰ－2区	ＳＤ０１		
13	12	土器	須恵器坏	底部	Ⅰ－3区			
13	13	土器	珠洲焼擂鉢	口縁	Ⅰ－3区	ＳＤ０１		
13	14	土器	須恵器甕	頸部	Ⅰ－2区			
13	15	土器	須恵器甕	体部	Ⅰ－2区			
14	16	土器	土師器椀	底部	Ⅱ－12区			
14	17	土器	土師器椀	底部	Ⅱ－1区			
14	18	土器	須恵器甕		Ⅱ－18区	ＰＯ４		
14	19	土器	須恵器甕		Ⅱ－18区	ＰＯ４		
14	20	土器	須恵器椀	底部	Ⅱ－3区	ＳＤ１０		
14	21	土器	須恵器甕	体部	Ⅰ－2区			
14	22	石器	剥片		Ⅱ－8区			
14	23	石器	打製石斧		Ⅱ区	表採		176.8g以上
14	24	石器	打製石斧		Ⅱ３区			96g以上
14	25	石器	打製石斧		Ⅱ－11区			127.6g
14	26	石器	打製石斧		Ⅱ－13区			263.1g
15	27	石器	打製石斧		Ⅱ－1区			718.6g
15	28	石器	打製石斧		Ⅱ区排土			674.4g以上
16	29	土器	縄文深鉢	口縁	Ⅲ－1区			
16	30	土器	縄文深鉢	口縁	Ⅲ－1区	ＳＫＯ１		口縁内面に多量のススト付着
16	31	土器	縄文深鉢	体部	Ⅲ－1区			
17	32	土器	縄文深鉢	口縁	Ⅲ－1区			
17	33	土器	縄文深鉢	口縁	Ⅲ－1区			
17	34	土器	縄文深鉢	口縁	Ⅲ－1区			
17	35	土器	縄文深鉢	口縁	Ⅲ－1区			
17	36	土器	縄文深鉢	口縁	Ⅲ－1区			
18	37	土器	縄文鉢	口縁	Ⅲ－1区			
18	38	土器	縄文鉢	口縁	Ⅲ－1区			
18	39	土器	縄文深鉢	体部	Ⅲ－1区	ＳＫ１７		
18	40	土器	縄文鉢	口縁	Ⅲ－1区			
18	41	土器	縄文深鉢	体部	Ⅲ－1区			
18	42	土器	縄文浅鉢	口縁	Ⅲ－1区			
18	43	土器	縄文鉢	底部				
18	44	土器	縄文鉢	底部				
18	45	土器	縄文鉢	底部				
18	46	土器	縄文鉢	底部				
18	47	土器	縄文鉢	底部				
18	48	土器	縄文鉢	底部		土器溜まり		
19	49	石器	打製石斧		Ⅲ－1区			632.4g
19	50	石器	打製石斧		Ⅲ－1区			66g以上
19	51	石器	打製石斧		Ⅲ－1区			144.3g
19	52	石器	叩き石		Ⅲ－1区			183.4g
19	53	石器	叩き石		Ⅲ－1区			347.2g
20	54	石器	台石		Ⅲ－1区			1852.3g
20	55	石器	擦り石		Ⅲ－2区	ＳＫＯ１		647.2g以上
20	56	石器	剥片		Ⅲ－1区			45.5g
20	57	石器	剥片		Ⅲ－1区	ＳＫＯ１		87.2g
20	58	石器	剥片		Ⅲ－1区			102.5g
20	59	石器	剥片					41.8g
21	60	石器	打製石斧					437g以上
21	61	石器	磨製石斧		Ⅲ区			271.1g以上
21	62	石器	打製石斧		表採			390g
21	63	石器	打製石斧		表採			111.6g／Ⅲ区北の水田
21	64	石器	打製石斧		表採			234.9g以上
22	65	土器	深鉢		Ⅲ－2区		I5.I7.I8.I10.I12 .I14.I16	
23	66	土器	深鉢	口縁	Ⅲ－2区		M5	
23	67	土器	深鉢	体部	Ⅲ－2区	土器溜まり	N1.N2.N3.N5	
23	68	土器	深鉢	口縁	Ⅲ－2区	土器溜まり	P3	
23	69	土器	深鉢	口縁	Ⅲ－2区			
23	70	土器	深鉢	口縁	Ⅲ－2区	土器溜まり		
23	71	土器	深鉢	口縁	Ⅲ－2区	土器溜まり	G7	
23	72	土器	深鉢	口縁	Ⅲ－2区			
23	73	土器	深鉢	口縁	Ⅲ－2区			
23	74	土器	深鉢	体部	Ⅲ－2区	土器溜まり	G2	
23	75	土器	深鉢	体部	Ⅲ－2区	土器溜まり		
23	76	土器	深鉢	体部	Ⅲ－2区	土器溜まり		
23	77	土器	深鉢	体部	Ⅲ－2区	土器溜まり	D2	
24	78	土器	深鉢	口縁	Ⅲ－2区			
24	79	土器	深鉢	口縁	Ⅲ－2区	土器溜まり	P2	
24	80	土器	深鉢	底部	Ⅲ－2区	土器溜まり	K5	
24	81	土器	深鉢	底部	Ⅲ－2区	土器溜まり		
24	82	土器	縄文鉢	体部	Ⅲ－2区			
24	83	石器	剥片		Ⅲ－2区	土器溜まり		180.2g
24	84	石器	剥片		Ⅲ－2区	土器溜まり		55.8g
24	85	石器	叩き石		Ⅲ－2区	土器溜まり	K6	597.9g
25	86	石器	打製石斧		表採			120.3g以上
25	87	石器	打製石斧		表採			88.7g以上
25	88	石器	石鏃		Ⅳ区			1.3g
25	89	土器	弥生壺	口縁	Ⅲ－1区	表採		

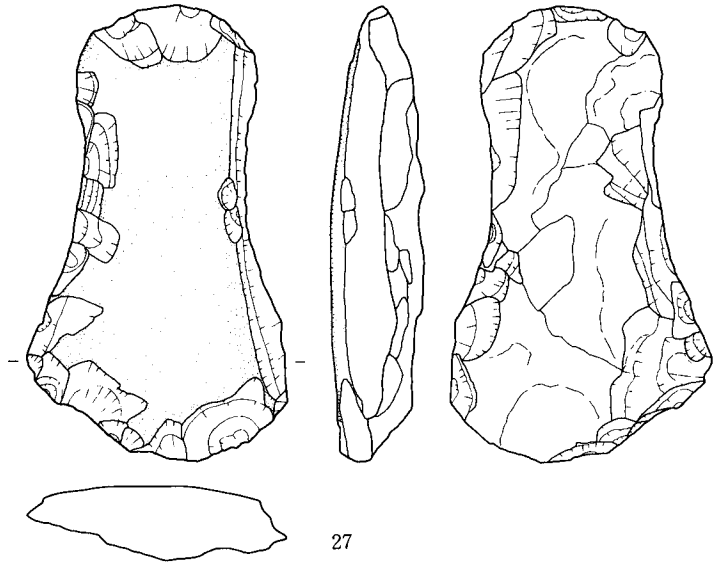
表３　1986年度調査の遺物一覧表

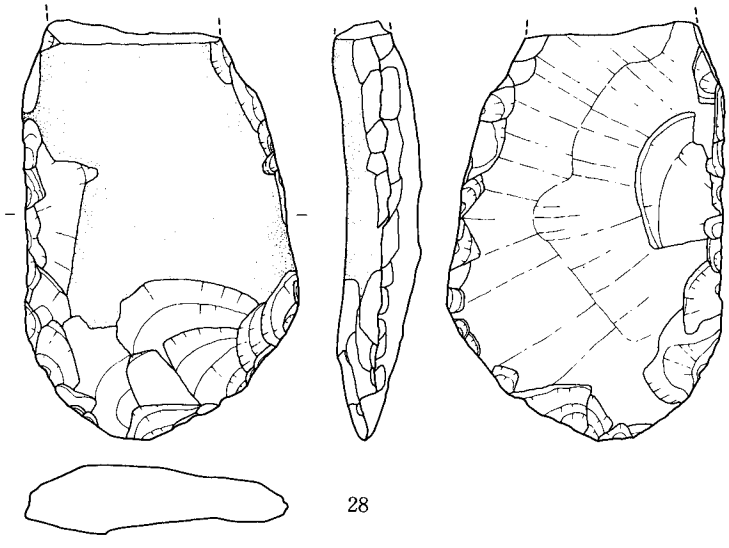


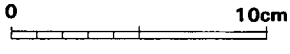
第13図　1986年度調査Ⅰ区出土の遺物実測図



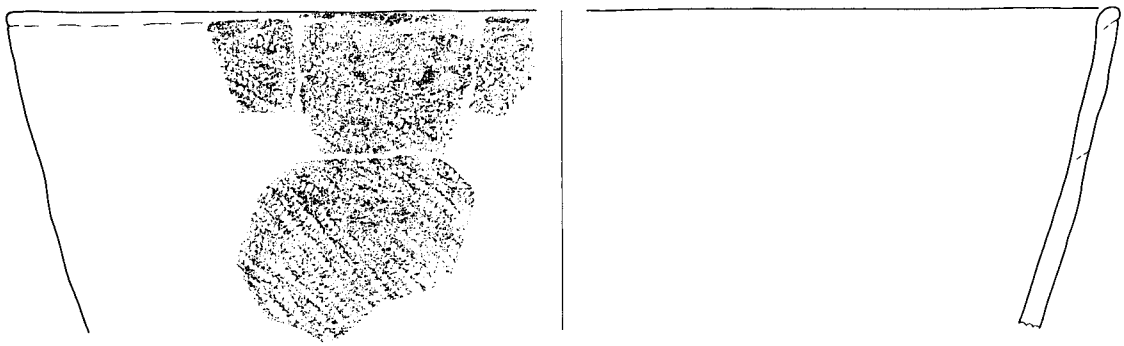
第14図　1986年度調査II区出土の遺物実測図



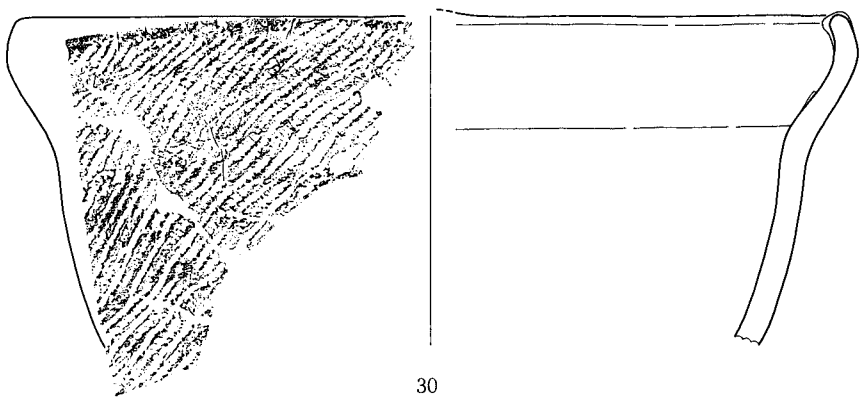




第15図　1986年度調査Ⅱ区出土の遺物実測図

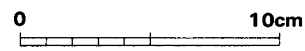


29

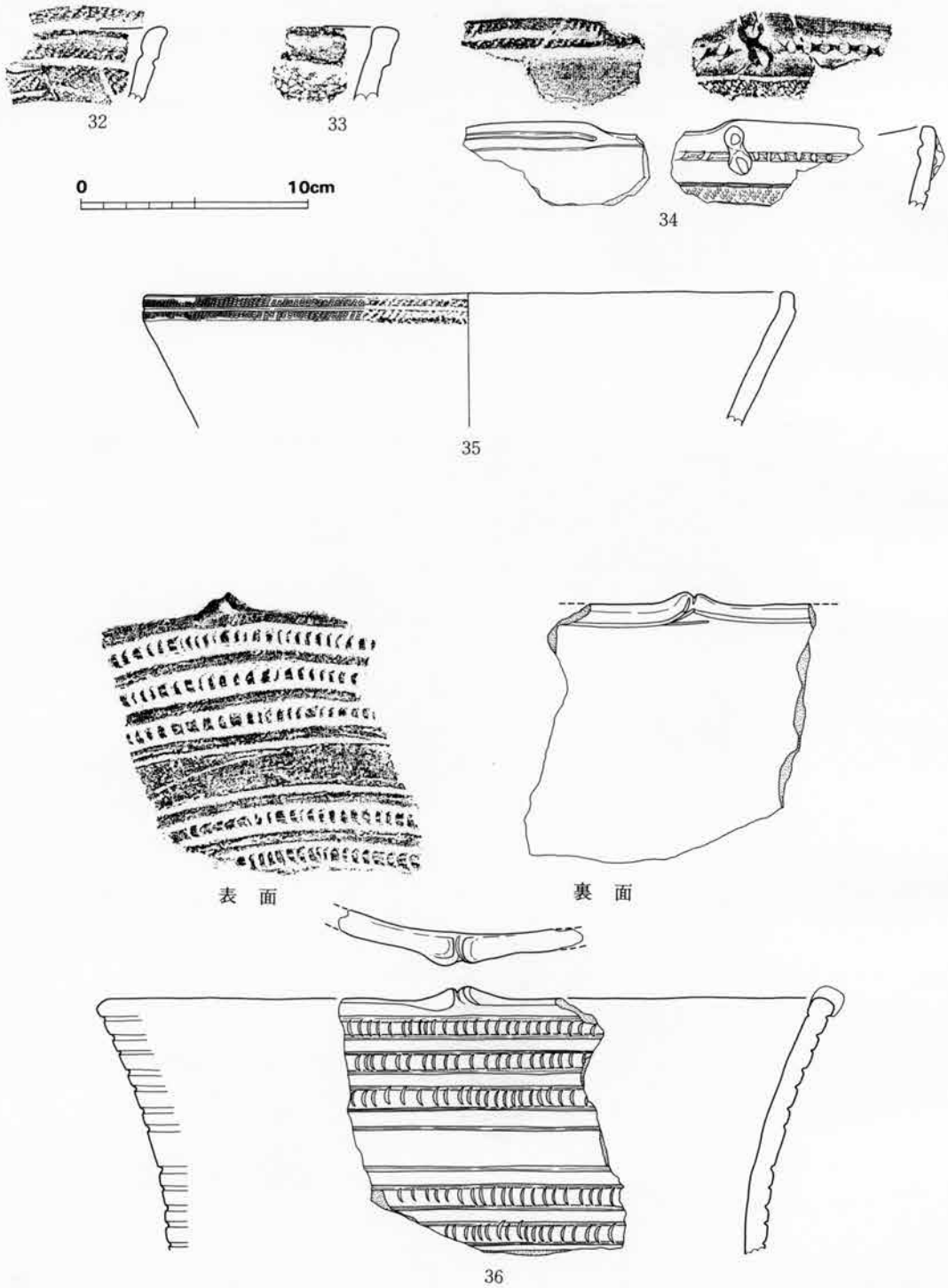


30

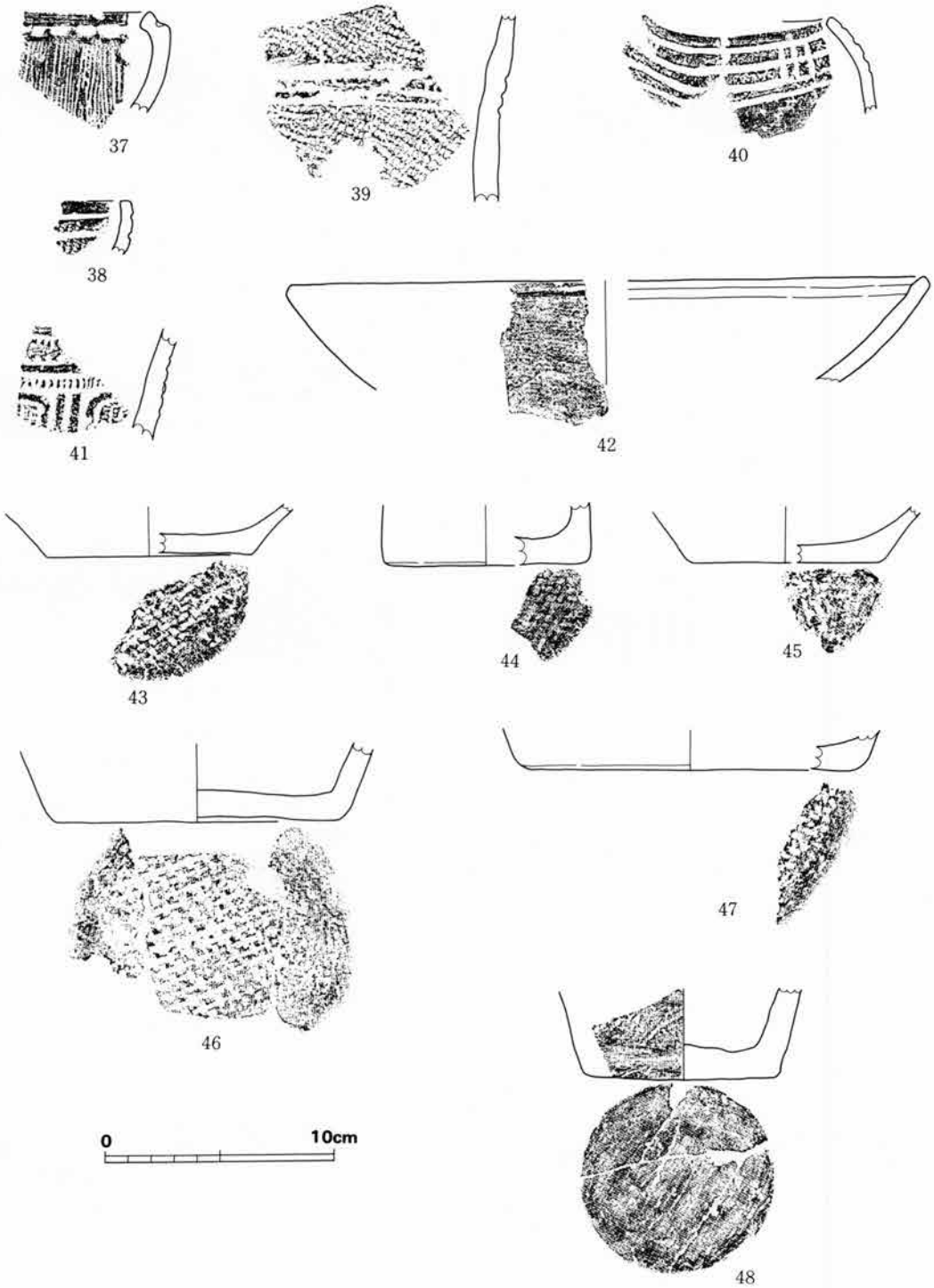
31



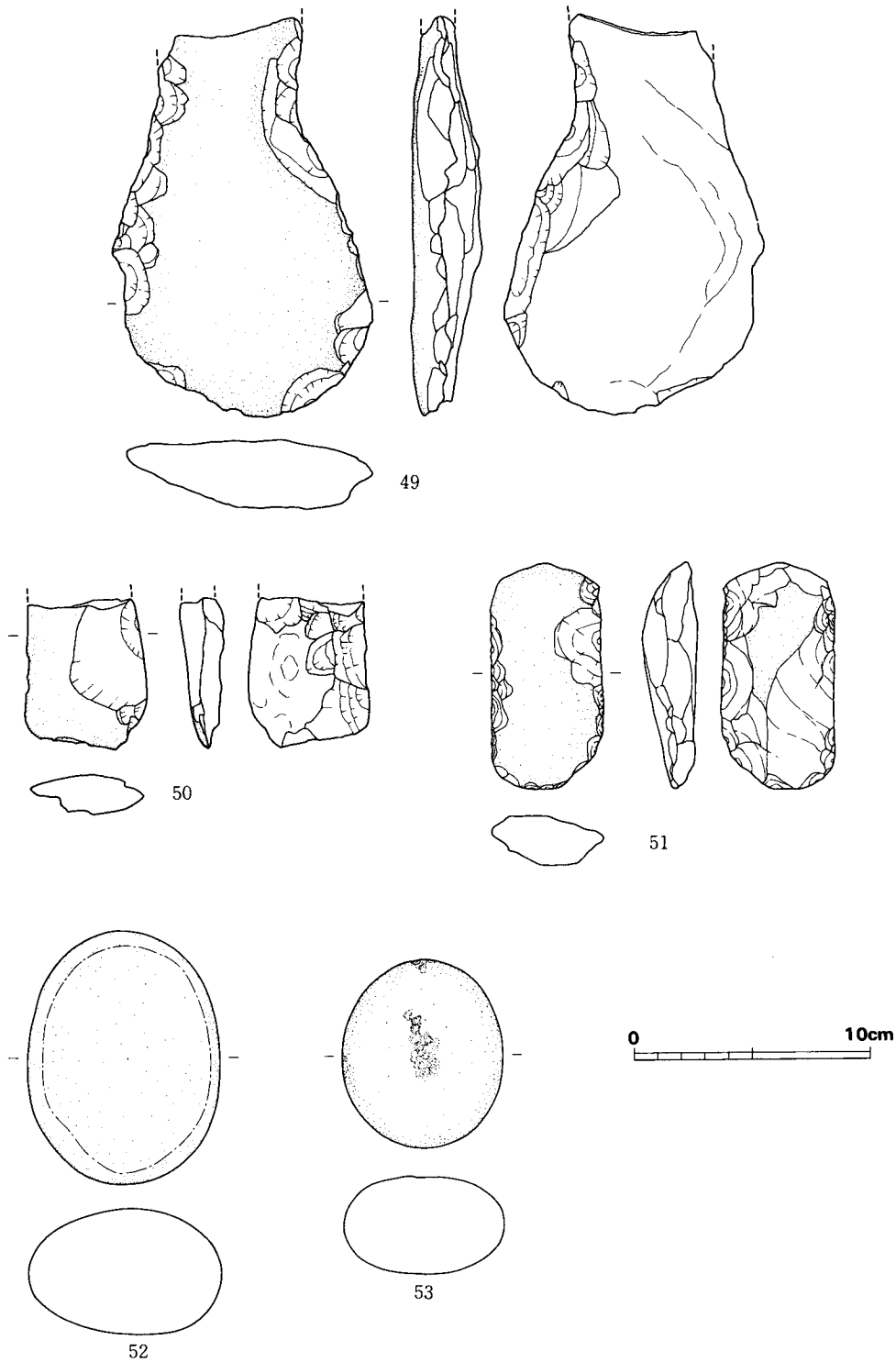
第16図　1986年度調査III区出土の遺物実測図



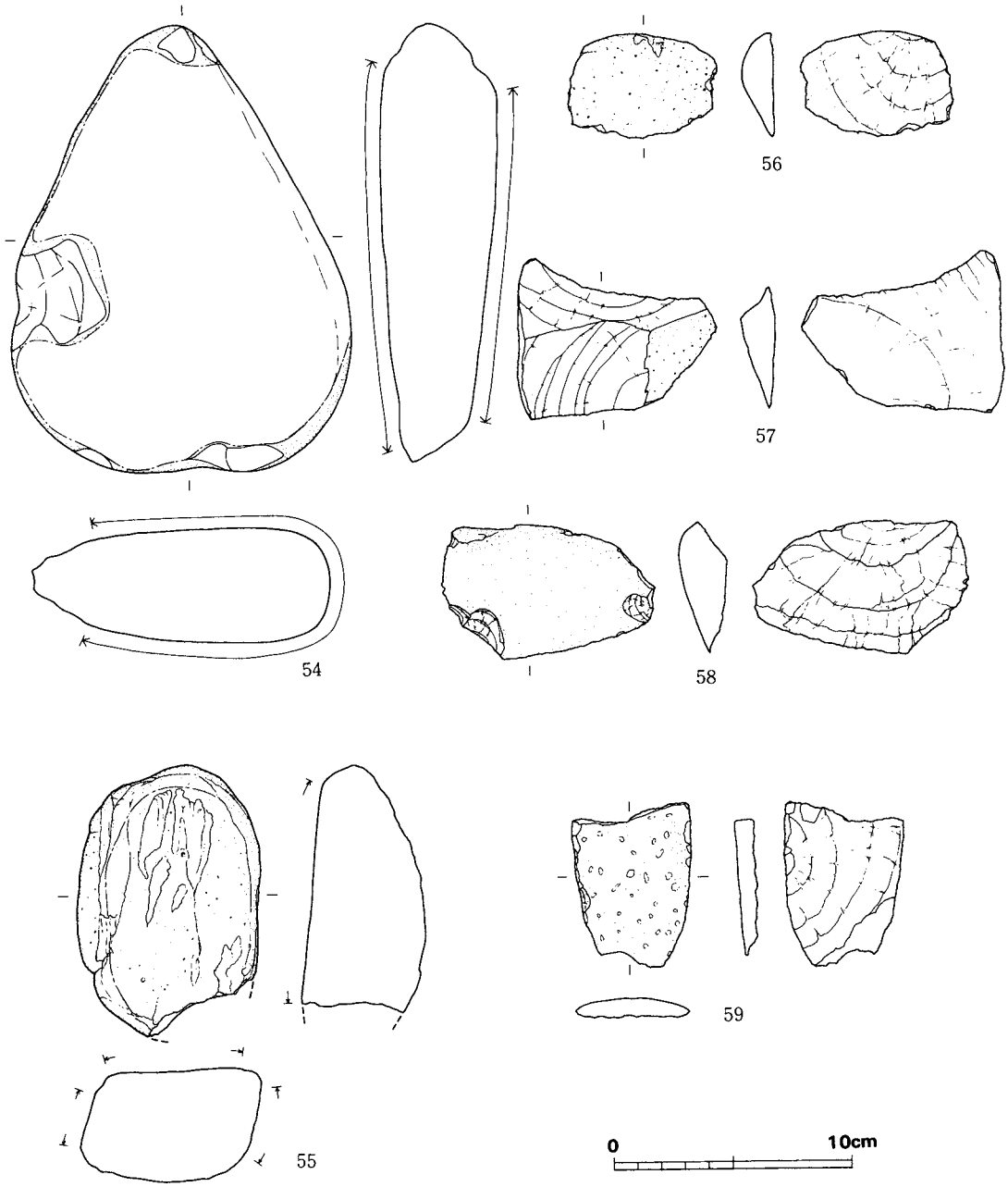
第17図　1986年度調査III区出土の遺物実測図



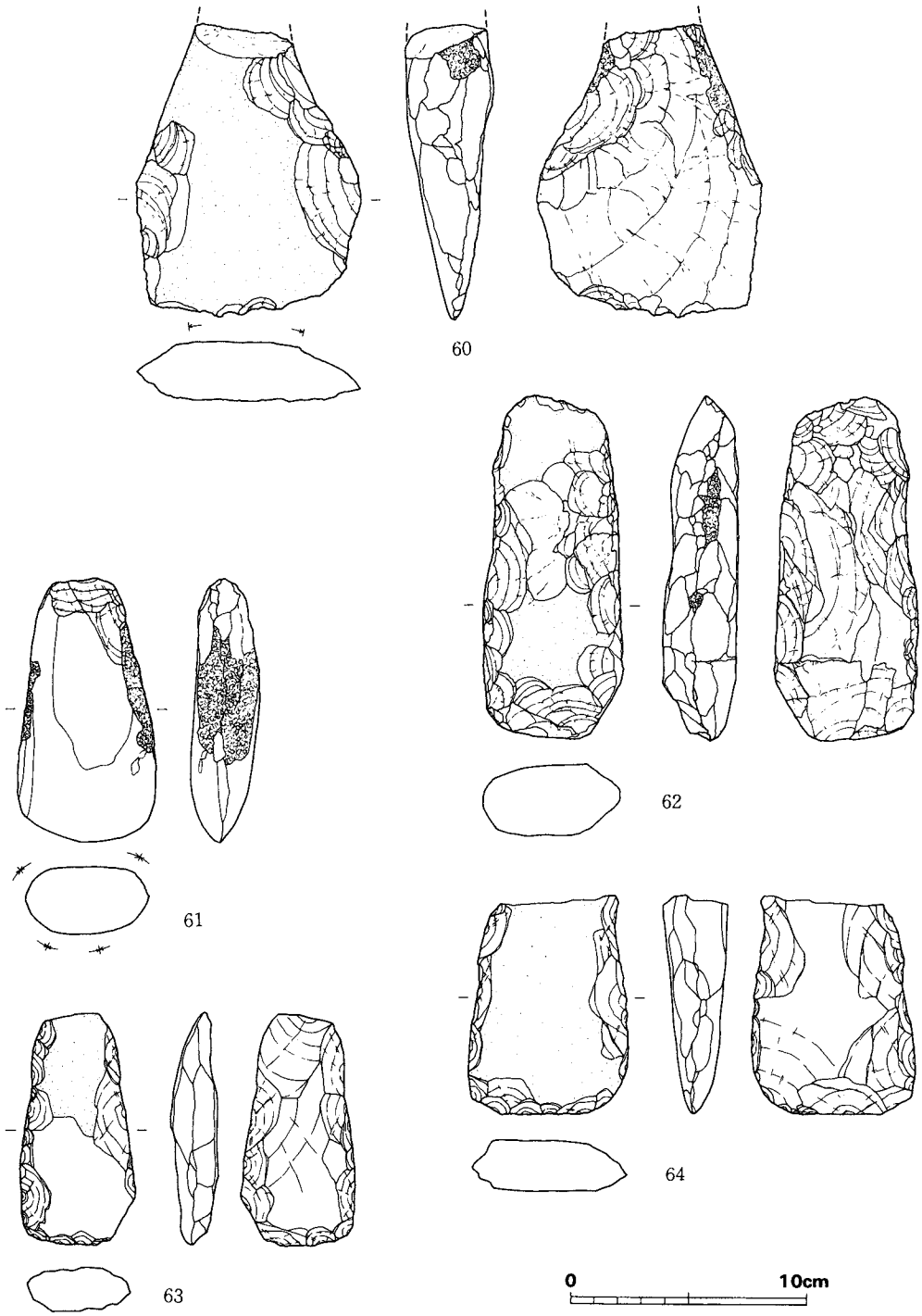
第18図　1986年度調査III区出土の遺物実測図



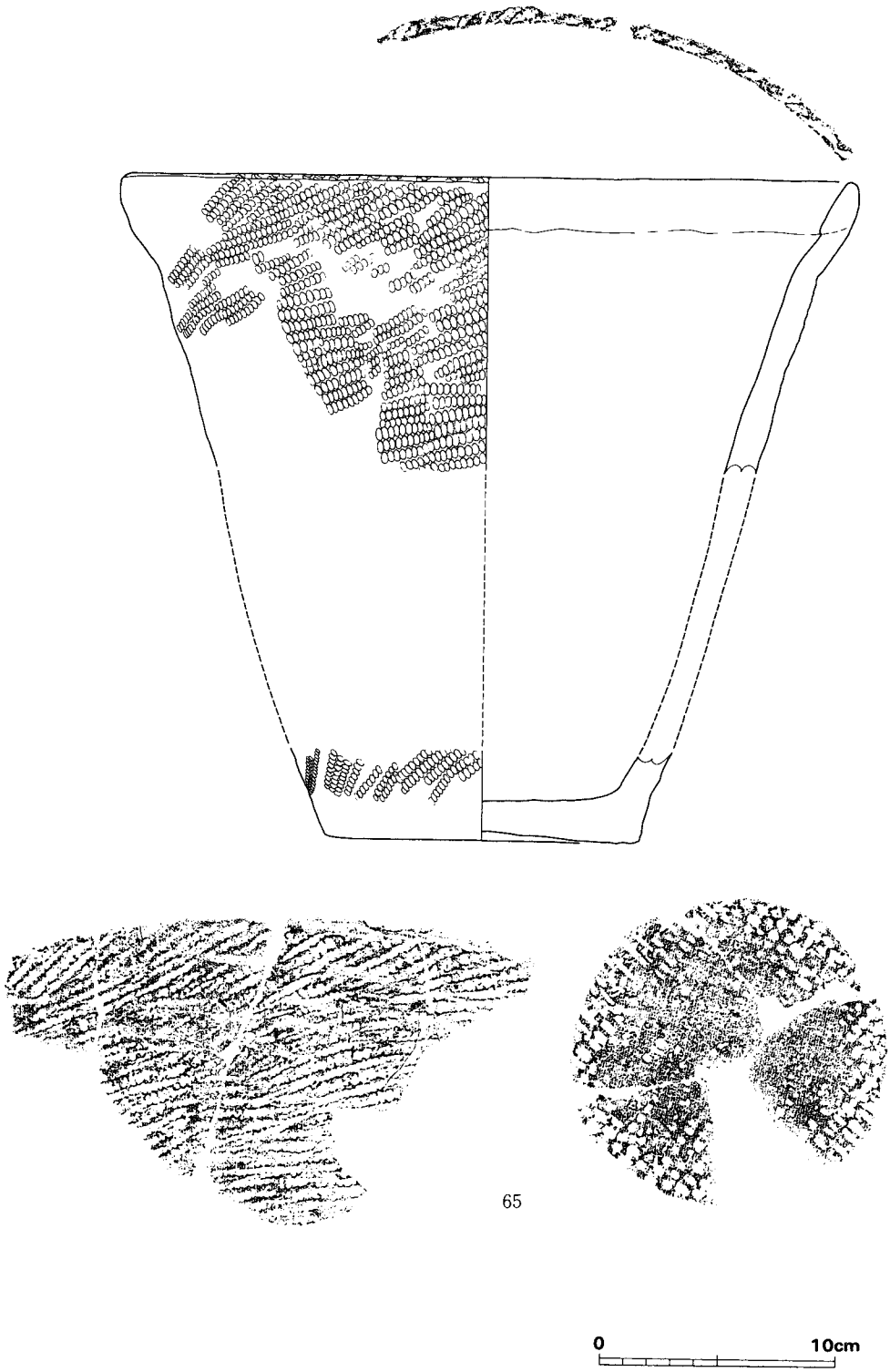
第19図　1986年度調査III区出土の遺物実測図



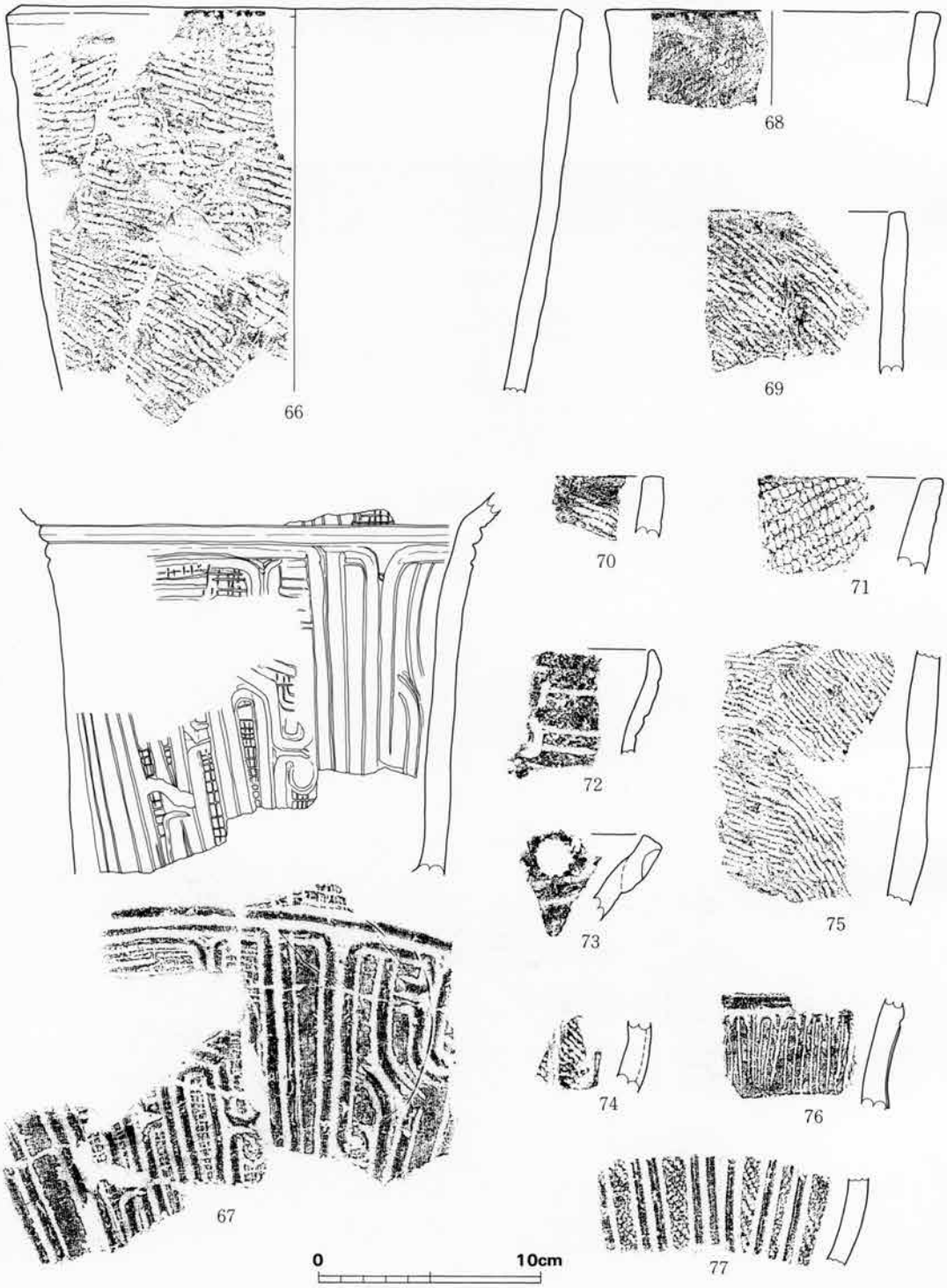
第20図　1968年度調査III区出土の遺物実測図



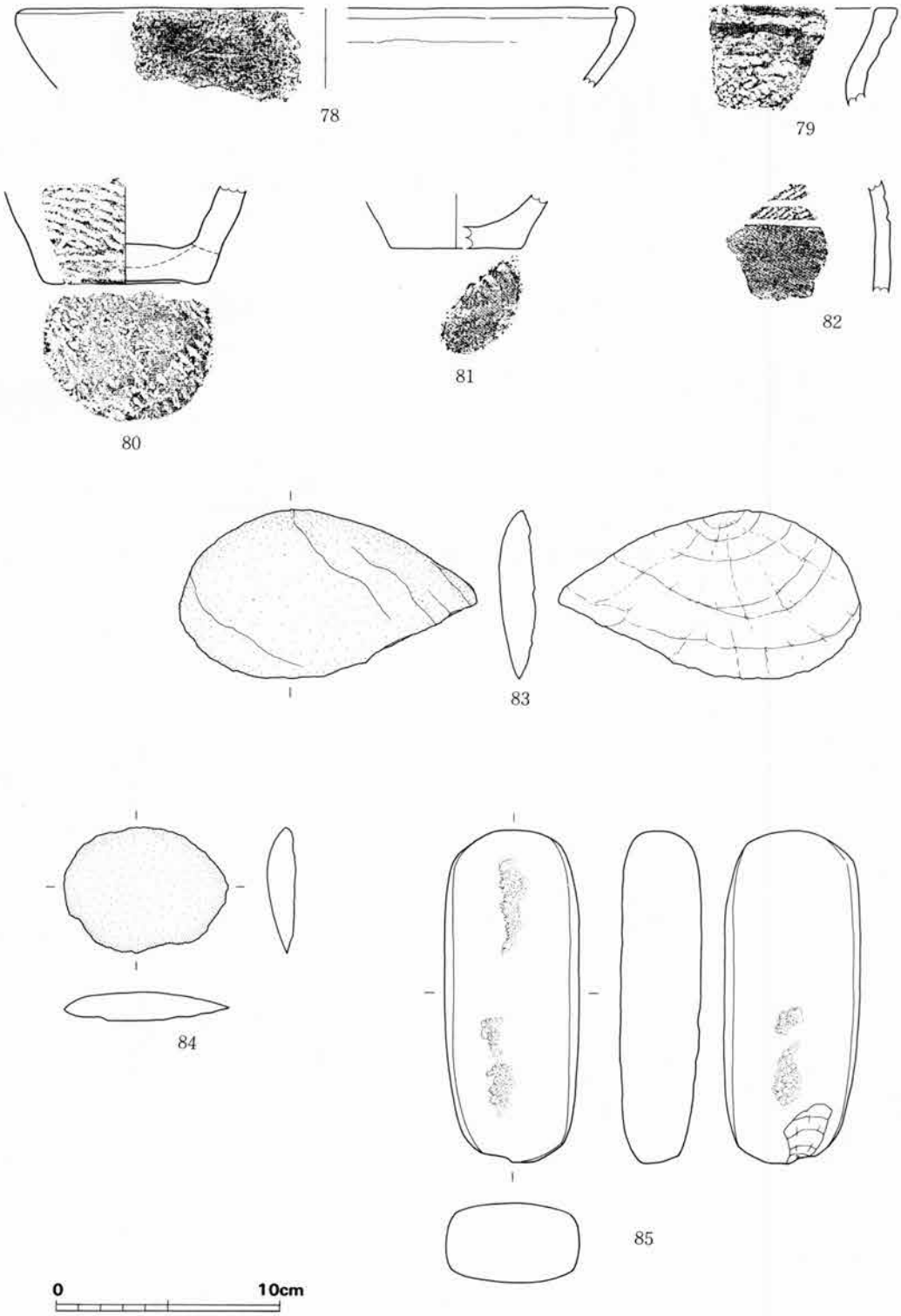
第21図　1968年度調査III区、その他出土の遺物実測図



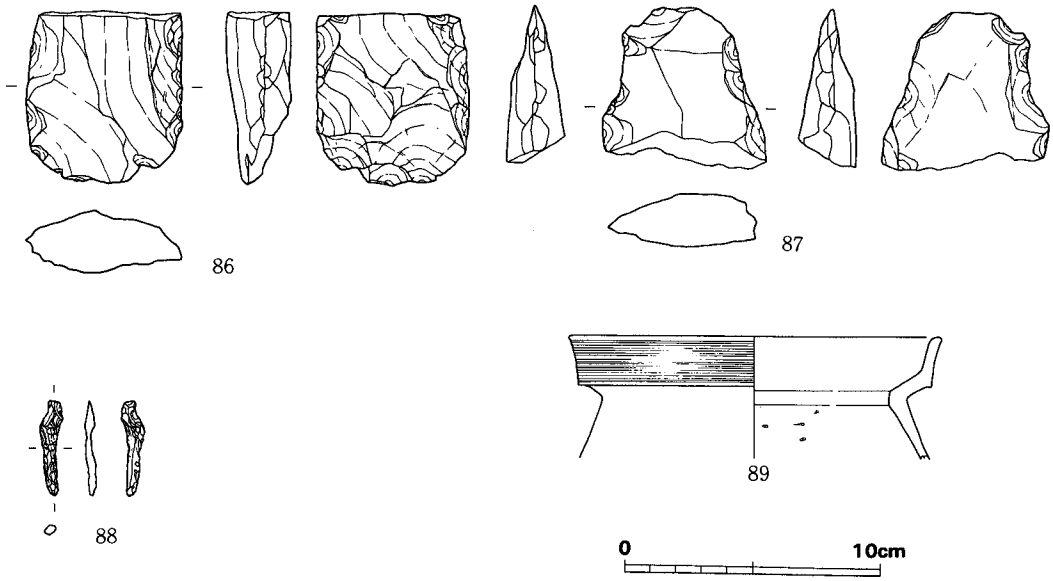
第22図　1968年度調査III区出土の土器実測図



第23図　1986年度調査III区出土の土器実測図



第24図　1986年度調査III区出土の遺物実測図



第25図　1986年度調査III・IV区出土の遺物実測図

Ⅲ　1988年度の調査

(1)　調査の経緯

本調査は、県営ほ場整備事業辰口中部地区岩内工区にかかるもので、今回発掘調査を実施した地区の遺跡は、同工事に伴う1987年度の事前の分布（試掘）調査によって発見されたものである。県小松土地改良事務所との協議により、田面部は盛土保護とし、地下に影響を及ぼす排水路敷のみを発掘調査の対象とした。調査地は旧電車線路敷と水田部の境界にあたる。

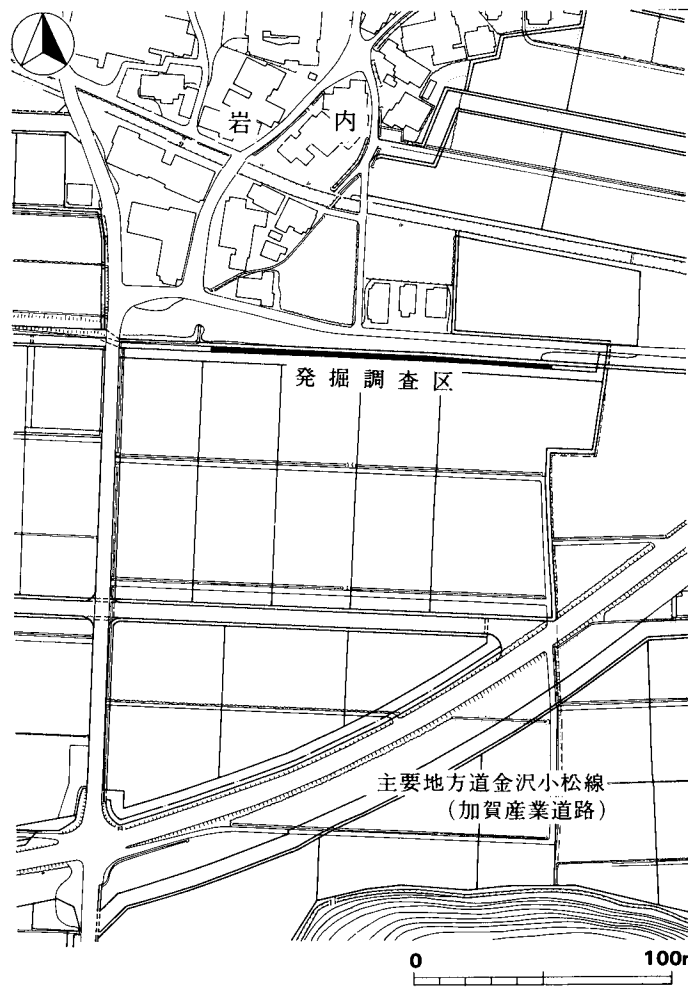
(2)　調査経過

発掘面積は約300㎡で、現地調査の期間は10月17日～24日（実働４日）であった。現地調査は北野博司が担当し、長期研修生橋場和彦（辰口町教育委員会）が参加した。辰口町岩内の道下幸助、山内隆子、橋場磨智子、山口智栄子、能沢咲子の各氏が作業にあたった。10月17日に重機により表土除去、20日に遺構検出を行い、21・24日に遺構調査と実測・写真撮影を行った。出土品整理は、1992年度に㈳石川県埋蔵文化財保存協会に委託して実施し、報告書作成作業は同年度に行った。

(3)　層序と区割

調査地の標準的な層序は以下のとおりである。１・２層は水田の耕土・床土で、調査時にはほ場整備工事によりすでにすき取りがなされていた。３層は黄灰色粘砂（客土か）、30～40cmの層厚で普遍的に存在する。４層は黒色土（黒ボク）で、平安期の土器を少量含む。５層は褐色砂質土で、縄文土器が少量出土した。以下は地山で、６層が黄褐色砂質土、７層が暗褐色砂質土、８層が黄褐色砂質土となる。

区割は、調査区西側の町道（拡幅前）路肩を基点とし、そこから東側への距離の実数で呼



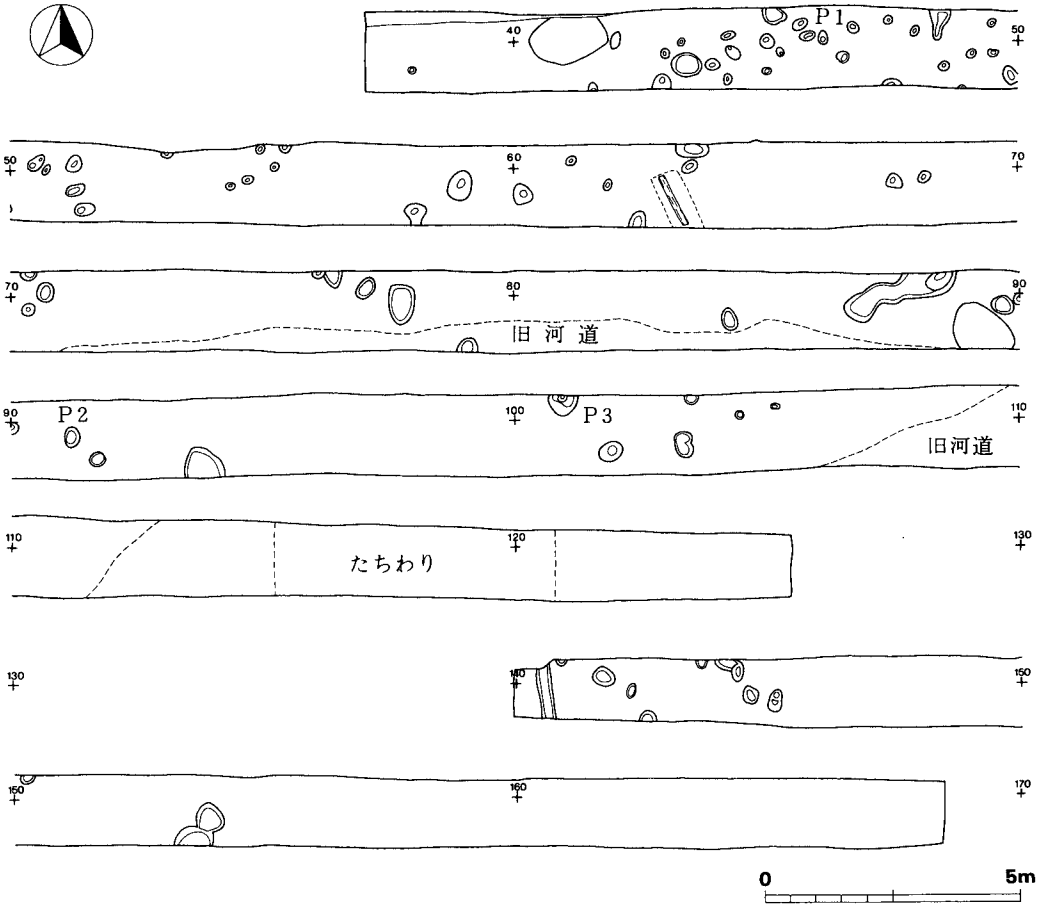
第26図　調査区の位置

称することとした。調査区のセンター杭は排水路のそれにあわせて設置した。

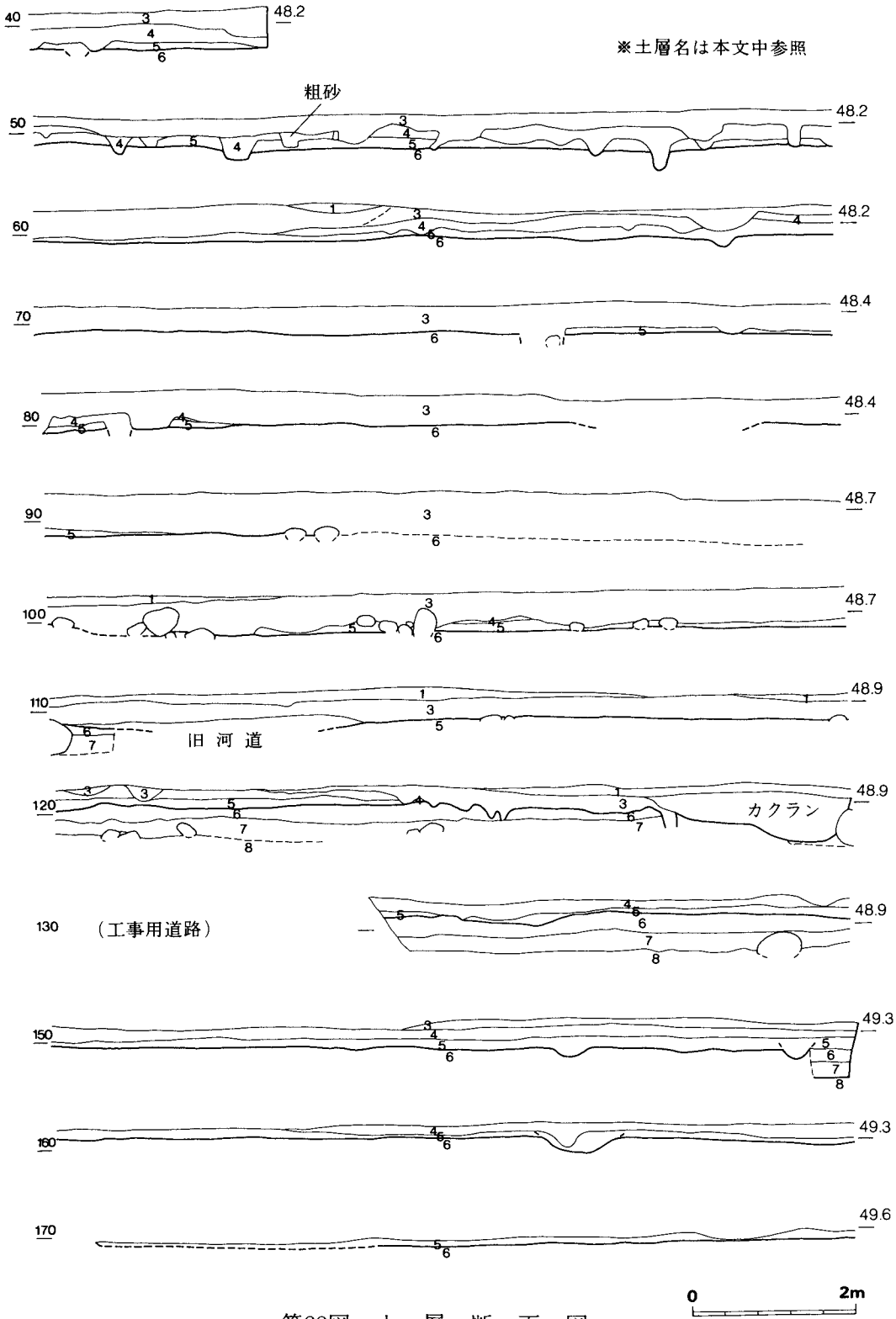
(4) 調査成果

調査区内の地山（６層上面）の標高は、西端部で47.9m、80m地点で48.3m、120m地点で49.0m、東端部で49.5mを測る。扇状地の地形にあわせ、東側から西側へかけて、130mで1.6m下がることになる。70m付近から６層に大形礫がみられるようになり、84mから110mまでは長さ20～50cmの円礫が目立つ。110m以東は、６層中には礫を含まず、８層から７層にかけて、大形円礫が混じる。140m以東は６層に５～10cmの礫が混じり、155m付近からは大形のものも含む礫層となる。

検出した遺構は、ピット・土坑・溝などである。埋土は４層を主体とするものと、５層のものがあり、それぞれ記録して調査したが、ここでは逐一触れないでおく。ピットは不整形で深さ10cm前後と浅いものが大半である。唯一柱穴の可能性があるのは、101mのＰ３で平安時代の土器が２片出土した。またこの周辺では焼土・炭化物が見られ、付近に建物跡が存在するとみられる。47mのＰ１、91mのＰ２からは縄文土器が各１点出土した。後者は、深鉢の口縁波頂部で中期後



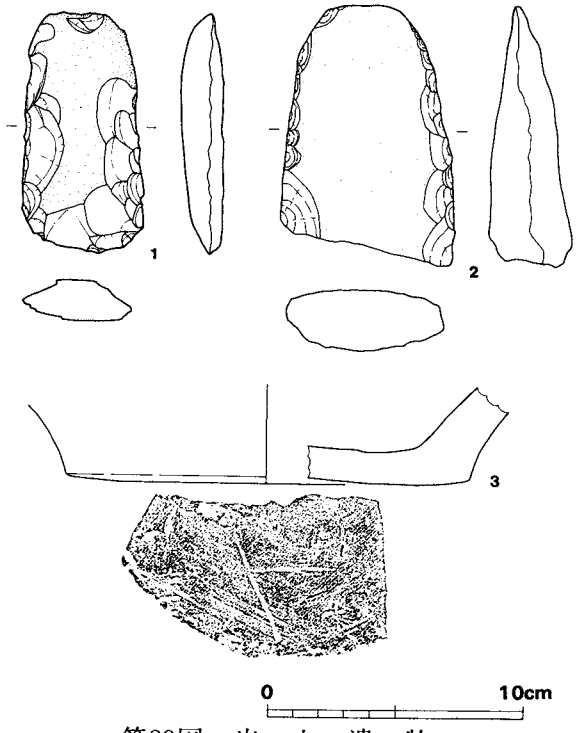
第27図　遺　　構　　図


※土層名は本文中参照
粗砂
旧 河 道
カクラン
（工事用道路）
40
50
60
70
80
90
100
110
120
130
150
160
170
48.2
48.2
48.2
48.4
48.4
48.7
48.7
48.9
48.9
48.9
49.3
49.3
49.6
0
2m

第28図　土　層　断　面　図

葉から後期前葉頃のものである。

111m付近には斜めに調査区を横切る旧河道がある。3層下にあり、中世頃のものとみられる。埋土の砂礫中から加賀焼の底部、111mのカクラン土中から打製土掘具2点が出土した（第29図）。その他、調査区内から出土した土器は、縄文土器1点、須恵器1点、加賀焼1点がすべてである。



第29図　出　土　遺　物

(5) まとめ

今回の調査区は、1987年度の分布（試掘）調査結果によれば、遺跡の縁辺部にあたる。発掘調査した結果においても、遺構は希薄であり、出土遺物も少量であった。周辺部の調査成果を参考にすると、縄文時代の遺跡は、1986年度調査区から南側の水田に拡がっており、平安時代の遺跡は、主要地方道金沢小松線付近に中心があるとみられる（『岩内遺跡』石川県立埋蔵文化財センター1988）。

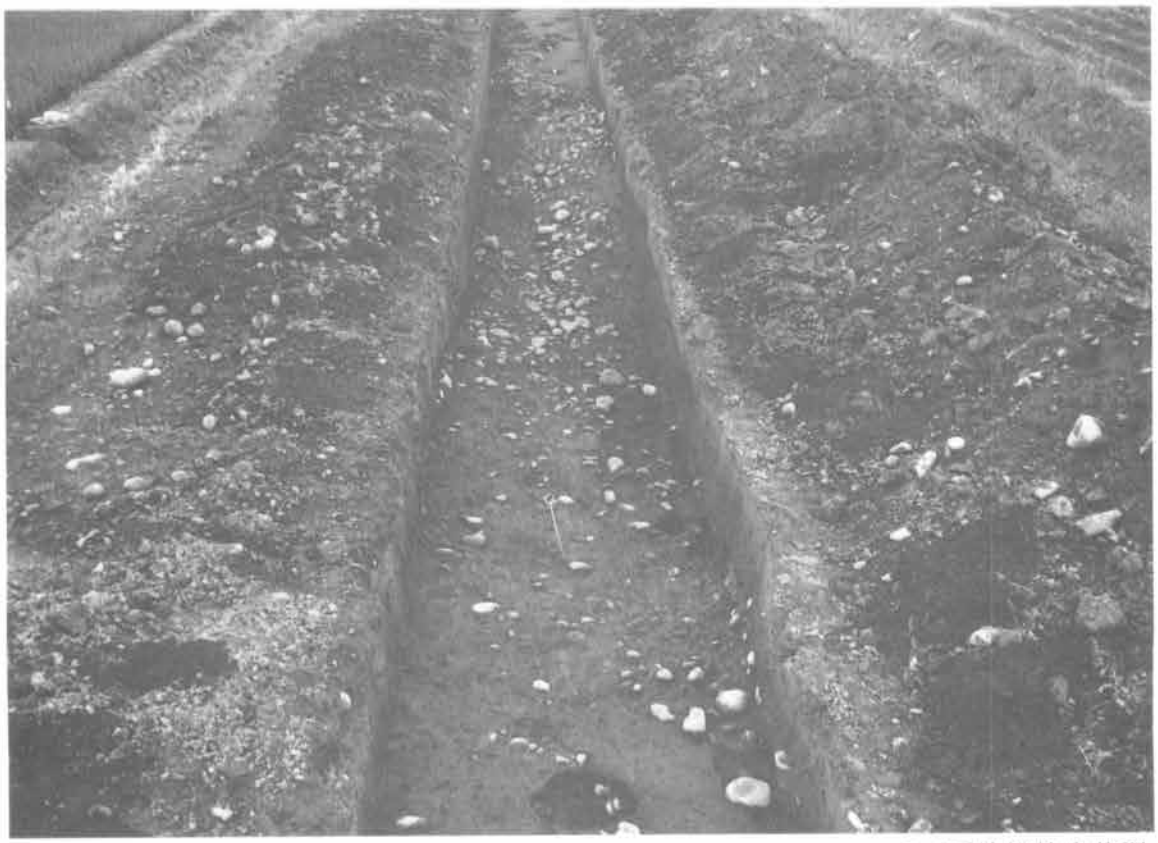
Ⅰ区掘削前（西から）

Ⅰ区掘削作業（西から）

Ⅰ区完掘状況（西から）

Ⅰ区完掘状況（東から）

I1～I2区遺構検出状況（西から）



I-2区遺構検出状況

I-7区遺構検出状況

I-8区遺構検出状況

II区掘削状況（西から）

II区掘削完了（西から）

Ⅱ区遺構完掘状況（東から）

Ⅱ区遺構完掘状況（東から）

II-5区遺構検出状況（東から）

II-7区掘建柱建物柱穴検出状況（西から）

Ⅱ-7区掘立柱建物（西から）

Ⅱ-14区掘立柱建物（西から）

30

34

35

36

40

65

46

25

26

27

51

52

53

63

61

85

調査区近景
（東から）

全　　景
（西から）

全　　景
（東から）

40～50 m
遺構検出状況
（北から）

140～150 m
ピット群
（西から）

120～125 m
土層断面
（北西から）

長滝遺跡・長滝B遺跡

Ⅰ　長滝遺跡の調査（1990年度）

第１節　立　　地（第30・31図）

白山に源を発して日本海に注ぐ手取川は、石川郡鶴来町の市街地付近において流路を大きく西にかえるが、そこより下流は県下最大の扇状地である手取扇状地を貫流することになる。その手取川の左岸に控えつつ同扇状地の南を画するのが能美丘陵で、扇状地の南扇側部と接する前山帯は標高100m前後、扇状地の平野との比高もせいぜい数十mに過ぎず、比較的低平でなだらかな山容が続く。また、能美丘陵を開析しつつ北方の手取扇状地へ向けて流れる小さな川も幾筋かみられ、盆地状地形をなす辰口町大口地区から同町長滝地区へ落差約40mの七ツ滝（町指定名勝）となって一気に流下する長滝川はそのうちでも最大クラスのものといえる。この流れによって開析された長さ約１km、最大幅400m弱を測る谷底平地は現在も長滝集落や水田として利用されている。

長滝遺跡は、この谷底平地と手取扇状地が交わる地点を占める。さらに微視的にみれば、遺跡は谷口東方の丘陵山裾から西にのびる微高地（標高56～59m）上に立地しており、この微高地を避けるように長滝川は谷口においては、西方の莇生遺跡が占地する丘陵の山裾へと大きく迂回している。また、この微高地は手取川の低位段丘としての性格も有しているようであり、遺跡北端では1.5～２mの段差がみられ、北方の辰口町三口地区側へ落ちて行っている。この段差は遺跡東方の辰口町宮竹地区から西方の長滝川へと手取川の流路に沿うようにして東西方向にのびており、低位段丘の崖線と推定される。

従来、この崖線をもって長滝・三口両地区の地境とされてきたが、必ずしも直線的ではなく南北方向に微妙に入り組む状況を呈していた。ところが平成２年度の県営ほ場整備事業に伴い水田区画の大規模化・直線化がはかられるところとなり、両地区境界は削平・盛土という方法により高差を残したまま直線化されることになった。今回の発掘調査はそのうちの削平部分について実施されている。なお、発掘調査、ほ場整備事業の工事区域における観察により、段丘崖下の三口地区では耕土直下が礫層であるのに対して、崖線上の長滝遺跡の立地する微高地ではベースとなるシルト層の堆積がみられた。

本遺跡の西方約300m、標高81mの丘陵上には昭和50年から52年にかけて辰口町教育会によって発掘調査が実施された莇生遺跡が所在し、また現在の手取川は遺跡の北方約１kmの地点を西流する。

第２節　調査及び整理の経過

現地における発掘調査は、1990年４月27日から同年８月１日にかけて実施された。石川県立埋蔵文化財センター調査第一課課長平田天秋の指導の下に主事松山和彦が調査を担当し、調査員中

村繁和がこれを補佐した。調査期間中は大麦の作付期間にあたっていたため、調査区や排土場の確保のため一部の作物を潰さねばならなかった。そのための地元地権者との交渉においては下記の方々をはじめとして多くの方々のご協力があった。また、平成2年の夏は雨が少なく暑い夏であったが、長滝・三口両地区の有志の方々のご協力により作業は順調に進んだ。その他、栄進工業より水道の提供を受けている。

川端一男（長滝工区工区長）、塚田良三（三口工区工区長）、岡田茂雄・中口正男（地元耕作者）、石川県小松土地改良事務所

次に出土遺物の整理、実測・トレース等については、社団法人石川県埋蔵文化財保存協会に委託して平成4年4月から6月にかけて行った。作業を担当したのは下記の方々である。

小屋玲子・小谷紀美子・新谷由子

同じく平成4年度における報告書作成にあたっては、写真撮影をはじめとして調査員大藤雅男の協力を得ている。（以上、文中の敬称は省略した。）

第3節　層序と遺構の概要（第32・33図）

(1)　調査区の設定

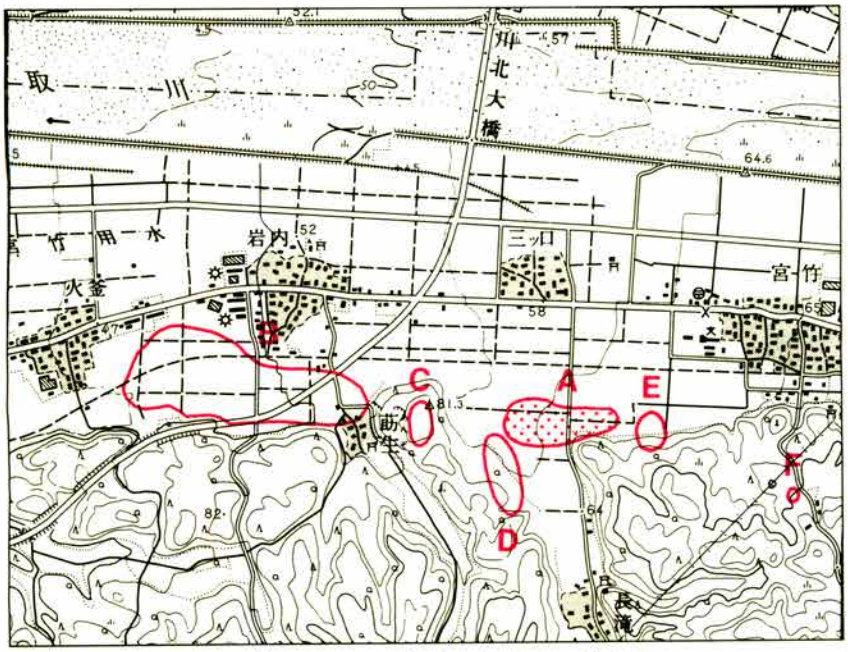
今回のほ場整備では、長滝・三口両地区間にみられる段差が直線化され、それに伴って段差の下をほぼ東西方向に走る農業排水路が設けられることになった。発掘調査ではその排水路のセンターラインを東西の基準とし、センターラインの北側9mに平行するラインをAライン、同じく5mに平行するものをBライン、同じく1mに平行するものをCラインとした。また排水路センターラインの南側3mに平行するものをDラインとした。このように4m間隔に東西に走るA～Dラインが設定されている。

次にこれらと直交する南北ラインについては、ほ場整備前の水田の畦畔のうち、長滝から三口へ通ずる町道から数えて西に4本目の畦の中心線を40ラインとし、それと4m間隔で平行するラインを設定した。ラインの呼称は40ラインから西へ行くごとに39、38、37というように番号が若くなるようにしてある。40ライン以東はその逆である。なお、40ラインは現在（ほ場整備後）の水田区画でいえば、町道から西に2筆目の水田の西畦の中心線の東6mに平行するラインということになる。

このようにして、4m四方、面積16㎡のグリッドが調査区全域にわたって設定されてくるわけだが、各グリッド名は北西杭の呼称によることにした。

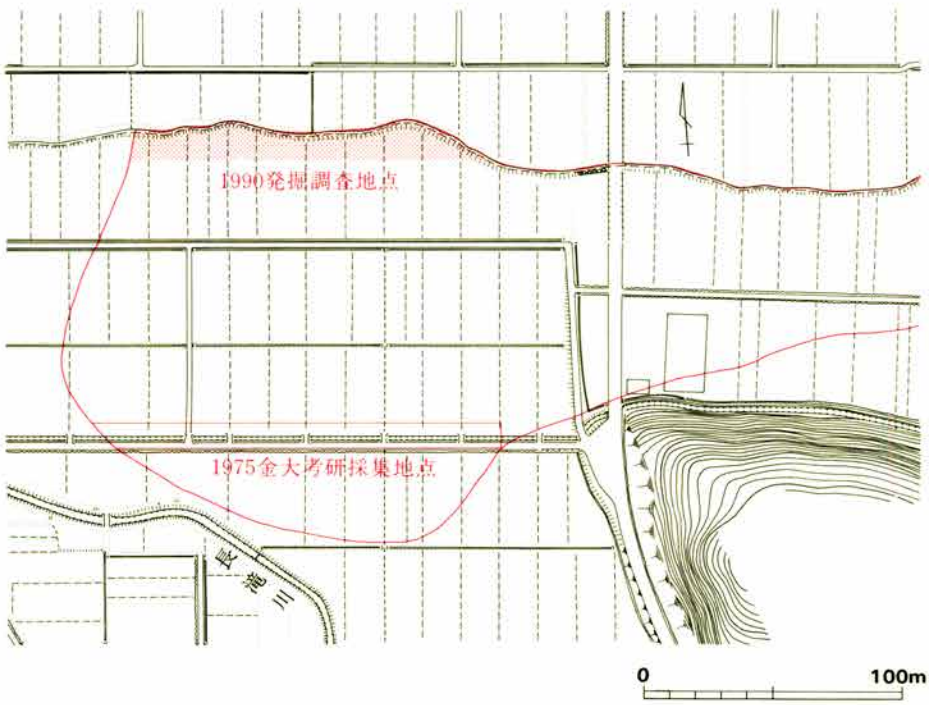
(2)　調査区の大別

今回の調査は東西に最大約350m、南北に最大約160m、面積も3万㎡を越える長滝遺跡のうちの西北端約1800㎡について実施されている。遺跡全体では5パーセント前後というところに過ぎない。調査区の大きさは、直線をなす調査区南壁において東西の長さが146m、南北の幅は場所によるバラツキが大きいが、最大で16m、10～12mが標準といえよう。

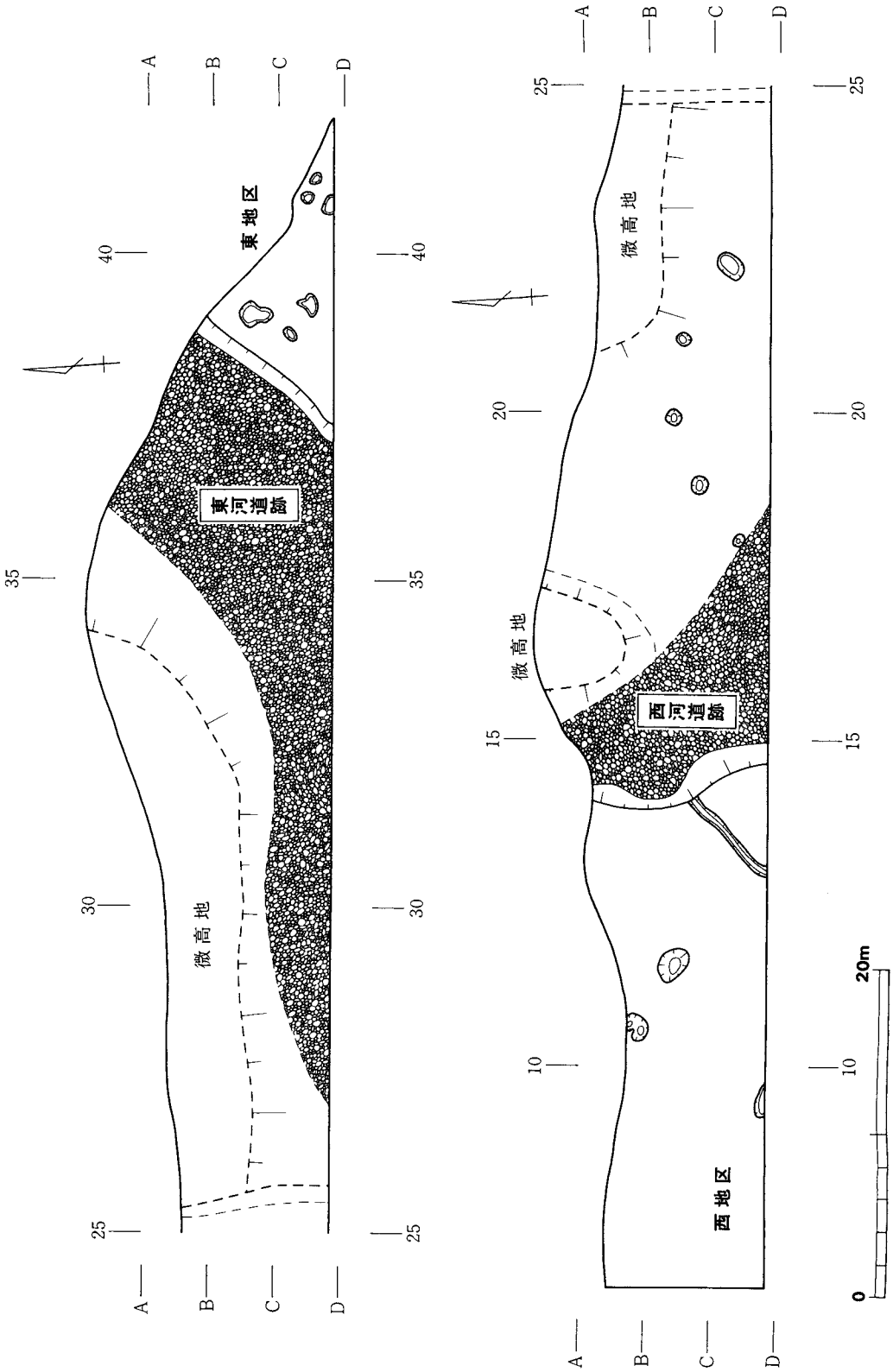


A．長滝遺跡
B．岩内遺跡
C．莇生遺跡
D．莇生Ｂ遺跡
E．宮竹遺跡
F．宮竹オオハゲＢ遺跡

第30図　長滝遺跡位置図（1/25000）



第31図　長滝遺跡における発掘調査地点の位置（1/3000）



第32図　長滝遺跡発掘調査区全体図（1/400）

上記のとおり調査区が東西に長いため、以下においては調査区を便宜上３つの地区にわけて記述を進めていくことにする。まず、調査区では２条の河道跡が検出されている。調査区が限られており流路方向を特定することは難しいが、扇状地の扇側を扇頂から扇端へ、すなわち東から西に向かって流れていた手取川の小さな分流の跡である可能性が高いと思われる。今回は２条として検出されたが、もともとは蛇行する１条のものの各部分であろう。このうちの西の河道跡のさらに西側及び東の河道跡のさらに東側には黄褐色シルト層のベース（地山）のみられる箇所があり、それぞれを「西地区」、「東地区」と呼ぶことにした。また、礫原の様相を呈する２条の河道跡の部分とそれに挟まれた部分については、「中央地区」として一括した。この地区の後者の部分には、シルト層の堆積のみられる島状の微高地とそこから河道跡へと傾斜していく礫混じりの粗砂層をベースとする斜面との２つの部分が含まれる。

(3) 層　　序（第33図）

各地区の地表からベース面までの土層の堆積状況については第33図に一括して掲載しておいたが、いずれも調査区の南壁において作成したものである。

まず東地区では、39～41ライン間を中心とする長さは12m分を図示した。耕作に由来する土層群の下に暗灰色粘質土の堆積がみられるが、縄文時代の遺物を包含するのは黒色粘質土（第５層）から濁黄褐色土（第８'層）までの間にほぼ限られる。調査時の記憶では、黒色粘質土においては縄文時代後期前葉の資料の出土頻度が高く、地山の上20cmの間は全体に遺物の出土量が少なかったように思える。地山は黄褐色シルト層であり、現代の地表からその上面までの深さは100～120cmを測る。なお、南壁においては、ちょうどＳＫ02地表からの土層を観察できるが、濁暗黄褐色土（第７層）から切り込まれている状況が理解される。

次に西地区でもやはり黒色粘質土（第５層）以下が縄文時代の遺物包含層となる。９～10ライン間を中心とする６ｍ分について南壁の土層図を掲載したが、これにかかるＳＫ09も濁暗黄褐色土（第７層）を切り込み面としている。東地区と同様に黄褐色シルト層を地山とするが、地表からそこまでは比較的浅く80～90cm程度である。

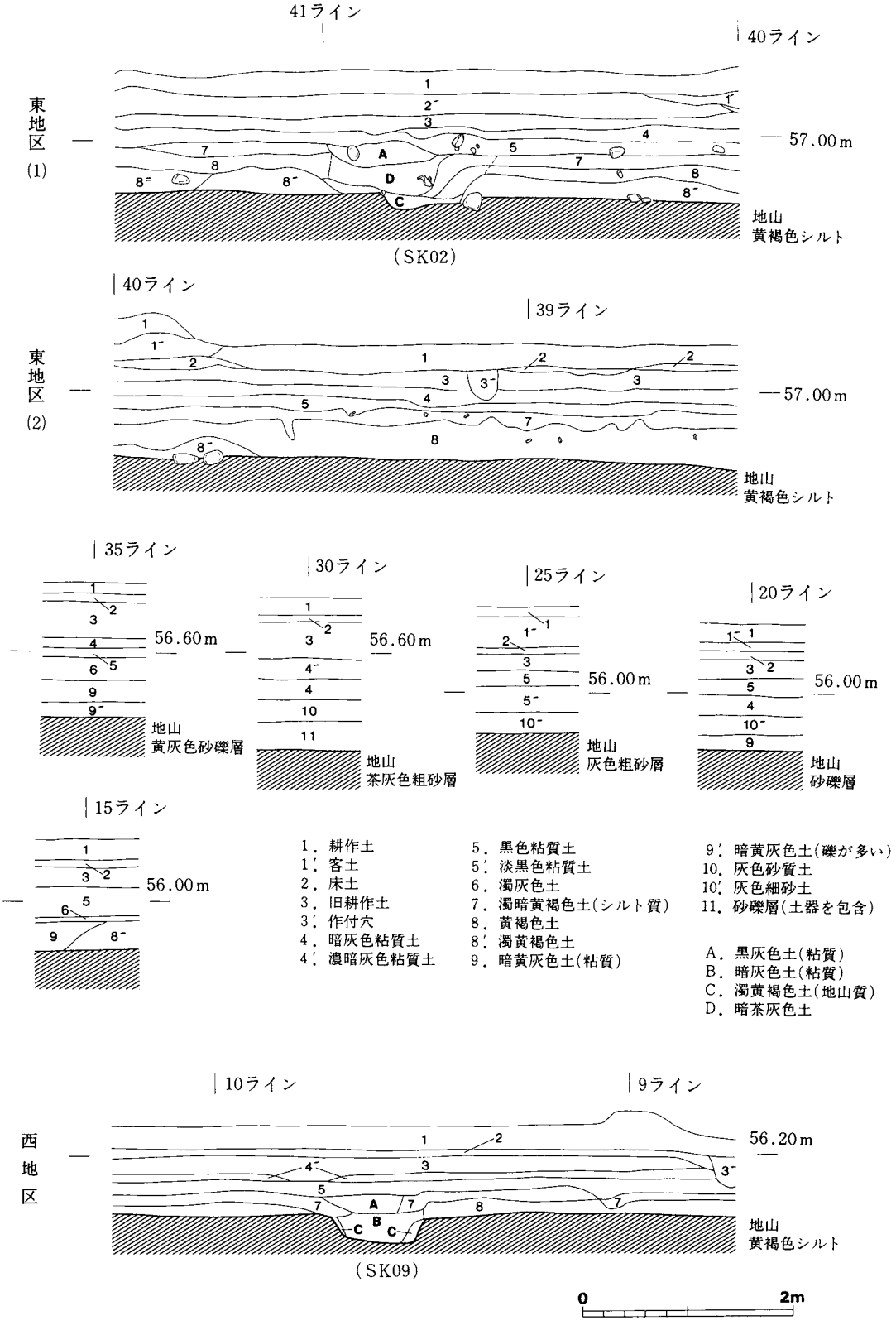
残る中央地区では縄文時代の小河川の跡が漸次埋積していった状況が窺え、縄文時代の遺物包含層も安定した堆積状態を示しているとは言い難い。河川の流水に基因すると思われる粗砂層や砂礫層の上層から遺物が出土する場合がほとんどであった。

(4) 遺跡の概要（第32図）

今回の調査で検出された遺構としては、土坑（ＳＫと略す）・性格不明の穴など（ＳＸと略す）・溝（ＳＤと略す）をあげることができる。

土坑としては東地区でＳＫ01～ＳＫ06の６基、西地区ではＳＫ07～ＳＫ09の３基が調査されている。合計９基ということになる。

性格不明の穴は中央地区の西部、西の河道跡の東側でＳＸ01～ＳＸ05の５基が確認されている。いずれも礫混じりの粗砂層を掘り込んだものである。溝は西地区で１条検出された。



第33図　長滝遺跡土層図（1/60）

その他、人為的な遺構ではないが、２条の河道跡の存在も明らかになっている。前述のとおり流水に起因する層から中期後葉（主として大杉谷式）の土器が多量に出土している点から、その頃或いはそれから幾分遡る時期まで流水がみられたのではないかと判断される。一方、後期前葉の資料はそれらの層から出土することはほとんどなく、むしろ機能を停止した河道が埋積していく過程で形成された土層に含まれているようである。

なお、各遺構の詳細は次節以下で述べることになっている。

第４節　東地区の遺構と遺物

(1) 遺　　構（第34図）

東地区は底辺20m、高さ８m弱の三角形を呈し、面積は80㎡前後になろう。そこに土坑が６基が営まれ、調査区中では遺構密度の高い部分といえる。これは厚く包含層が堆積した遺跡中枢部の一端に属するためであろう。

ＳＫ01　Ｃ38区の北東を占め、長さ約1.2m×幅約0.9mを測る。不整な楕円形を呈し、ベースとなる黄褐色シルト層上面からの深さは12cm前後と浅い。覆土は大半が暗茶灰色粘質土からなるが、底部付近には濁黄灰色土が薄く堆積している。

ＳＫ02　Ｃ40区の南部に位置し、調査区南壁にかかるため全掘していない。長さ１m以上、幅0.6m以上を測るが、全形は不詳。覆土については南壁の土層図（第33図）に示したとおりである。検出面からの深さは約20cm。

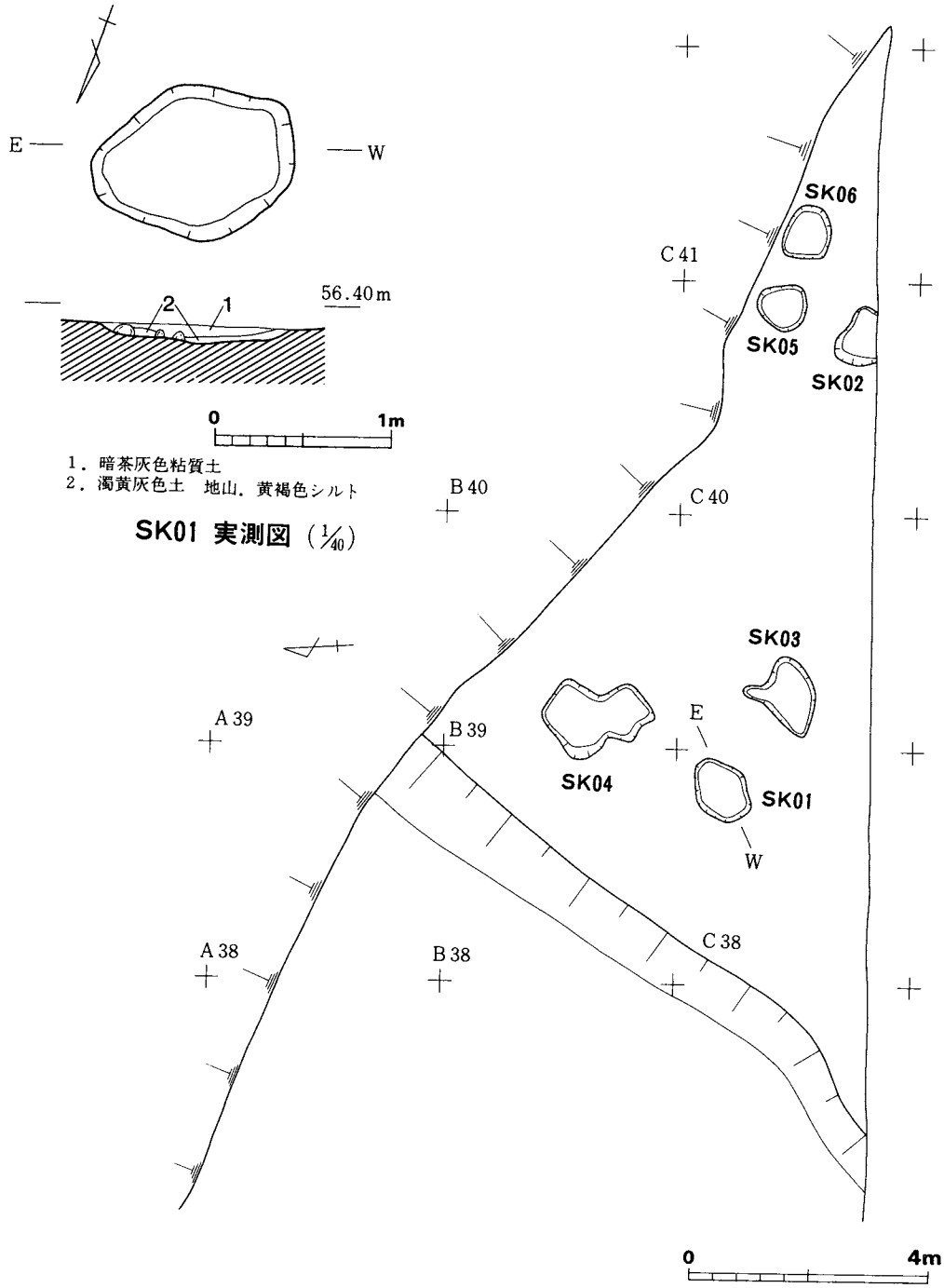
ＳＫ03　Ｃ39区に位置し、平面プランは長さ約1.4m×幅0.8mの楕円形を基調に、北側に長さ40cm程度の突出部が付属する。覆土は暗茶灰色土の単層で、検出面からの深さは約６cm。

ＳＫ04　Ｂ39区の西側を占める。長さ約1.9m、最大幅1.4mの瓢簞形を呈する。覆土は暗茶灰色粘質土で、検出面からの深さは約11cm。この土坑周辺のベースとなるシルト層は礫を多く含む傾向にある。

ＳＫ05　Ｃ40区の北東を占め、径80～90cmの不整な円形状を呈する。覆土は暗茶色粘質土で、検出面からの深さは約11cm。

ＳＫ06　Ｃ41区に属し、長さ約0.9m×幅約0.8mの不整な方形を呈する。覆土は暗茶灰色土で、検出面からの深さは約10cm。

以上、６基の土坑について述べてきたが、東地区の中における配置ではＳＫ01・ＳＫ03・ＳＫ04の３基からなる西側のグループとＳＫ02・ＳＫ05・ＳＫ06の３基からなる東側のグループに分けられる。また、東地区土層図にみるＳＫ02の断面からもわかるように土坑の実際の切り込み面はベースとなる黄褐色シルト層からは40～50cm上である。切り込み面付近でも土色の違いから遺構の存在が予想されたが、土色の濁りがひどく明瞭にプランを把握できたのはベースの面まで掘り下げたのちである。上記の土坑の姿はあくまでもベースになるシルト層の上面における姿に過ぎず、元来はより深く規模も大きなものであったはずである。



第34図　東地区遺跡構図（1/120）

(2) 遺　　物（第35～42図）

a．土　　器

全形のわかる資料は皆無に近く文様構成が把握できるものも数少ない。したがって以下においては便宜的な分類を行うに留めたい。

遺構出土資料（1～3）

1がＳＫ01から、2・3がＳＫ02から出土している。1には横走ぎみの縄文が施され、無文である2の口唇部は外側に肥厚している。残る3は外面においてタテ及びヨコ方向のケズリ状の調整が看取される。色調は橙褐色で、底部外面には網代圧痕がみられる。

東地区1類（4～5）

半截竹管状工具による施文がみられるものを一括した。平縁の前者（Ｂ39区出土、以下は出土区のみを記す）では水平に、波状縁の後者（Ｃ39区）では口縁の形に沿って半隆起線が走る。前者では縄文も伴う。

東地区2類（6～8）

暗灰褐色を呈し、胎土中に焼土塊（粒）を含むものを一括した。6（Ｃ39区）は2条の沈線を有するとともに口縁端部にキザミが伴う。7（Ｃ39区）は口縁のやや下にヨコ方向の隆帯を貼付し、その斜め上方から刺突をめぐらす。隆帯より下位では沈線もみられるが、そのモチーフは不詳。8（Ｃ41区）は懸垂文となる蕨手状の細い貼付隆帯の基部を沈線で縁どるとともに、それに向かって斜め方向の平行沈線がひかれている。

東地区3類（9～14）

口縁部を無文とし、そこに平行する沈線が描かれるものを一括した。出土区はいずれもＣ40区。口縁端部を面取りし、内外面ともに丁寧なヨコナデを施す9では、少なくとも3条の平行沈線がめぐる。色調は暗い肌色で外面の一部にススが付着する。縄文を施すふくらみのある胴部が頸部で一旦くびれたのちに外反する10では、頸部に3条の平行沈線がひかれている。口縁端部には面取りがみられる。頸部に2条の平行沈線が確認できる11も10に類似するものと思われ、両者とも外面にススが付着する。その他、口縁に比較的近い位置に2条の沈線をめぐらすものとして12～14をあげることができる。12の沈線は浅く太目である。13は沈線間に縄文地文を残すため無文部は著しく幅狭となる。低くなだらかな波状縁の14は、口縁の形に沿って沈線が走る。口縁部は内湾し、口唇は内側に肥厚ぎみとなる。13・14の外面にはススの付着が認められる。

本類には、口唇に面取りがなされ口縁部に幅広の無文帯を有する外反器形の深鉢であるＡ（9～11）と口縁部が内湾し無文部が幅狭のＢ（13～14）の二者が含まれる。なお、9の口径は小片から無理に推定したもので、かなりの誤差が考えられることを申し添えておく。

東地区4類（15～16）

外反器形の深鉢で、口縁部無文帯下に2条の平行沈線をめぐらし、その間を短い横位沈線で埋めるもの。15（Ｃ40区）では沈線間が無文とされるのに対して、16（Ｃ40区）では胴部からの縄文が続く。とはいえ、15は器表面の状態が悪く即断は避けたい。器形的には上記の3類Ａに近く、接合が難しかった15についても本来はもう少し胴部がふくらむものであろう。16では沈線間を区

画する縦位の沈線が窺えるが、15の遺存しない部分にもそれが備わっていた可能性が高い。

東地区5類（17～18）

頸部付近に平行沈線をめぐらし、その間に列点状の刺突を施すもの。胴部に縄文のみられる17（C40区）も18（C39区）と同様に列点が多段になると思われる。18では列点は3段以上であり、それより上位は無文となる。

東地区6類（19～35）

磨消縄文等を有するものを一括した。文様構成不明のものが多い。19（C41区）・20（C39区）・21（C41区）・22（C40区）の口縁下方には直線的な沈線によって区画された縄文帯が横走している。口縁形態は19が内湾、21は短かく外反し、22は口縁端部に幅約1㎝の面を作り出している。また22の区画線は他に比して太い。23（C39区）、24・25・26（いずれもB39区）は区画沈線が曲線的なものである。24～26は口縁端部に面取りがみられ、24ではそこまで区画沈線がのびている。26は低平な波状縁或いは突起を有するもののようであり、無節縄文が用いられている。27（C40区）は波頂部から真下にのびる縦位の無文帯を作り出し、そこに深いタッチの矢羽根状沈線を描いている。その部分を画するように右左両側に縦位の縄文帯が配置されていたと推定される。縄文原体としては単節のものが用いられている。矢羽根状沈線と磨消縄文手法が共存する興味深い例といえよう。28（C39区）では幅5㎜を越える太い沈線が用いられており、横位の縄文帯は縦位の弧線によって区切られている。突起部である29（C39区）は口縁端部を内側に折り込んでいるが、上からみた形状は中凹みの「U」字状になる。30（C40区）はブリッジ状の把手を有し、上下の付け根中央を孔が縦に貫いている。沈線区画内には無節縄文が施される。31（C40区）・32（C40区）・33（C37区）・34（C41区）はいずれも胴部片である。31は無文部に比して縄文帯が盛り上がっている。無文部におけるナデは丁寧で、平滑に仕上げられている。32も31と同様に無文部の調整が丁寧だが、32ではそこを赤彩する。33では半円状、また34ではクランク状の区画内に縄文がみられる。残る35（C40区）は胴部及び底部片が確認されるが、両者の文様がどのようにつながるかは不明。以上、個々の資料について述べてきたが、本類の施文における磨消手法と充塡手法の違いを明らかにすることができなかった。今後の課題としたい。

東地区7類（36）

縦位の蛇行沈線文を有するもの。36（C38区）は地文の縄文を一部ナデ消して蛇行沈線を描いている。

東地区8類（37）

押し引き状の沈線がみられるもの。口縁部が強く内湾する37（C41区）でそれが2条ひかれている。赤橙褐色を呈し、胎土中に海綿骨片が目立つ。

東地区9類（38～43）

口縁部に波条沈線を有するものを一括した。38～41では1条、42～43では2条である。38（C40区）・39（C39区）は口縁が弱く外反するようで、前者ではなだらかな波状縁、後者では平縁に沿って波状沈線がひかれている。39ではその直下から縦方向の縄文（以下縦縄文と略す）がみられる。40（C40区）は口縁が強く内湾するようである。41（C40区）は39と同様に口縁が外反

し、さらに胴部がふくらむ。口縁部を無文とし、1条の波状沈線の直下から縦縄文がみられる点も39と同じ。2条のものには口縁が外反する42（C40区）と内湾する43（C40区）の両者が存する。沈線自体の太さにおいてはどちらかといえば1条のものの方が太い傾向にある。本類では38を除く資料において程度の差こそあれ、外面にスス状のものの付着が認められる。

東地区10類（44～48）

末端刺突をもつ沈線、三角形刺突文、外側に肥厚して断面三角形状となる口縁上部などによって特徴づけられる一群。44（B40区）は口縁部を末端刺突をもつ沈線・刺突・弧線・キザミで飾り、頸部は三角形刺突、以下は縦縄文となる。45（C37区）も口縁部に末端刺突をもつ沈線がみられる。口縁上部が断面三角形状となる46（C40区）は口唇や横位の沈線にキザミが伴う。口縁端部がさざ波となる47（C41区）では押し引き状の三角形刺突文が左下がりに施されている。48（C39区）は縄文のみであるが、口縁部形態から本類に含めた。

東地区11類（49・50・52）

口縁部付近を無文とし、そこに列点状の刺突を施すもの。49・50・52（いずれもC40区）があげられる。49は横長の楕円形を1単位とし、50は工具の先端による押し引きで施文している。52もそれらと同様に2段に刺突をめぐらすが、上下両段の間は狭い。とはいえ、両段は別々に施文されている。49・52は口縁上部がふくらみ、後者では口縁端部に幅1㎝位の面が設けられている。また、52は器面に丁寧なナデ調整が行われており、胎土に焼土粒を含む。

東地区12類（51）

キザミをもつ貼付隆帯がみられるもの。51（C41区）では、頭部が丸い波頂部のラインに沿うようにして、縄文地文上にそれが走る。胎土には焼土粒が含まれる。

東地区13類（54）

横位の平行沈線に横長の楕円形状沈線が伴うもの。54（C40区）は、恐らく頸部と思われる部位にこの文様がみられ、それ以下は単節の斜行縄文となる。

東地区14類（55～56）

縄文地文上に沈線を描くもの。口縁部片である55（C40区）では横走する平行沈線のほかに4条の斜行沈線がみられる。また内面にスス状のものが付着し、また胎土中は焼土粒が含まれている。56（C38区）は沈線で草葉状の文様を描くが、全体の構成は不詳。

東地区15類（53・57）

胴部に縦位の平行沈線がみられる。明橙褐色を呈する53（C40区）の沈線は波状となり、内面全面に炭化物が付着している。胴部に平行沈線が縦走させる57（B39区）は、底部外縁が横へ張り出す。本類の沈線は浅くどちらかといえば幅広といえる。

東北区16類（58）

2条の横位の沈線間を短かい縦位の沈線で刻むもの。58（C40区）のキザミは植物の茎などの細く丸い棒を押しつけているようである。同様のキザミは中央地区出土の92においてみることができるが、本類とそれとの関係は不詳。なお58の傾きは図示したものよりもう少し内湾する可能性もある。

東地区17類（59・60）

口縁部に2段にわたって途切れがちな沈線がみられるもの。59（C40区）・60（C41区）ともにラフなタッチで描かれており、後者の下段のものは上下に振幅する。また、前者の外面にスス状物が付着し、後者の口縁は内屈ぎみに立ち上がる。ともに包含層の最上層から出土しており、胎土中に砂量を多く含む。

東地区18類（62・63）

粗い櫛状具により器面全体を調整するもの。一見条痕文風であるが、西野秀和氏より貝殻条痕文とは異なり一条の幅がそれよりも狭い別種の工具が用いられているのではないかという有益なご教示を頂いた。62・63（ともにC40区）では、内外面で水平或いはやや右下がりのヨコ方向の調整がなされたのちに、外面では加えてタテ方向の調整が伴う。タテ方向の調整は恐らく反時計回りに施されたと思われ、62では底部に近づくにしたがって密になる傾向が窺われる。原体については62で幅1.5cm以上、63では幅2.5cm以上のものが用いられているようであるが、前者に比して後者の方が一条一条が深く刻まれている。条の密度は3cm幅で62が9条程度、63が11条程度を数える。両者とも口縁端部に弱い面取りがみられ、器表面から成形時の粘土紐の巻き上げ（積み上げ）の状況を観察できるが、調整はこれを消すようにして行われている。62の胴下部の外面にはスス状物が付着する。

東地区19類（68）

縦位の条線文による調整が行われるもの。頸部でややくびれたのちに口縁にかけて弱く外反する68（C40区）は、口縁端部に4ないし5頭の低い山形の突起が伴うと推定される。条線文の原体は幅2cm前後、7条を1単位とするようである。内外の器表にナデ調整が行われたのちに外面のみに条線文を施すが、その間隔はさほど密であるとはいえない。表面から成形時の粘土紐の状況を観察できる点、口唇に不定な面取りがみられる点は上記の18類と同じである。68の外面にはスス状物の付着が認められる。

補修孔がみられるもの（64）

64（C40区）にみられる焼成後の穿孔は補修のためのものと思われる。外面は縄文のみ。

有孔の把手を有するもの（65）

器壁が3mm前後と薄く、口縁部の一端に有孔の把手を伴う65（C40区）は、内外面とも調整はナデのみによる。

ミニチュア土器（66）

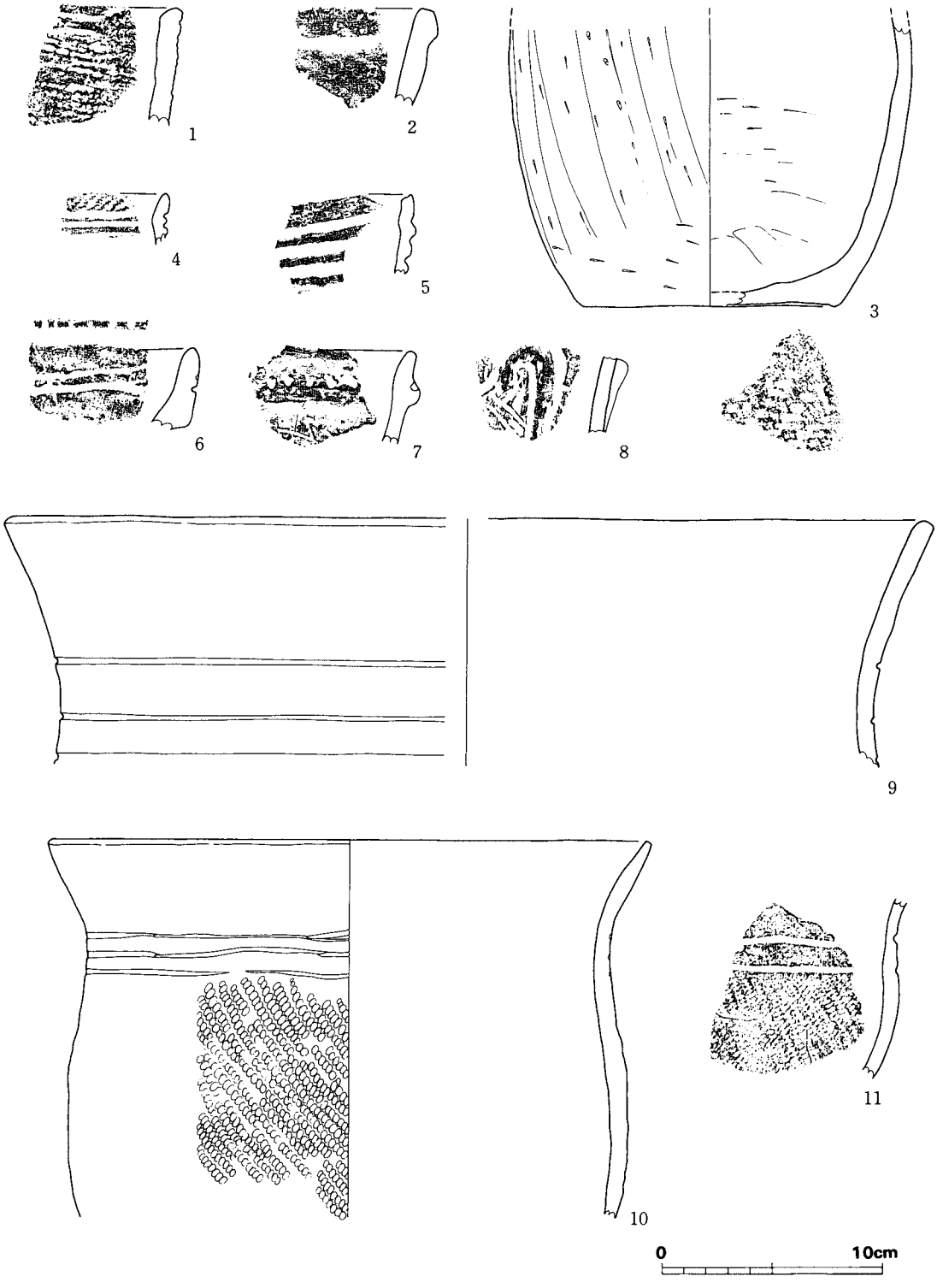
66（C40区）は底径約3cmと著しく小型である。濃い暗灰褐色を呈し、胎土中の砂の含有量は少ない。

耕作土出土資料（61・67）

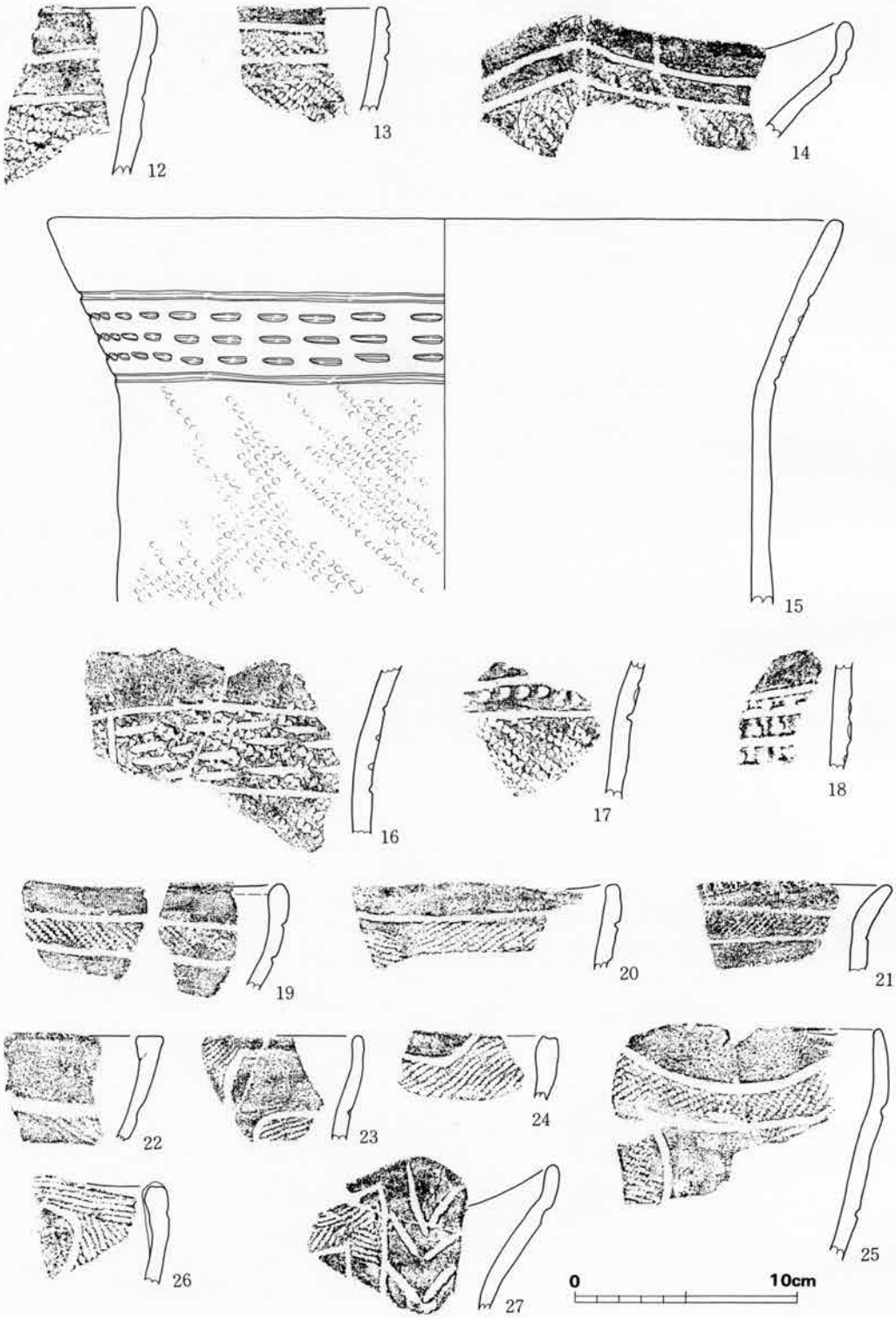
口縁外面に指頭圧痕状の文様を横に連ねる61や下端が中凹みとなる径約1.5cmの円筒形の土製品67がC40区耕作土中より出土している。

b．石　　器

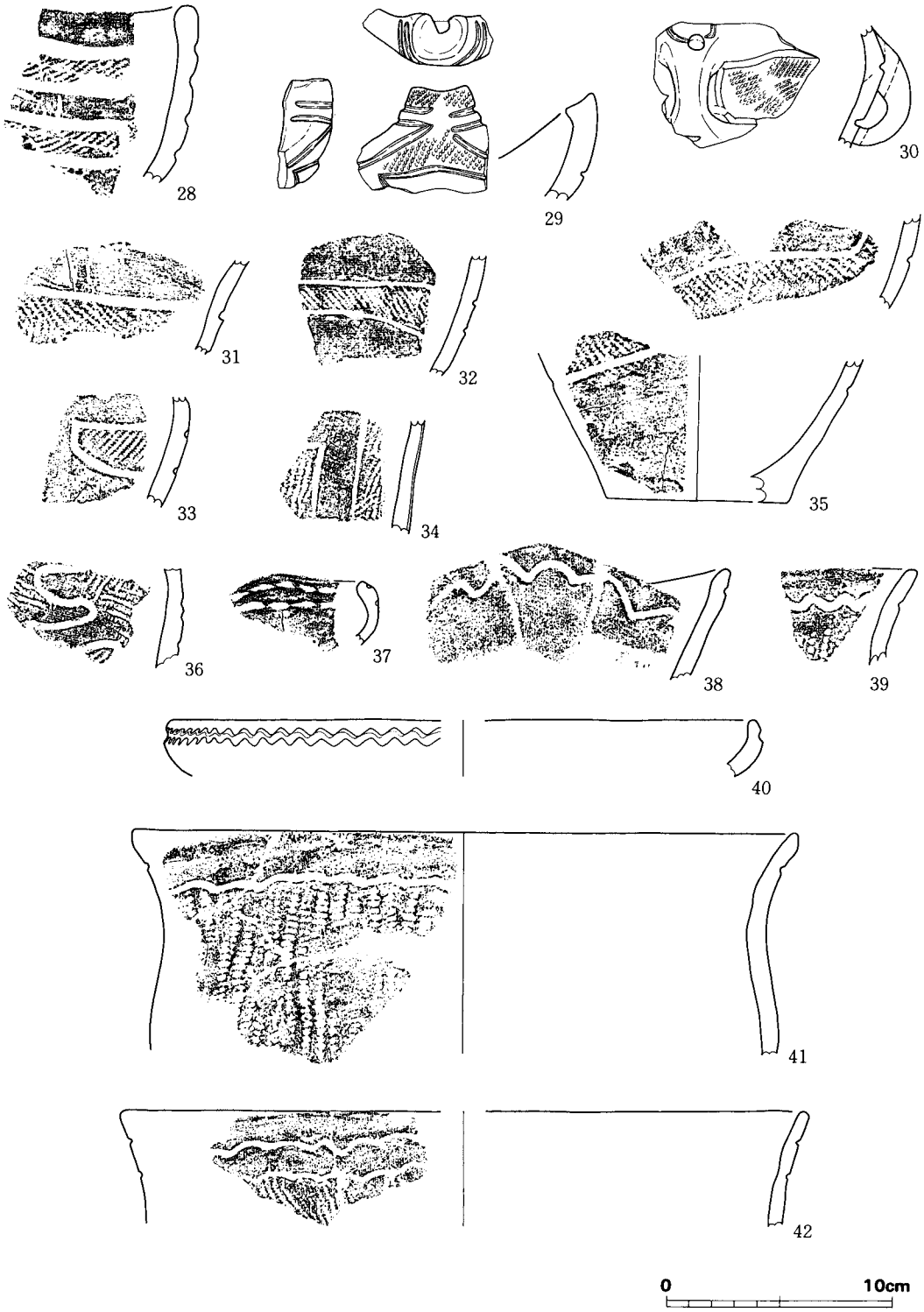
東地区からは、定形的な石器としては石錘が3点、磨製石斧が2点、打製石斧が9点、磨石類



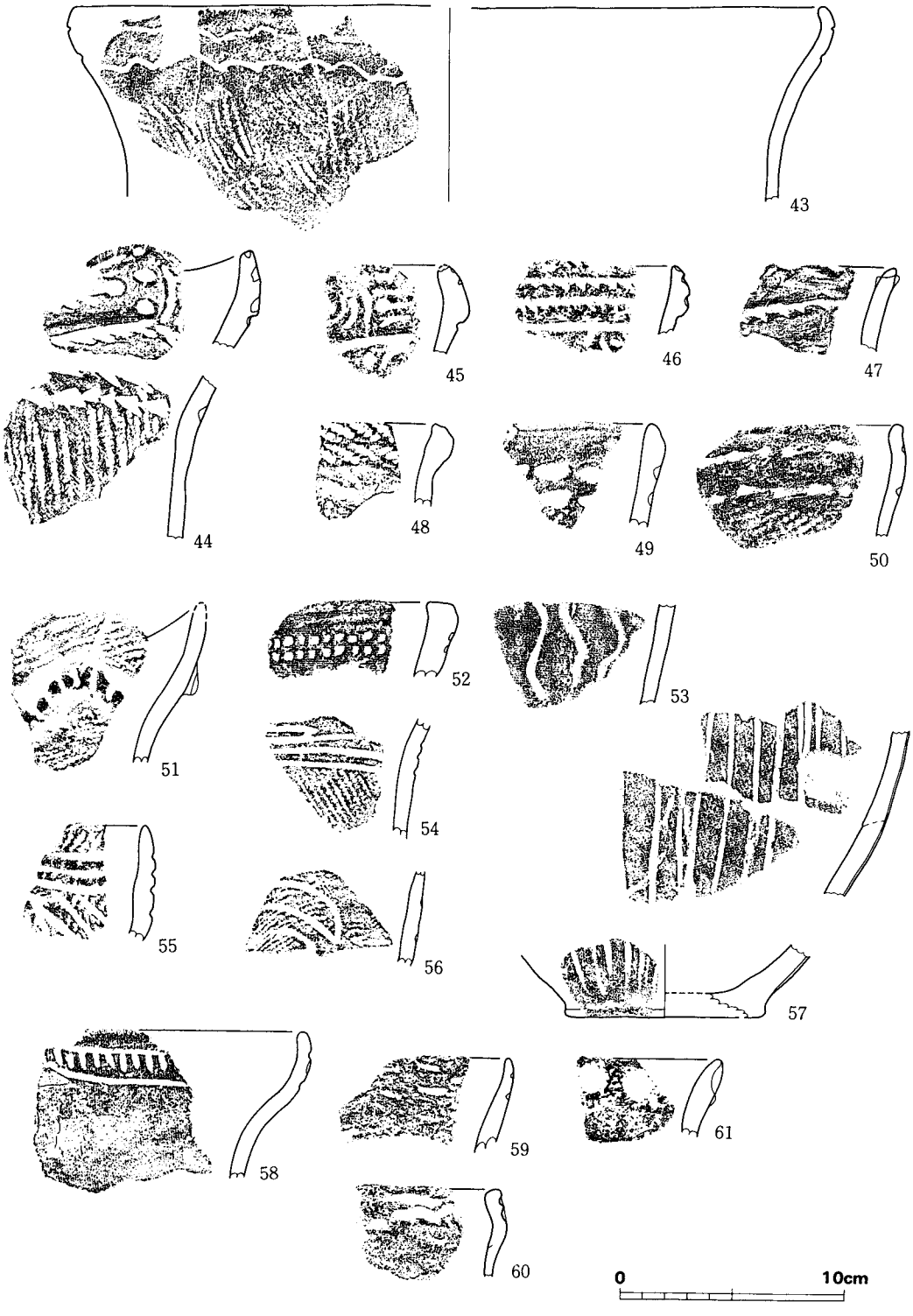
第35図　東地区出土資料１（⅓）



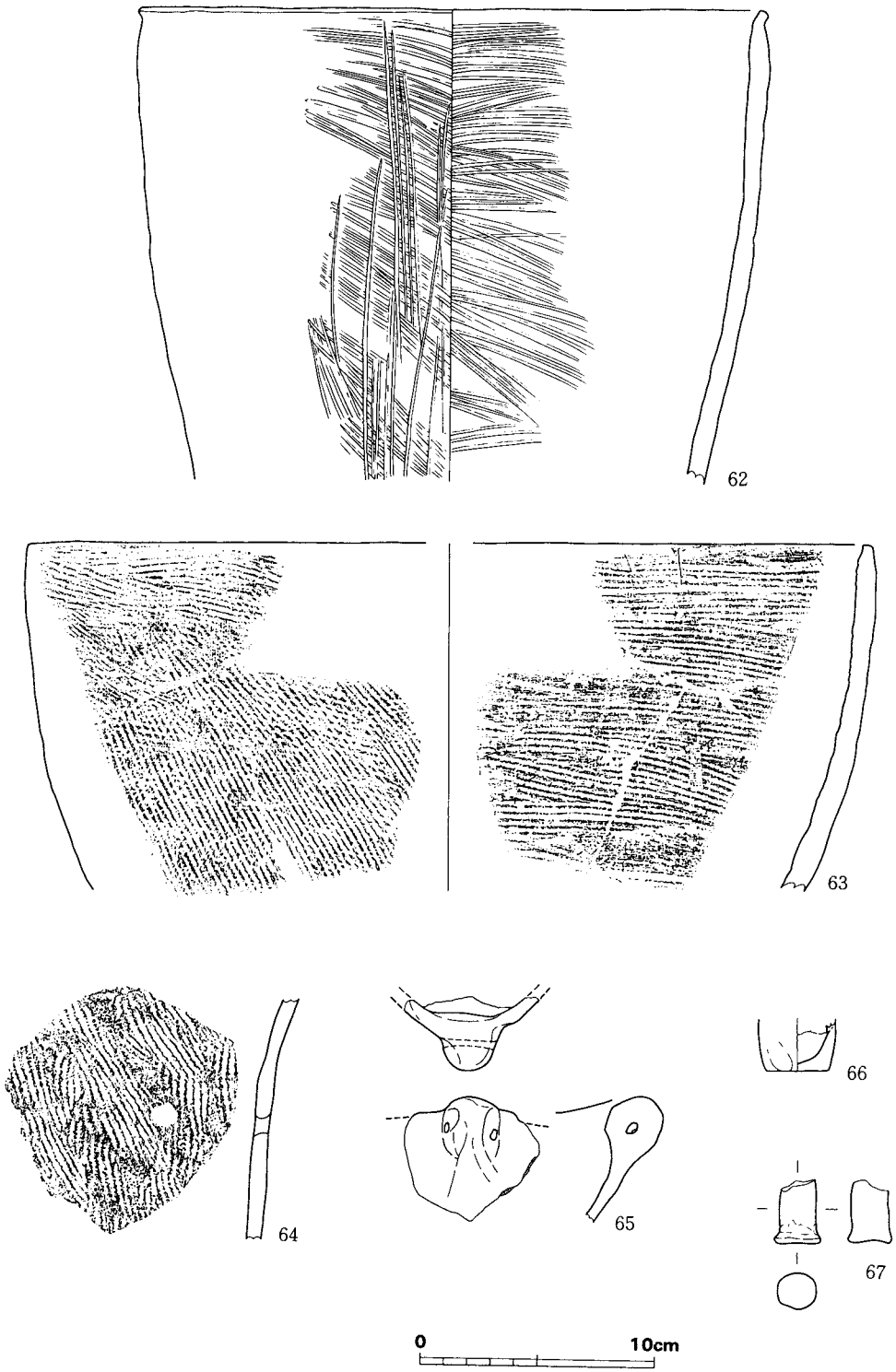
第36図　東地区出土資料２（⅓）



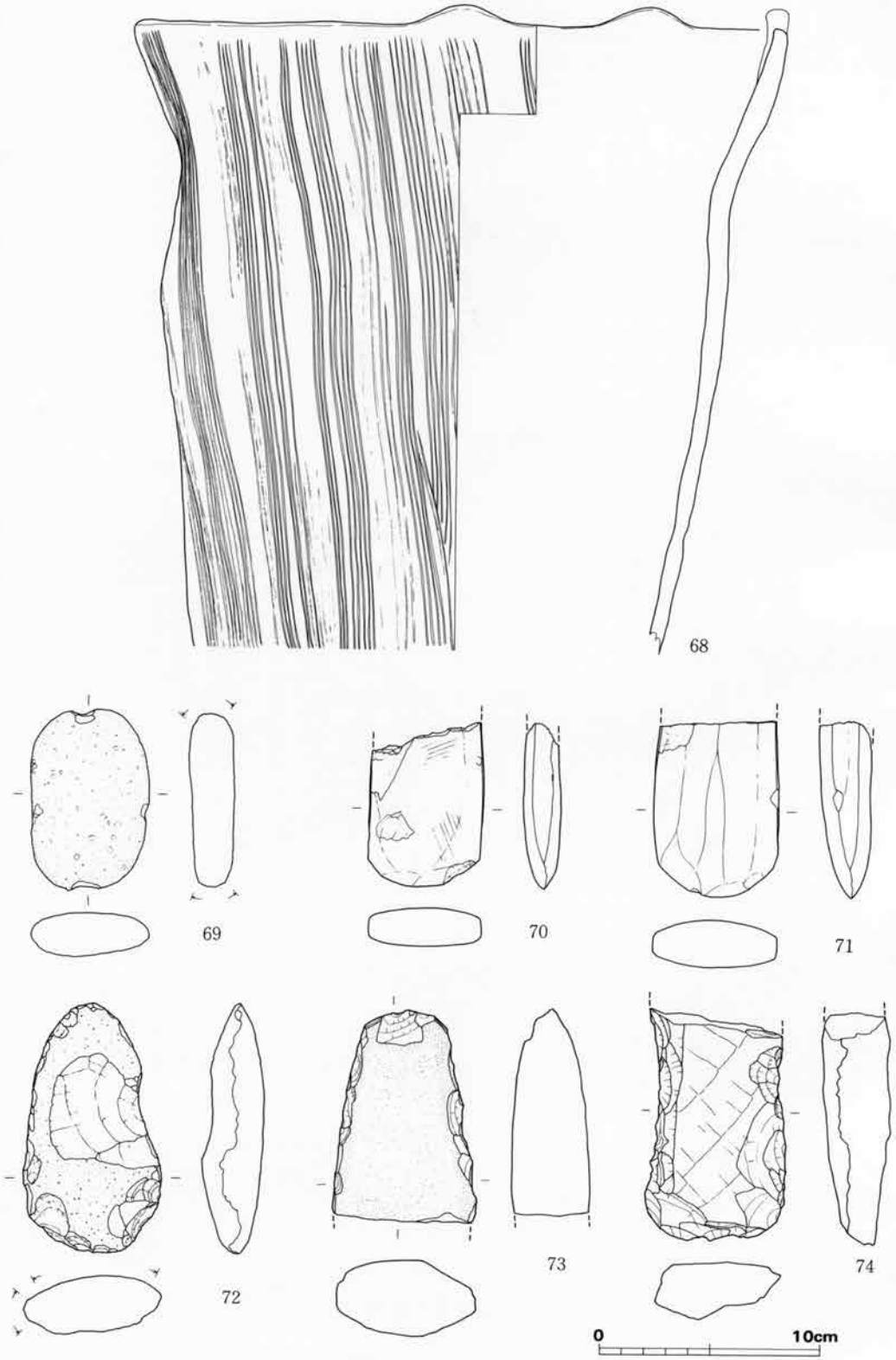
第37図　東地区出土資料３（⅓）



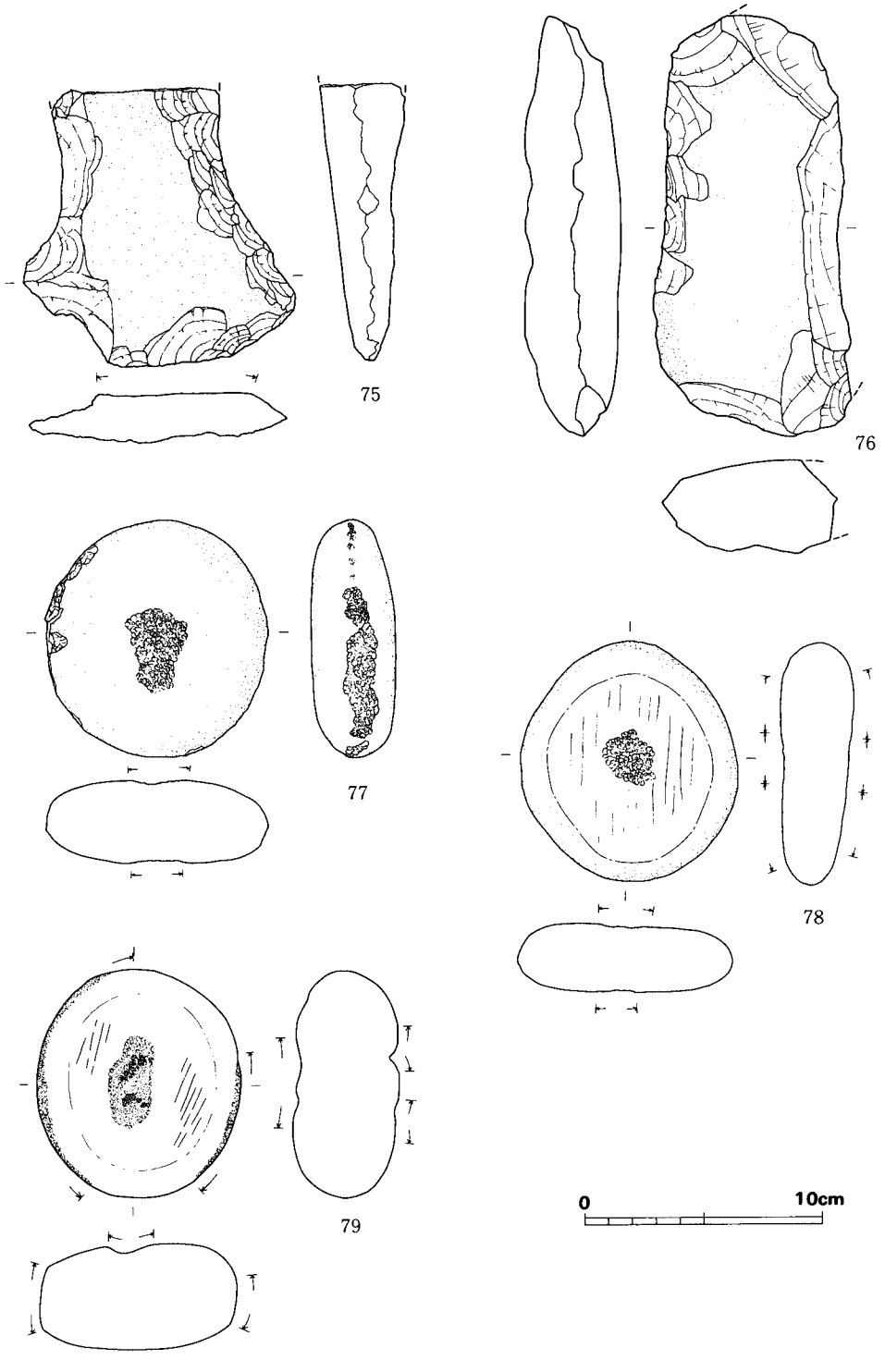
第38図　東地区出土資料４（⅓）



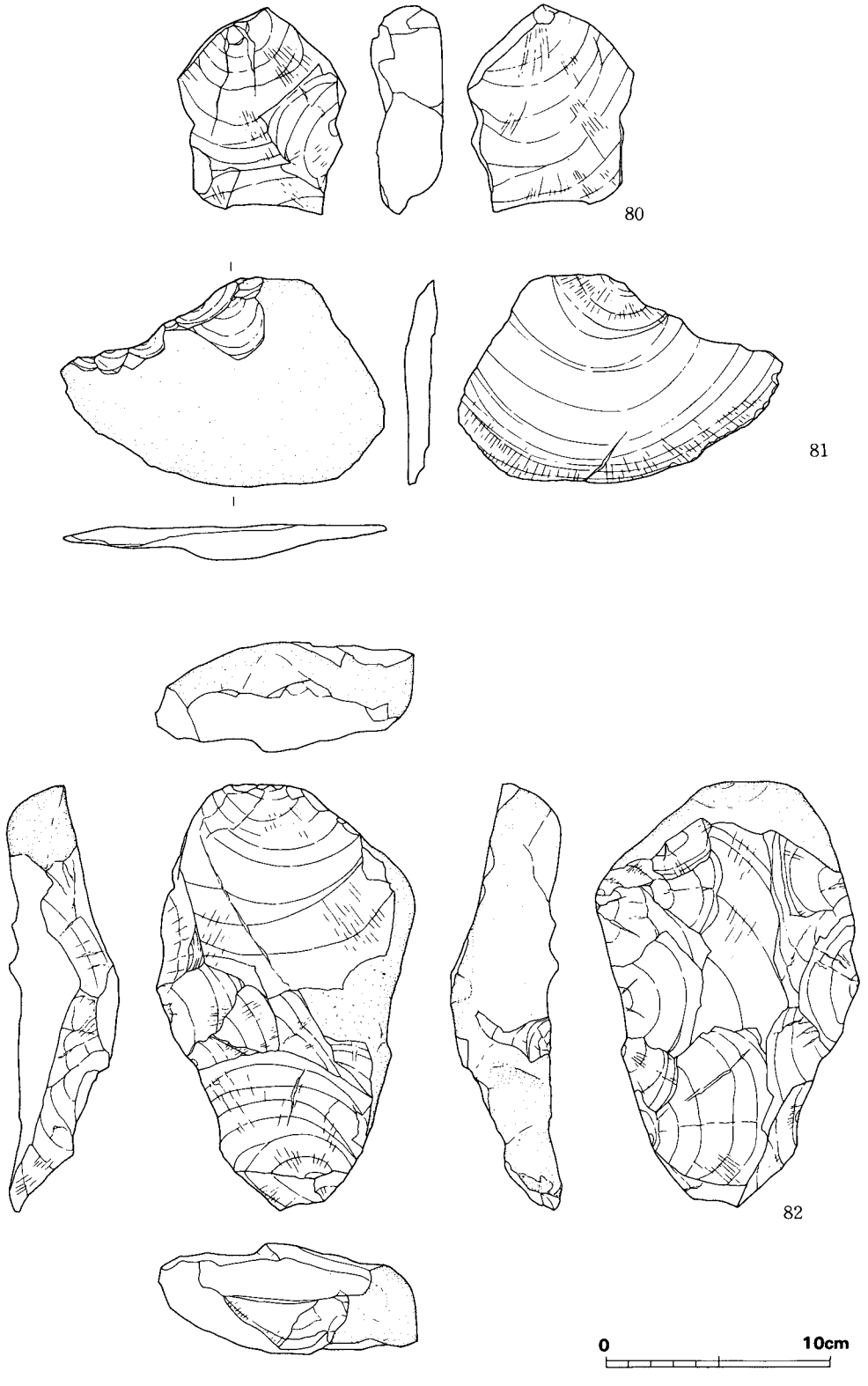
第39図　東地区出土資料５（⅓）



第40図　東地区出土資料６（⅓）



第41図　東地区出土資料７（⅓）



第42図　東地区出土資料８（⅓）

が3点出土している。このうち磨製石斧（70・71）及び磨石類（77～79）についてはすべて図化した。前者はともに定角式で刃部は弧状をなし、後者ではいずれも表裏両面において凹みを有する。また、77・79の側面には敲打痕がみられる。打製石斧としては72～76の5点を図化しておいたが、72の表面に着柄のためと思われる加工がみられるほか、73については磨製石斧の未製品である可能性が残る。その他、石錘はいずれも69のごとく礫の端部を打欠くものである。

これら以外では接合関係にある剥片2点（80・81）と石核（82）が出土している。石質は珪化凝灰岩と思われ、自然面や平坦面を打面としてやや横長ぎみの大型不定形剥片の生産が行われているようである。81は素材の表皮を除去する段階のものであろうか。重量は80が177g、81が142g、82が877gを測る。80と節理面で接合する剥片（未図化）が1点あるほか、ここで生産された剥片を素材とする石器は調査区内では検出されなかった。

第5節　中央地区の遺構と遺物

(1) 遺　　構（第43図）

直径約24mの円周上に並ぶようにして弧状に配置された、性格不明の穴が5基検出されている。いずれも旧河道の流水に由来すると思われる砂礫層を掘り込むが、覆土はどちらかといえばシルト質といえる。

ＳＸ01　Ｃ18区の西部に位置する。すぐ西側を西旧河道が走る。長径約0.8m×短径約0.6mの楕円形をなし、深さは約20cmと最も浅い。覆土は暗茶灰色土（シルト質）の単層であるが、河道跡に近いせいか他の4基とは異なり礫を多く含んでおり、検出が難しい遺構であった。

ＳＸ02　Ｂ18区の南東を占める。径約1.0mの不整な円形を呈する。深さ約30cmで、覆土は暗茶灰色土（シルト質）の単層。底部の平面形は卵形に近い。

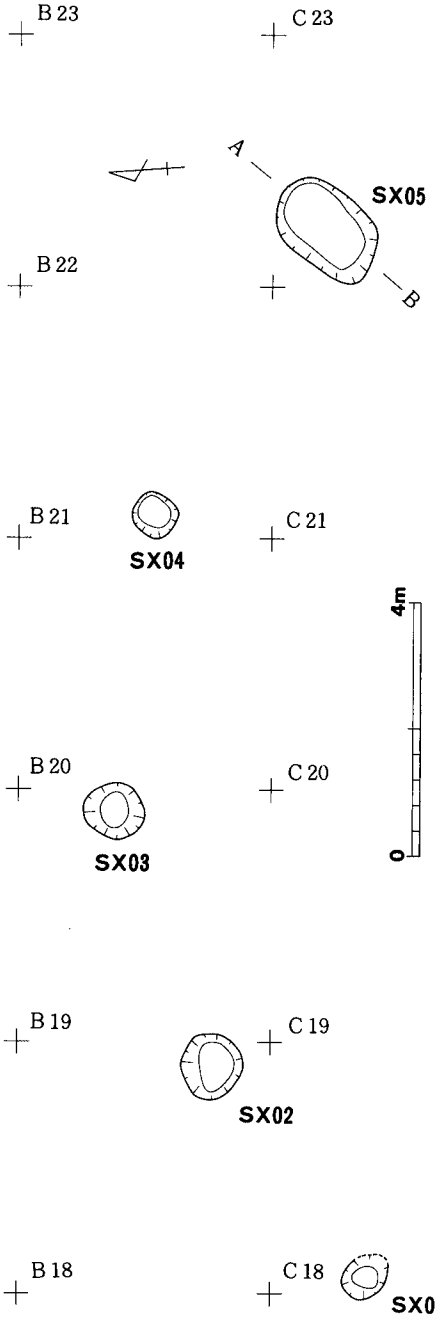
ＳＸ03　Ｂ19区の北東に位置する。径約0.9mの不整な円形をなす。深さ約35cmで、覆土はＳＸ02と同じ。底部は楕円形となる。

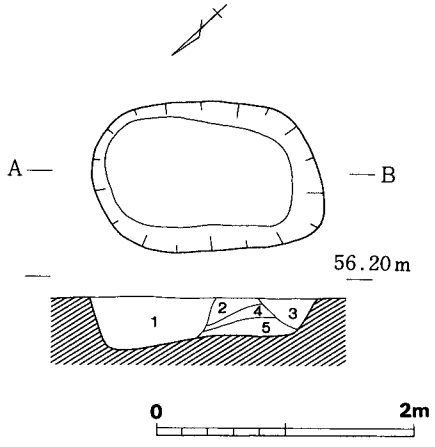
ＳＸ04　Ｂ21区の西部に所在し、形状は約0.7m×約0.6mの隅丸正方形状である。深さ約20cmで、覆土は前に同じ。

ＳＸ05　Ｃ22区の北西を占める。上述の4基がほぼ4m間隔で並ぶのに対して、ＳＸ04とこれとの間はやや長い傾向にあり、むしろ5mに近い。大きさも他の2倍近くあり、長径約1.8m×短径約1.2mの隅丸長方形となる。深さは約35cmを測るが、第43図に掲げた土層図からは南半部が北半部の掘方的性格を有する可能性も指摘できようか。ベースとなる砂礫層はこの付近では礫の含有量が少ない。

以上の5基の穴が営まれた時期については、後述するようにＳＸ05の覆土から磨消縄文をもつ土器片88が出土している点から、縄文時代後期前葉以降とするのが妥当とすべきであろう。河道跡の流水がなくなり、廃河道として埋積が始まりつつあった時期と考えられる。

次にＳＸ01～05の性格については、砂礫層の水はけのよさを利用した貯蔵穴、或いは直径約24mの円周上に16本の柱をめぐらしたウッドサークル様のものの柱穴などが想定される。とはいえ





1．暗茶灰色土(シルト質)
2．　〃　(少量の砂を含む)
3．　〃　(多量の砂を含む)
4．　〃　(シルト質・炭粒を多く含む)
5．　〃　(砂利混じり)
地山・砂礫層

SX05 実測図 (1/60)

第43図　中央地区遺構図 (1/120)

前者では堅果類などの植物遺体が確認されなかった点、後者では黒色粘質土から切り込んでいるとすれば深さが1m近くとなって柱穴としての条件を満たすが調査区が限られる点がネックとなって、双方に決め手がないのが実情である。類例をまちつつ今後とも検討してゆくべき遺構といえよう。

(2) 遺　　物（第44～49図）

a. 土　　器

遺構出土資料（83～88）

ＳＸ01から83、ＳＸ02から84、ＳＸ04から85・86が、そしてＳＸ05から87・88が出土している。83は波頂部の下部と思われ、太い沈線により上弦の弧線を重ねるようである。84はわずかに隆起が認められる幅5㎜の部分に半截竹管状工具を用いて連続的な刺突を行っている。無文の85では口縁下部に段がみられ、86は外面に粗いハケ状具による調整が施される。胴部片87では縄文地文上に平行する縦位の直線や波状線を描くが、これは半截竹管による半隆起線とは異なり、むしろ工具でなぞるようにしてＶ字状の深い沈線を描出し、平行沈線の間を断面三角形の半隆起線とする手法といえる。87は89と同一個体と思われ、85・86同様に胎土中に焼土粒が目立つ。残る88は縦位の曲線的な区画沈線間に磨消縄文がみられる。

中央地区1類（89）

縄文地文上に半隆起線を配し、それを貼付隆帯（浮文）で区切るもの。89（Ｃ14区）は口縁部が屈曲して直立ぎみに立ち上がる。その部分（口縁帯）に平行する2条の半隆起線を横走させ、それを縦位の短い貼付隆帯によって区切っている。口縁帯下端の屈曲部には櫛状具による刺突を施す。胴部には一定間隔に3条を1単位とする半隆起線を縦走させ、その間の縄文部では懸垂文として縦位の波状平行沈線がみられる。そしてさらに胴部を横に分割するように鉢巻状の隆帯がめぐらされ、その表面は間隔をもったオサエによって波状に盛り上がるように仕上げられている。本類の平行半隆起線が半截竹管状工具によるものとは異なり、Ｖ字状の深い沈線間を走る断面三角形状のものであることは前述のとおり。

中央地区2類（93）

櫛状具による刺突や逆「の」の字文がみられる浅鉢。口縁部が屈曲して立ち上がる浅鉢93（Ｃ26区）は貼付隆帯などを用いて横長の楕円区画や逆「の」の字文を作り出している。楕円区画内は沈線でふちどられ、そのさらに内側を櫛状具による刺突文で擬縄文風に充塡する。逆「の」の字文の内側に渦巻状の沈線がひかれているようだが、はっきりしない。器表は内外とも丁寧なヨコナデで仕上げている。

中央地区3類（91）

縄文地文上に連弧文を描くもの。91（Ｃ35区）では口端下部から胴上部と思われる部位に4条以上を数える横位の平行沈線を走らせ、その下に3段重ねの連弧文を配する。

中央地区4類（96）

双頭の波状口縁のもの。背の高い山形の波状縁を有する96（Ｂ16・Ｃ18・Ｃ20区）は、口縁の

形に沿うようにして3条の隆帯がめぐるが、その間に短く太い沈線を矢羽根状に施す。波頂部付近では渦巻状沈線のほかヒゲ状沈線とセットをなすブリッジ状の貼付文がみられる。3段目の隆帯が山形をなす付近では渦巻状の隆帯を伴っており、その下の不整な菱形状の沈線区画の内側は条線文によって充塡されている。一方、内面に口縁の形に沿って走る2条の幅広の沈線がみられるほか，波頂双頭部の谷間は内面側へ折り返されて2個1対の耳となる。

中央地区5類（95・97～99）

口縁部においていわゆる区画隆帯を有するもの等を一括した。95（B22区）は恐らく渦巻十楕円形を1単位とする区画を有すると思われ、そのなかに矢羽根状沈線を充塡するが、区画内をふちどる沈線を伴っていない。99（B22区）の区画隆帯もやはり渦巻十楕円形を1単位とすると推定されるが、ここでは内側に沈線によるふちどりがみられる。97（C27区）・98（B22区）は、隆帯も低く95・99に比して平面化しているとの印象を受ける。殊に区画上端での隆起はごくわずかである。98も渦巻十楕円形を区画の1単位としていると思われるが、渦巻部の隆帯は棒状であって内側に巻き込む感じにはならない。沈線によるふちどりのさらに内側に円形刺突がみられる。98では隆帯の貼付も雑となり、丁寧なナデも施されていない。横位の矢羽根状沈線に波状沈線（横位の葉脈状文）を加える文様がみられるほか、隆帯の付け根には円形の刺突が伴う。

中央地区6類（94・103～105）

円形の列点状刺突を有するものを一括した。波状部に渦巻状の隆帯をもつ94（B21区）では隆帯上に施す。2条の平行隆帯間に縦位の弧状隆帯を加えて横長の楕円形状区画を作りだす鉢形土器103（C27区）では区画の内側及び上段の隆帯の上側に円形の刺突をめぐらす。口縁部が内屈する浅鉢104（C28区）では文様は2段にめぐる円形の刺突文のみである。全体に粗いナデ調整が施されている。内屈する口縁部の2条の隆帯を結ぶように把手が付された105（C20区）でも細い中空の管状具による円形の刺突を施すが、隆帯上や把手上端にはみられない。脚台116も文様的には本類に含まれよう。

中央地区7類（90）

斜行沈線を地文とする口縁部に隆帯を貼付するもの。90（C22区）では「つ」の字の隆帯がみられる。隆帯や斜行沈線部には沈線によるふちどりがなされている。暗灰褐色を呈し、胎土中には石英などの微砂粒を多く含む。

中央地区8類（100）

胴部に矢羽根状沈線がみられるもの。外面にスス状物が付着する100（B21区）では、基軸となる縦位の直線的な沈線を伴っている。施文は反時計回り方向に行われているようである。本類の文様については形状によって葉脈状文と称されることもある。図化したのは1点のみだが、その他、基軸となる線の有無、単位ごとの縦位区画線の有無、隙間なく施されるものと縦位の無文帯を介在させるものなどバリエーションに富む。中央地区における本類では、隆帯を伴うものや基軸線を波状とするものは比率的に少ない。

中央地区9類（101）

胴部に波状の半隆起線を垂下させるもの。101（B24区）では縄文地文上に細い半截竹管状の

工具によって波状の半隆起線を描く。

中央地区10類（102）

櫛状具により器面を調整するもの。102（C19区）の外面は細かい原体を縦方向に、また内面では粗い原体を横方向に用いている。

中央地区11類（106）

胴部に縦位帯縄文がみられるもの。106（B21区）は口縁部を無文とし、その下端に微隆帯が伴う。縄文原体としては無節のものが用いられ、外面にはスス状物が付着する。

中央地区12類（92）

口縁部の区画内に沈線で横長の楕円形を描くもの。鉢形土器92（C34区）では区画の上下に配された幅広の低い隆帯に刻みを伴うが、この丸い棒状具を押し付ける刻みの手法は東地区16類と共通する。また、同一個体の細片にはこれによる先端刺突がみられ、工具は中空状のものと判断される。暗黄灰色を呈し、胎土中に焼土粒を含む。

中央地区13類（107）

口縁部に列点状の方形刺突をめぐらすもの。先細り状の口縁部が外反する107（B21区）では3段以上にわたってこれがみられる。

中央地区14類（108）

平行沈線間に列点状刺突を施すもの。口縁部が緩く外反する108（B20区）は、外面にスス状物が付着する。

中央地区15類（109）

口縁部が屈曲する浅鉢。109（B21区）は無文で全体的に丁寧なナデが施されている。また、面取りされた口縁端部には外傾する面がみられる。

中央地区16類（110）

口縁部に平行沈線をめぐらせる浅鉢。2～3条の平行沈線がめぐる110（B24区）の体部では浅く施文された縄文が散在的にみられる。また、口唇内面が突出する形状も特徴的といえる。

中央地区17類（111）

条線文による調整を主とするもの。111（B21区）では外面で2次加熱による赤化が認められる一方、底部には柾目状の圧痕がみられる。

底　　部（112・113）

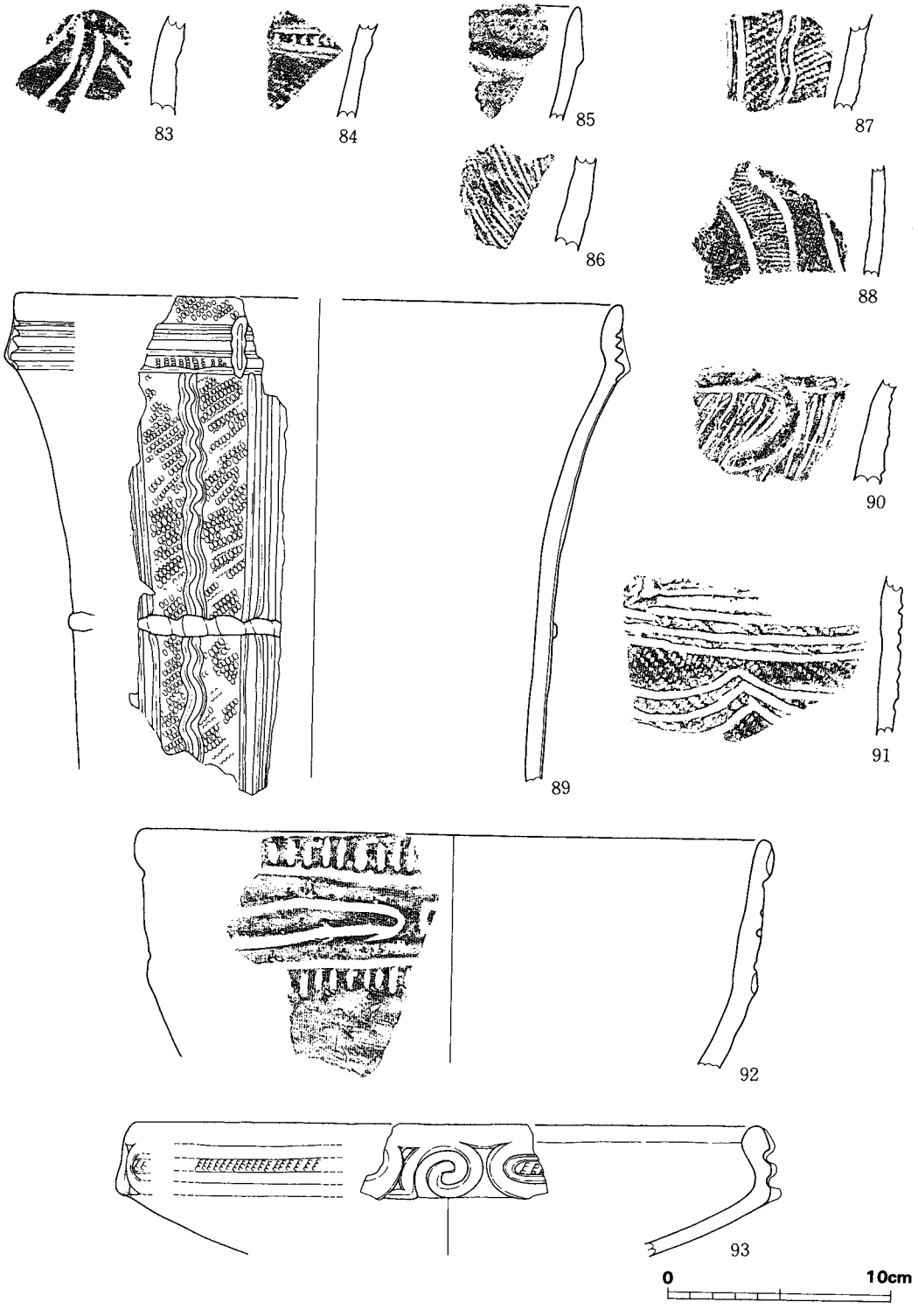
112（B25区）は外面に横走する縄文が施され、113（B21区）は無文である。前者では内面に使用によるヨゴレ、後者では外面にスス状物が観察される。

吊手土器（114）

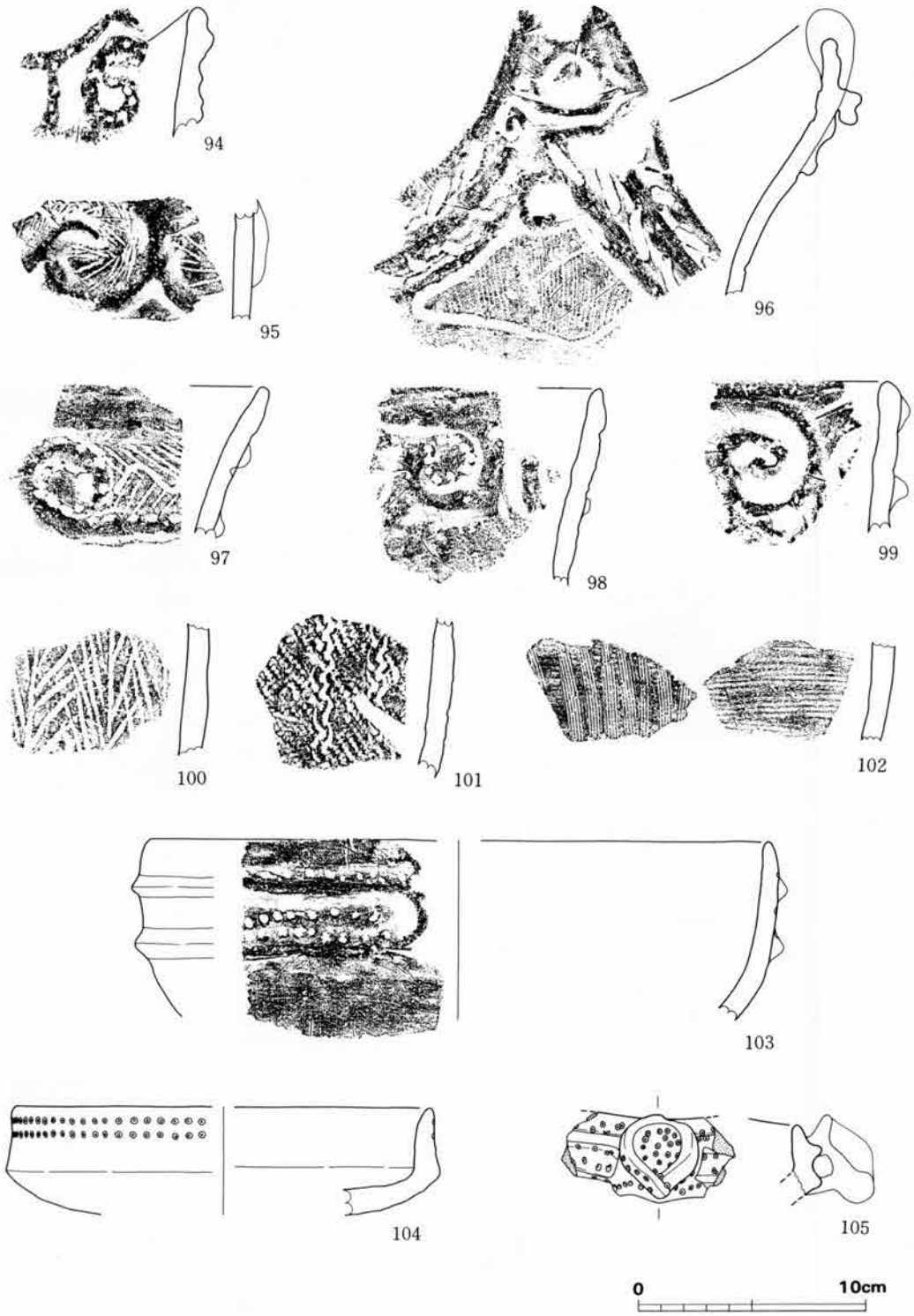
114（B20区）は十字にクロスするタイプのものであろう。上面には1条の凹線が伴う。

脚台を有するもの（115・116）

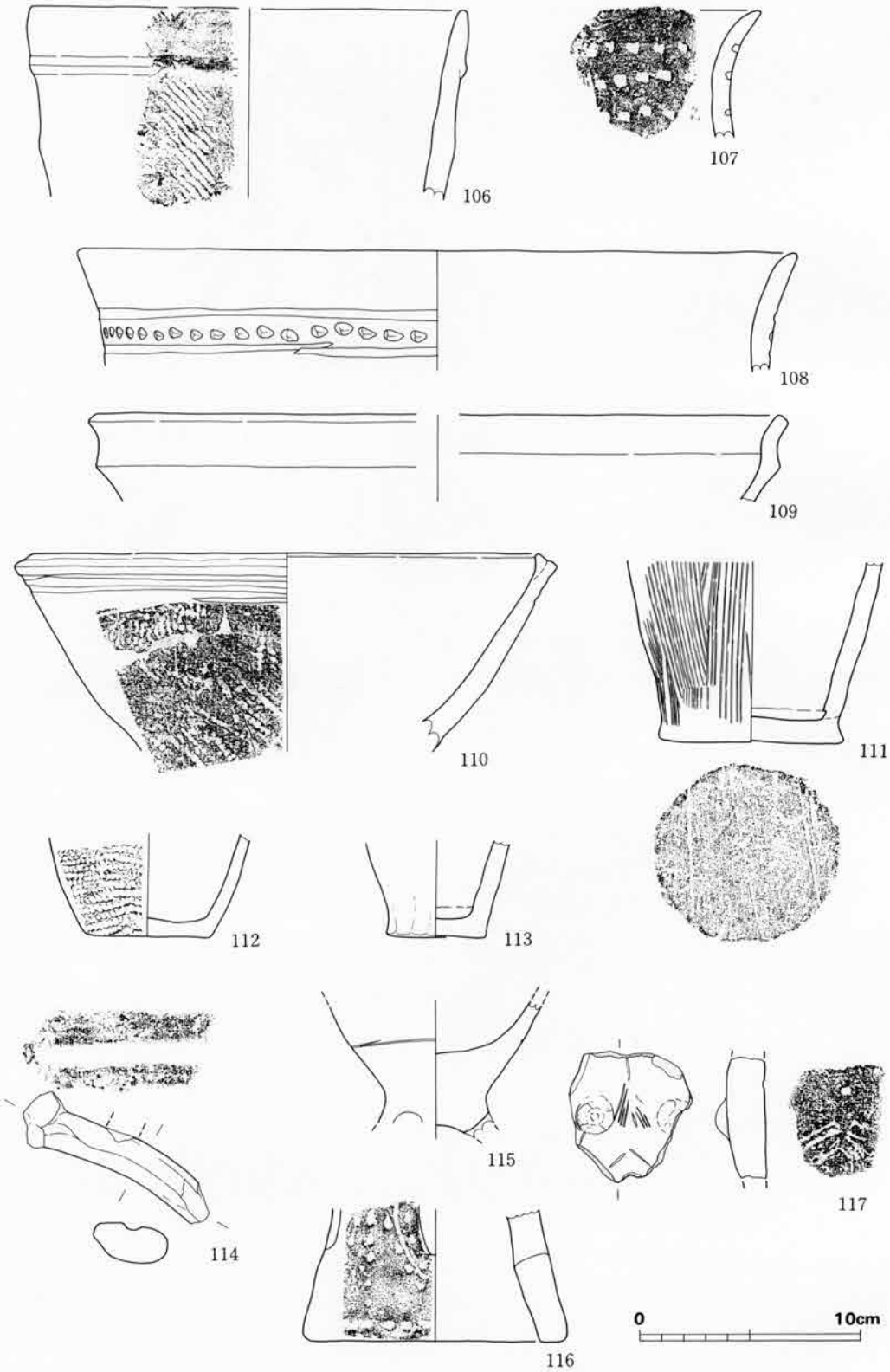
両者ともに透かしがみられる。115（B21区）の体部内面には炭化物が付着する。116（B20区）では透かし部を囲むような沈線とともに円形の刺突もみられ、文様的には前記の6類に属する。また、脚端部には幅1㎝の面がみられる。



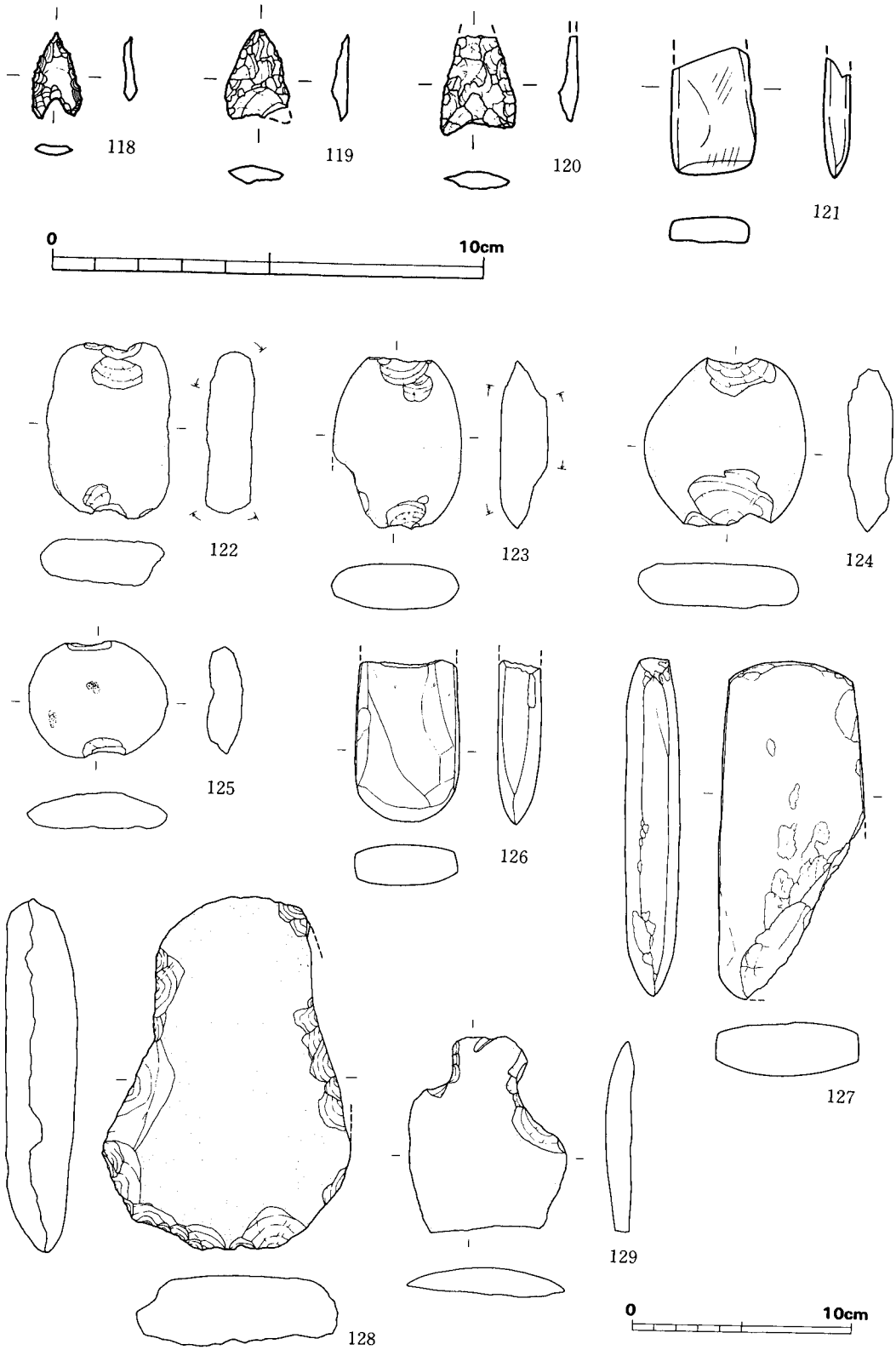
第44図　中央地区出土資料１（⅓）



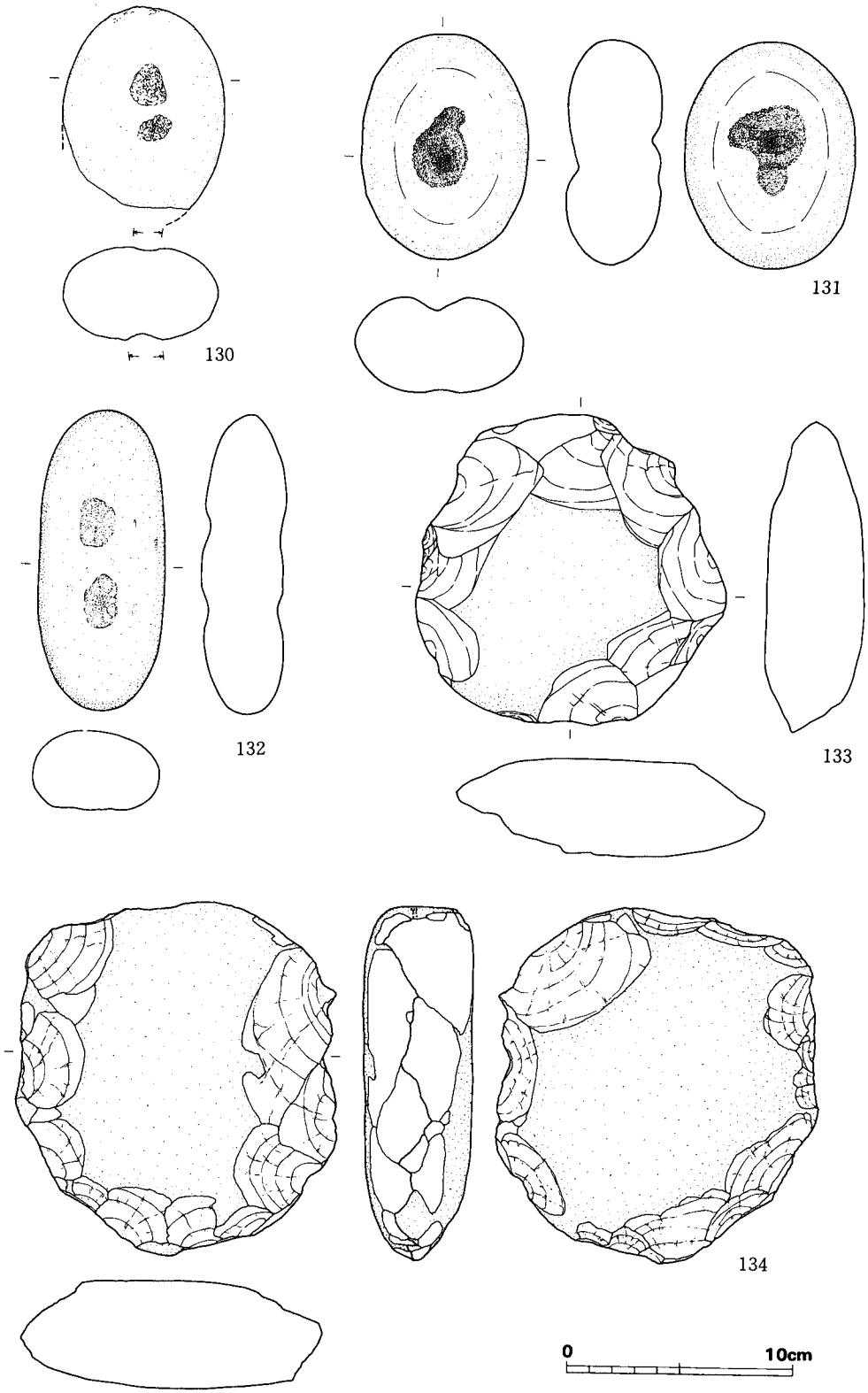
第45図　中央地区出土資料２（⅓）



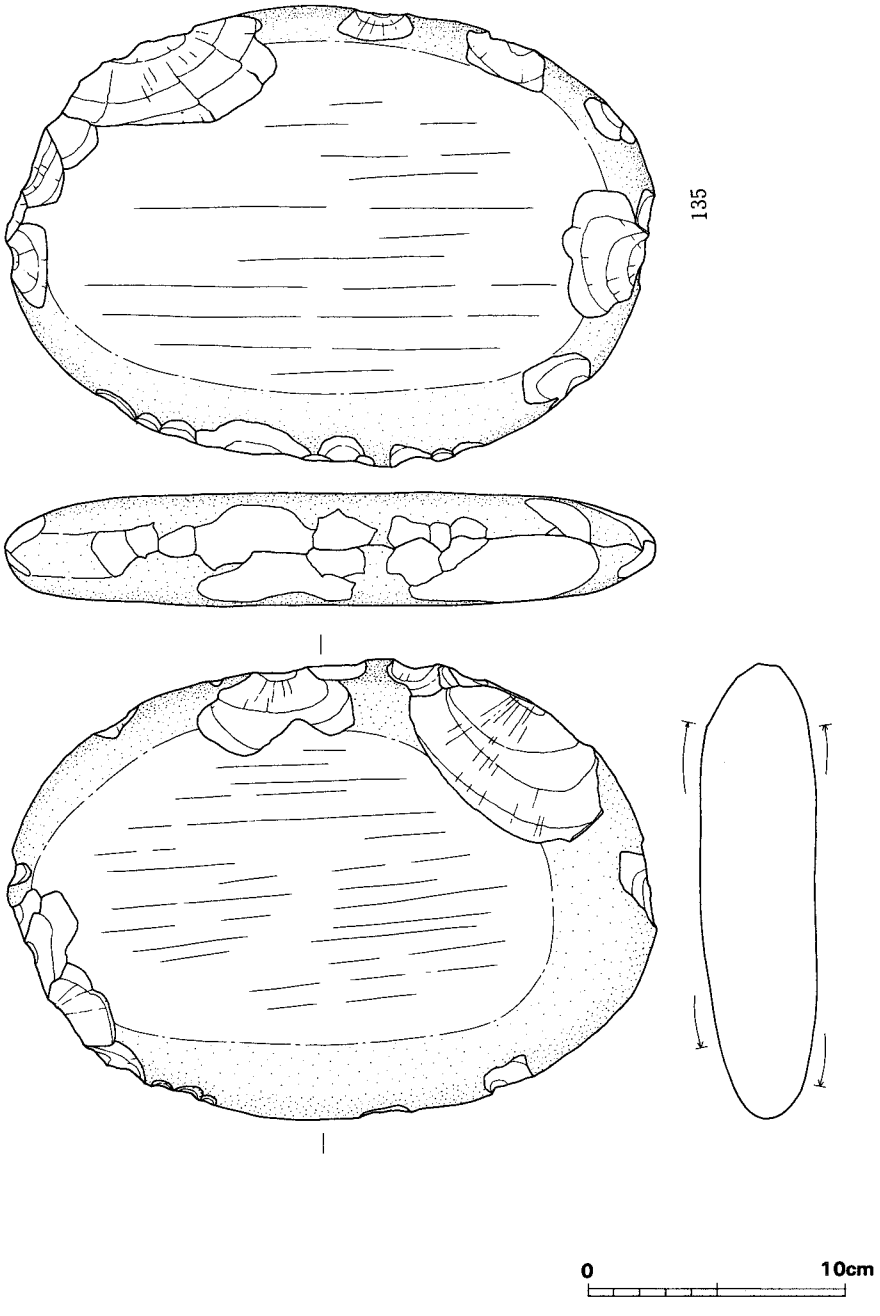
第46図　中央地区出土資料３（⅓）



第47図　中央地区出土資料４（⅔、⅓）



第48図　中央地区出土資料５（⅓）



第49図　中央地区出土資料６（⅓）

土　偶（117）

B20区から胸・腹部が遺存する土偶117が出土している。片方の乳房はすでに欠落してしまっているが、表裏両面に矢羽根状沈線による加飾が認められる。

b．石　器

中央地区から定形的な石器としては石鏃11点、石錘5点、磨製石斧4点、打製石斧18点、磨石類3点、石皿1点、砥石1点が出土している。石鏃（118～120の3点を図化）では凹基無茎が7点、平基無茎が3点、不明1点を数える。石質は黒色頁岩が7点で最も多い。石錘は4点を図化した（122～126）。いずれも礫の両端を打欠くもので、125は横長となる。磨製石斧は3点、（121・126・127）を図化した。いずれも定角式だが、121は著しく小型で伐採用ではなく木材加工に用いられた可能性が想定される。打製石斧は2点（128・129）のみ図化したに過ぎないが、128のように比較的大型で片面に自然面を大きく残すもの7点、129のごとく比較的小型で片面に自然面を残すもの4点（うち3点は薄く扁平）、小型で自然面を残さないもの7点に大別できる。欠損品が多く、ほぼ全形を窺えるのは128のみである。磨石類（130～132）は両面に凹みを有するもので占められるが、130の片面では磨痕及び焼けた痕跡が認められる。石皿（135）は長さ25.5cm、幅18.0cm、厚さ4.5cm、重さ約3kgの楕円形の礫を素材とし、両面に使用痕を有する。加えて縁辺部には敲打痕が伴う。砥石（未図化）は細粒砂岩製。

その他、定形的な石器ではないが石皿135と同様に交互剥離状の敲打痕がみられるものが2点ばかり出土している（133・134）。

第6節　西地区の遺構と遺物

(1) 遺　構（第50図）

長さ約30m、幅約10mを測る西地区では、土坑3基（ＳＫ07～09）と溝1条（ＳＤ01）が検出されている。

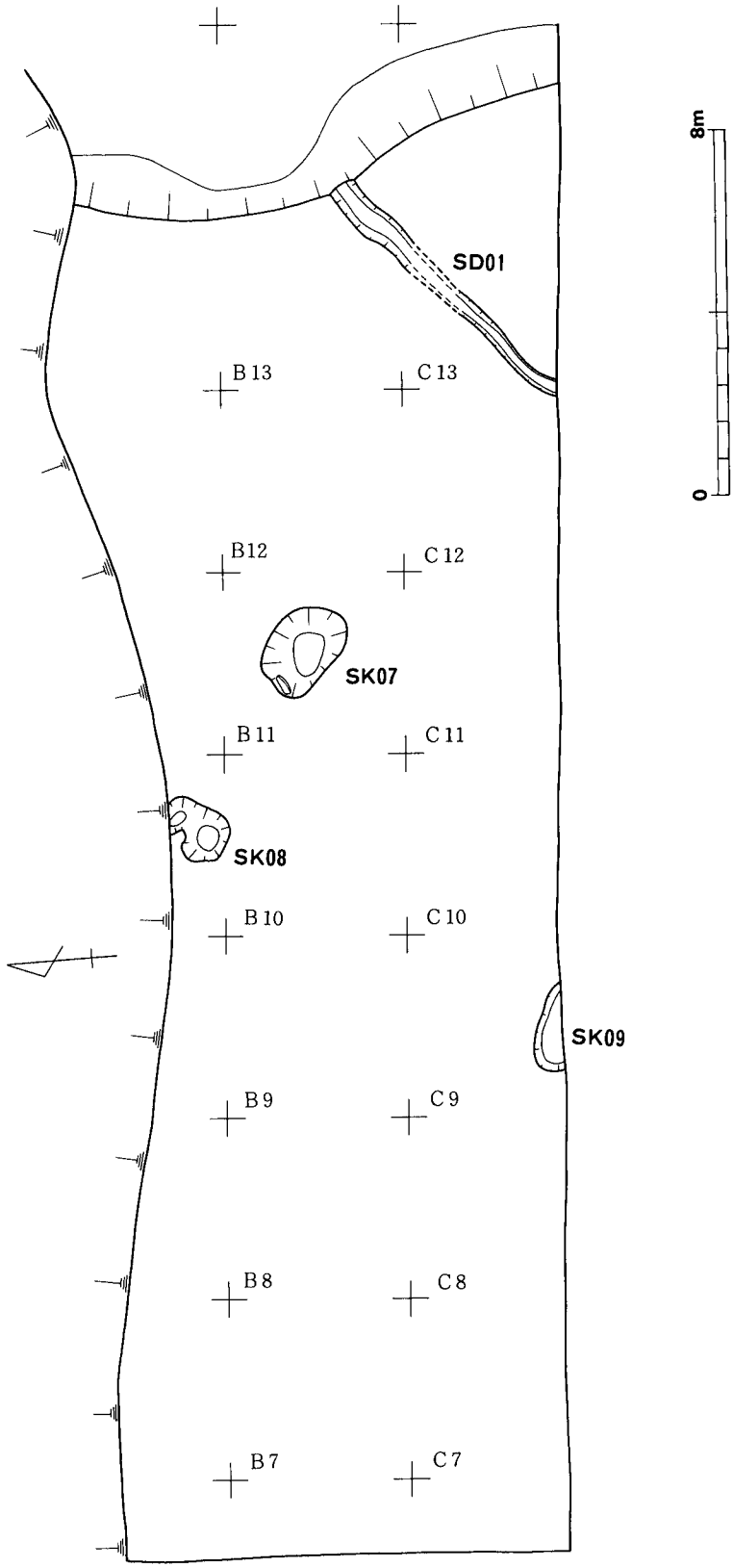
ＳＫ07　B11区のほぼ中央に所在し、長径約2.1m×短径約1.4mの不整な楕円形を呈する。深さは10cm未満に過ぎない。覆土は暗灰色土（シルト質）の単層。

ＳＫ08　A10区の南部に位置する。長さ1.4m以上、最大幅約1.2mを測る。平面形はピットを2つ連ねたような瓢簞形となり、深さは15～25cm。覆土はＳＫ07と同じ。

ＳＫ09　C9区の南部に位置する。楕円形を呈すると推定されるが、調査区南壁にかかっており半分以上は調査区外にのびている。土層については第33図に示したとおりで、濁黄褐色土（シルト質）から切り込まれ、元来の深さは約45cm、検出面からの深さは約25cmを測る。

ＳＤ01　西地区の東南端で長さ約6mにわたって検出されている。幅は40～60cm、検出面からの深さは5cm程度と浅い。覆土は暗茶褐色土（シルト質）である。

以上の遺構のうち、土坑3基については覆土の面から同一性が指摘できる。切り込み面や若干の出土遺物から縄文時代のものと考えて差し支えないと考えられる。一方、溝については恐らく弥生時代以降のものと推定される。



第50図　西地区遺構図（1/160）

(2) 遺　　物（51～55図）

a．縄文土器

西地区１類（136～140）

器面の装飾において半截竹管状工具による半隆起線を多用し、隆帯上に爪形文を施すもの。いずれもＢ11区出土。同一個体と考えられる136・137・140は、山形の波状縁に沿って３条の半隆起線と爪形文を施す隆帯を走らせＩａ文様帯とし、その下にも半隆起線や爪形文を施す隆帯によるＩｂ文様帯が形成されている。Ｉｂ文様帯の文様構成には不明な点が多いが、波状部には同心円状のモチーフ（140）もみられ、残部処理としてのヘラキザミ（137）もみられる。Ｉｂ文様帯と胴部との境にも横位の爪形文隆帯が配されている。その他、３箇の瘤状隆起を伴う棒状貼付文が波頂部に、また、瘤状貼付文がＩａ文様帯下端の爪形文を施す隆帯上にみられる。また、Ｂ11区のＳＫ07付近から出土した138・139も上記に類似する。

西地区２類（141）

１類同様に半隆起線を多用するが、隆帯上にヘラによるキザミが施されるもの。胴部片141（Ｃ７区）では半隆起線は幅細であるが、その間の溝は深い。

西地区３類（142）

やはり半隆起線を多用するが、各条が幅広で条間の溝が浅いもの。胴部片142（出土区不明）の半隆起線は立体感に乏しく平行沈線に近いものである。

西地区４類（143）

幅広の浅い沈線で文様を描くもの。沈線間は微隆起線状に浮き上がる。Ｊ字状の文様がみられる143（Ｃ７区）では、その下部に縄文を有する。半截竹管を裏返しに用いた可能性が高い。

西地区５類（144）

口縁に平行する低い隆帯を有するもの。口縁端部に面を有し口唇内面が突出ぎみとなる144（Ａ10区）では、補修痕がみられる。

西地区６類（145）

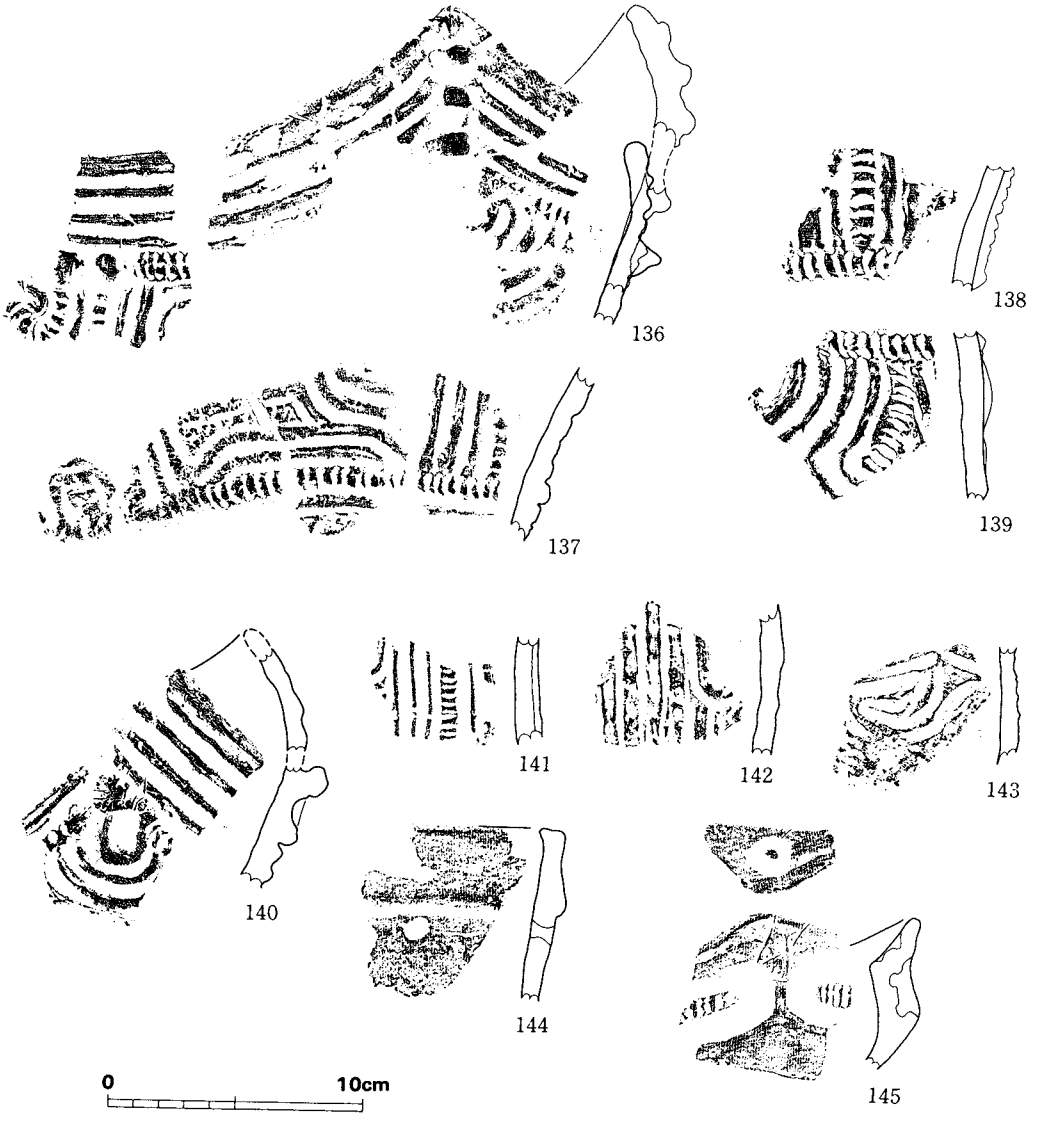
櫛状具による刺突文を有する浅鉢。波状縁をなす145（Ｂ10区）では波状部内面に円環状の文様を施す。外面のナデは丁寧といえる。

西地区７類（146）

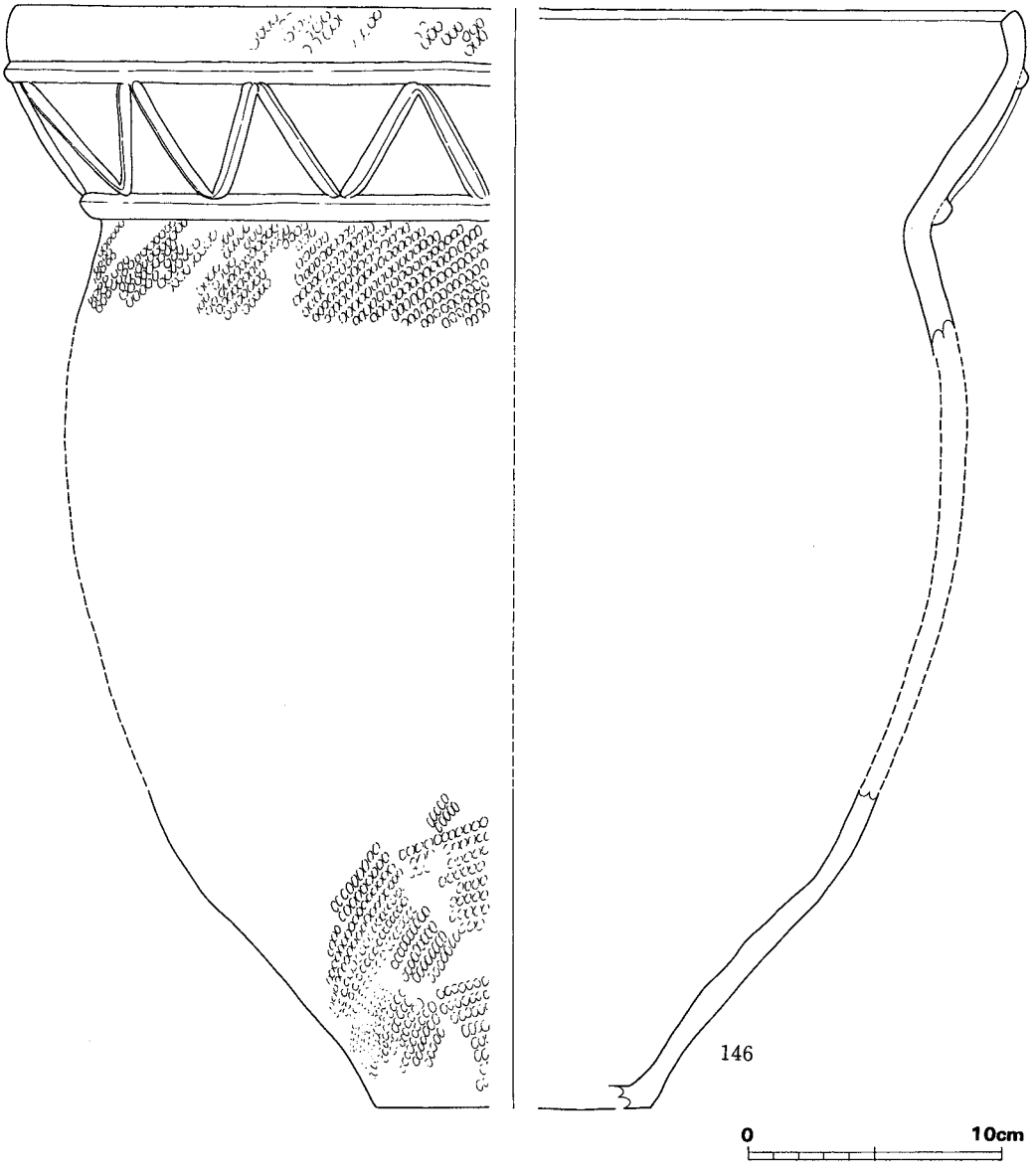
口縁部に貼付隆帯による文様を施すもの。146（Ａ７区）では横走する２条の間に斜行するものをジグザグ状に走らせ、上向き及び下向きの三角形を交互に配するような文様を表現している。器形はふくらみをもった胴部が頸部でくびれ、口縁部は内湾する。外面全体に縄文が施されているが、文様帯部では不明瞭となる。しかし、意識的に地文を消したとは断定できない。

西地区８類（147）

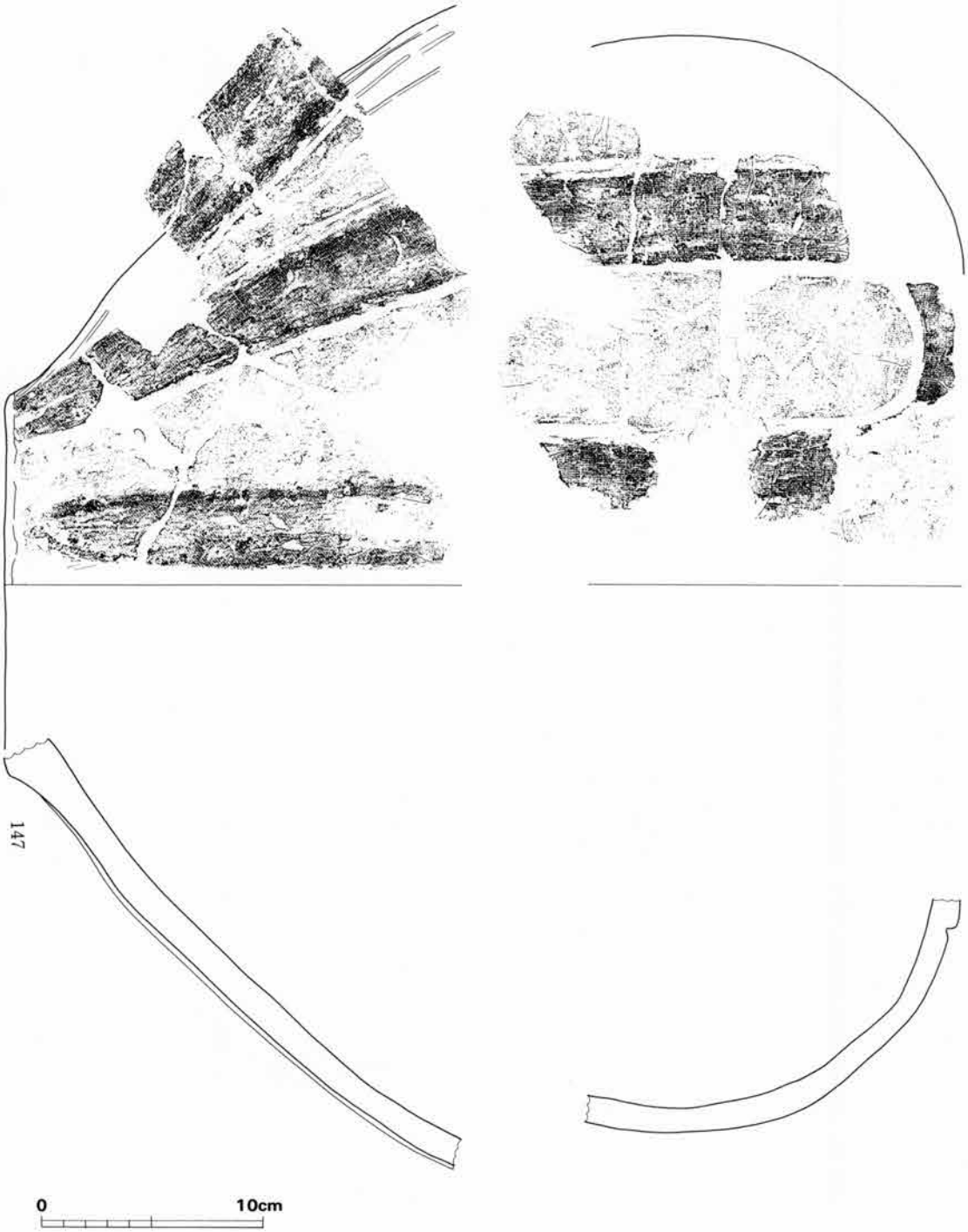
赤彩を施す大型壺形土器。147はＣ７区のベースとなるシルト層に喰い込むような状態で検出された。主として縦位の帯状をなす隆起部、隆起しない部分、両者を画する沈線によって文様が構成されるが、頸部付近で隆起部が連結するため隆起しない部分及びそれを取り囲む沈線は逆Ｕ字状になると推定される。赤彩は内外面ともに全面的に施されていたようである。調整も丁寧で



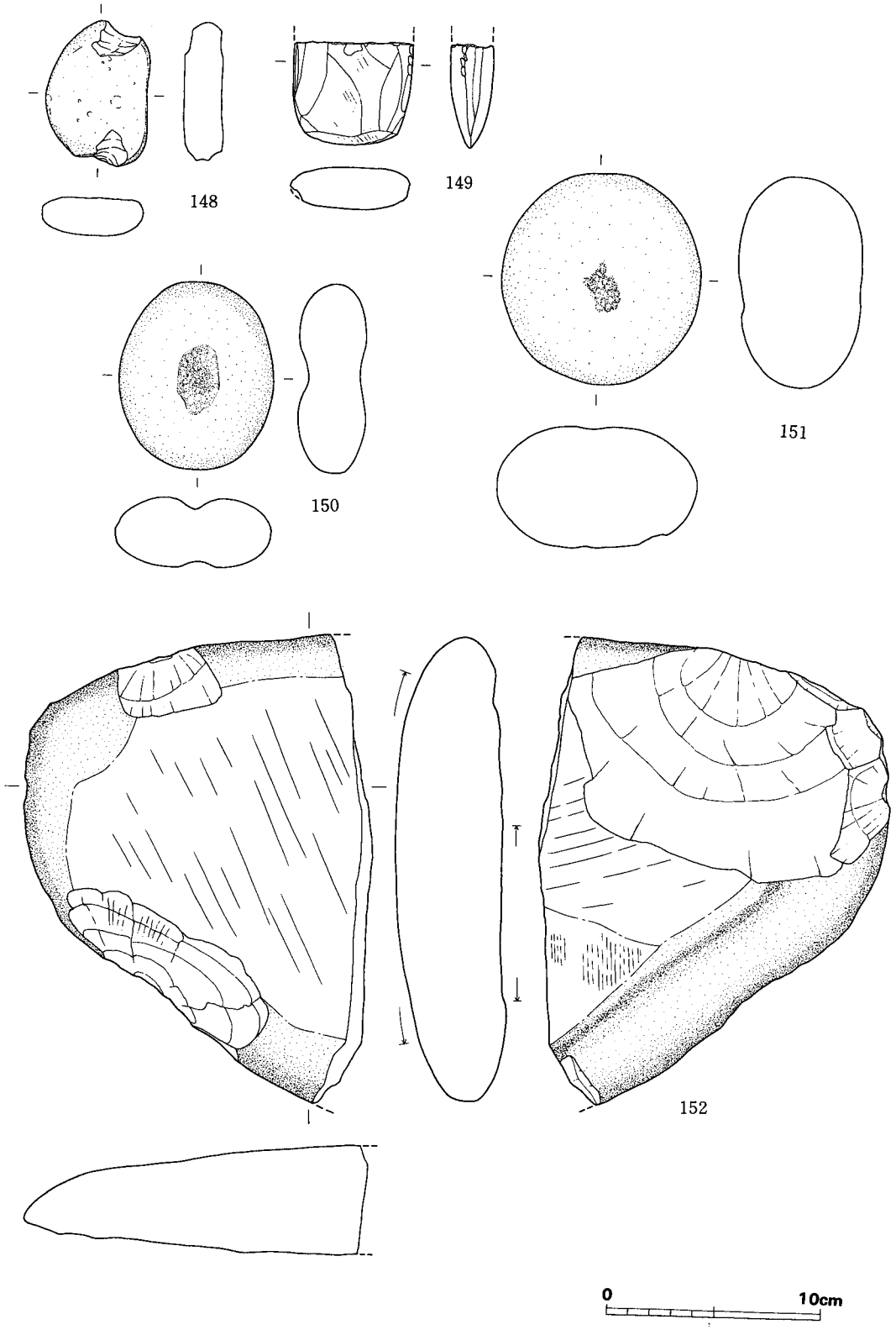
第51図　西地区出土資料１（⅓）



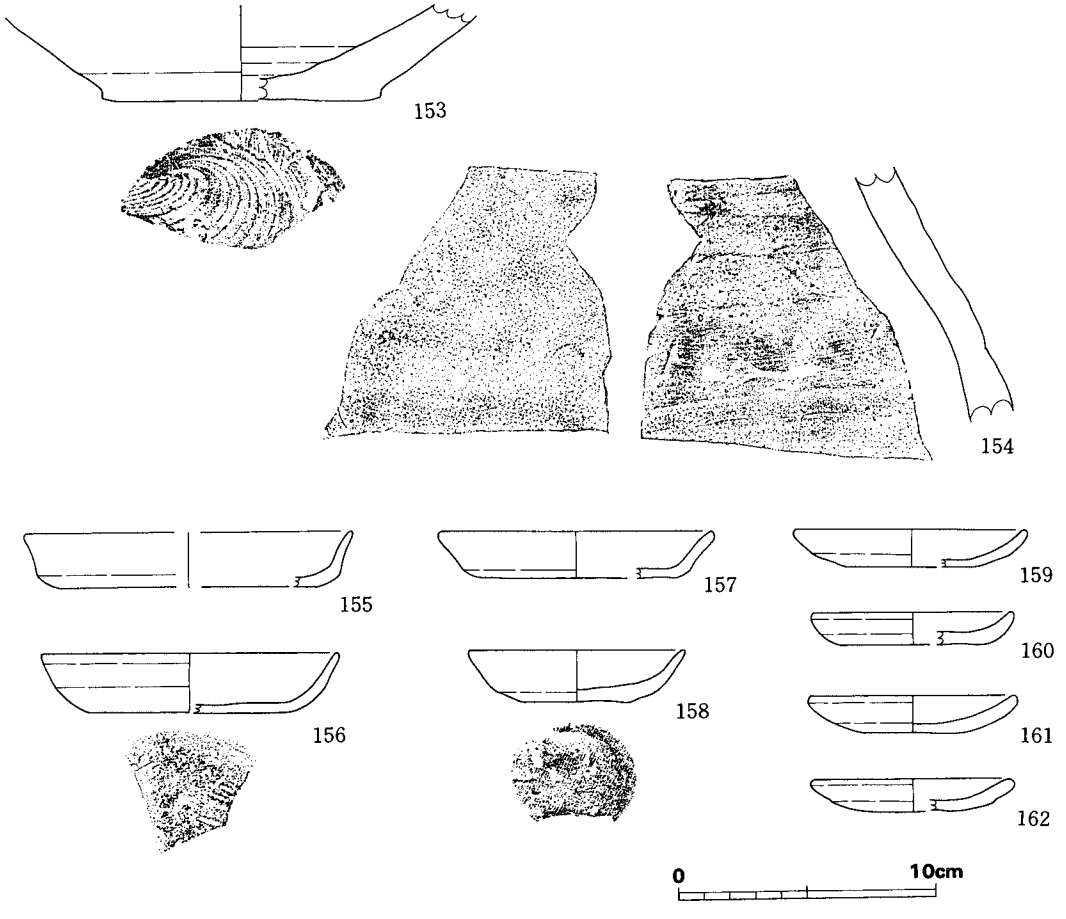
第52図　西地区出土資料２（⅓）



第53図　西地区出土資料３（⅓）



第54図　西地区出土資料４（⅓）



第55図　西地区出土資料５（⅓）

外面でタテ方向、内面でヨコ方向を基調とするミガキによって仕上げられている。底部付近で求めた径と肩部付近で求めた径が喰い違っており、全形を復原するのは難しい。類例をまって検討すべきであろう。本例には短く立ちあがる口縁部の下をめぐる鍔状の突起部の破片のほか、耳状部の破片2個も認めれるが、孔を有する破片は見当たらない。

b．石　　器

西地区から定形的な石器として、石錘1点（148)、打製石斧1点、磨製石斧1点（149)、磨石類2点（150〜151)、石皿1点（152）が出土している。打製石斧は基部のみの小片、磨石類は両面に凹みのみを有するもの、石皿は両面に磨痕を有するもので中央地区出土の135と同様に縁辺部に敲打痕を伴う。

c．中世の遺物

これに関しては第55図に一括して掲載した。糸切痕が残る153は珠洲焼の壺の底部と思われ、底径は10.9cm。加賀焼の大甕の肩部片とみられる154は表面にみられる自然釉や灰白色で軟質な胎土から推して湯上窯の製品と考えられる。製作時期は14世紀前半頃に位置付けられよう。内面の調整はヨコナデによる。155〜162は土師質土器で、158・160の底部には糸切痕がみられ、12世紀後半〜13世紀初頭頃に属すると考えられる。その他は14世紀前半代頃のもので、やや深身の中皿（155〜157）と底部からの立ち上がりが不明瞭な小皿（159・161・162）の二者に大別できる。

第7節　長滝遺跡採集資料

発掘調査が行われていた時期、調査区に隣接する地区では県営ほ場整備の工事が進みつつあった。本遺跡では水田の耕土直下が縄文時代の遺物包含層となる箇所が多いため、重機による耕土の移動の過程で、広範囲にわたって包含層が露出するところとなった。第56図に掲げる資料は主として調査に参加した中村繁和氏が調査区南側の工事区域で採集したものである。

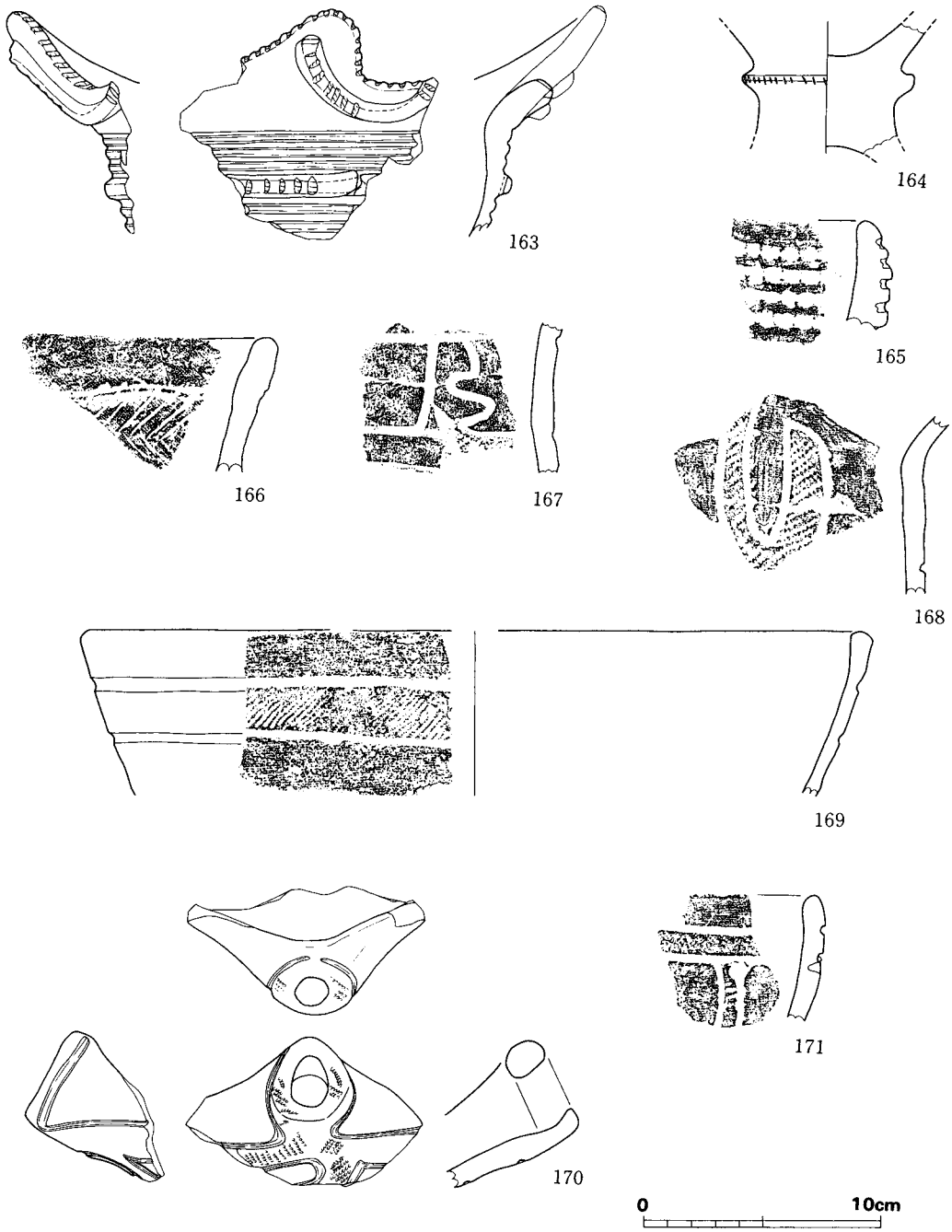
a．縄文土器（第56図）

163は口縁端部及び隆帯上に櫛状具による刺突を施す。波状縁をなす口縁部には入字状の突起が、また胴上部を中心とする部位には多条の半隆起線が横走する。脚台を有する164は、中実となる柱条部にキザミをもつ突帯をめぐらす。165の口縁部には中空の管状具による深くて連続的な刺突が多段に施されている。166は口縁部に横位の矢羽根状沈線がみられる。

蛇行沈線を伴う167は口縁部が大きく外反する器形になると考えられる。残る168〜171は磨消縄文がみられるもので、168ではJ字状、169では口縁に平行する縄文帯を有する。170は特異なもので、同一個体の同様なものがもうひとつ採集されているところから双口土器と思われる。171では末端刺突をもつ沈線がみられる。

b．石　　器

工事区域内からは石鏃1点、石錘3点（うち1点は切目石錘)、磨製石斧1点、打製石斧8点が採集されている。



第56図　工事区域内採集資料（⅓）

c．弥生土器

調査区西端よりさらに西側で、無文で有段となる甕形土器の口縁部が2個体分採集された。法仏式頃のものと考えられる。

第8節　出土土器の概観　－まとめにかえて－

これまでの節においては、各地区ごとに遺物の説明を行ってきたが、筆者の不勉強もあって混乱した記述も多い。章末にあたり今一度整理を試みることにする。

(1) 各地区の概況

まず東地区では縄文時代中期後葉に遡る資料は少なく、後期初頭～前葉の資料を主体とする傾向にある。面積約80㎡と狭少ながら、50～60㎝に及ぶ遺物包含層の厚い堆積がみられ、縄文集落の中枢部の一角を占めると判断される。遺構密度も高い。

次に調査面積の7～8割からなる中央地区は旧河道が埋積した部分であり、遺物の大半は集落跡の存在が確実な南側から廃棄された可能性が高い。或いは集落に近接した水辺での生活の一端があったのかもしれない。出土土器は中期後葉の大杉谷式が主体であるが、何分にも小砂利をかきわけての潮干狩的な採集品のせいか、接合できる資料は意外と少なかった。また、この地区の資料には時間等の都合で図化しなかったものも多く、それについては写真で補うことにした。参考にして頂ければ幸いである。遺構としては弧状に配置されたＳＸ01～05の存在が注目される。

残る西地区（面積約300㎡）包含層が薄く遺物出土量も少ない。遺跡の縁辺部と考えられる。土器では古府式のものが目立つ。

(2) 出土土器の分類

今回の調査で出土した縄文土器は古府Ⅱ式（中期後葉）から気屋Ⅰ式（後期前葉）までのものを主体とする。大きく分ければ以下のとおり。

第Ⅰ群（古府式系統）

東地区1類、中央地区1類、同2類、同9類、西地区1～4類、同6類、同8類等が本群に含まれると思われる。このうち器面全体を幅広の半隆起線で飾り、爪形文を施した隆帯で文様帯を分割する西地区1類は最も古相を留めたグループといえよう。中央地区1類、同2類、西地区6類、表採資料163では古府Ⅱ式の指標である櫛状具による刺突がみられる。西地区8類は赤彩された鍔付の大型壺である。

第Ⅱ群（大杉谷式系統）

東地区2類、中央地区5類、同6類、同8類、同11類がこれに含まれるものと思われる。胎土・色調等にも共通性を有する一群である。中央地区11類は本群でも終末頃に位置付けられよう。そのほか、土偶117も胎土から推して本群に伴う可能性が高い。

第Ⅲ群（北塚式系統）

双頭の波状口縁をもつ中央地区４類に代表される。胎土・色調の面では第Ⅱ群と何ら変わりないものもあり、すべてを搬入品とすることはできない。大杉谷式の分布圏の縁辺部にあたり、北加賀と接する地域では、この種の土器が少量ながら混じるようである。とはいえ、胴部に葉脈状文を有する破片の場合、両者の識別は容易ではない。

第Ⅳ群（東海・西日本系）

第Ⅰ群に併行する時期のものとしては、胴上部に連弧文を有する中央地区３類をあげることができる。西地区７類も東海地方からの影響が考えられるが断定はできない。その他、図化できなかったもののなかにも、屈曲の強いキャリパー器形で２段に弧状の粘土紐を貼付して連結部に渦巻文を配するもの、キャリパー状の口縁部の上端が直立ぎみに立ち上がるものなどが含まれており、やはり東海地方からの影響が想定されよう。

中期末葉頃に位置付けられるものとしては、東地区15類があげられる。この類例は東海地方では愛知県南知多町林ノ峰貝塚のＨ層〔山下　1990〕などにみることができる。口縁帯に横長の楕円形沈線と上下１対の円形文を配したもの（未図化）にも該期における同地方からの影響が指摘できよう。

第Ⅴ群（中津式系統）

磨消縄文を有する一群で、東地区６類によって代表される。波頂部から垂下する縦位の無文帯を作り出し、そこに第Ⅱ群で特徴的な矢羽根状沈線を描くもの（27）がみられることは、第Ⅱ群の終末の時期と本群の盛行期が時間的にさほど大きく隔っていないことを物語っているものと思われ、興味深い事例といえる。

第Ⅵ群（前田式系統）

東地区３類、同４類、同５類、同７類、同13類、中央地区13類、同14類、同16類がこれに含まれるものと考えられる。東地区11類も恐らく本群に属すると思われる。また、中央地区12類、同15類については胎土・色調が第Ⅱ群に近いことから、本群ではなくむしろ第Ⅱ群の終末期近くに位置付けるべきであろう。

第Ⅶ群（気屋式系統）

ほとんどが気屋Ⅰ式と考えられ、米沢義光氏の分類〔米沢　1989〕に基けば、東地区８類及び同９類が「気屋Ⅰａ式」に、また同10類が「気屋Ⅰｂ式」に比定できるのではなかろうか。同16類も口縁部が内湾する器形から前者に含めてよいものと思われる。本群の出土はほぼ東地区に限られる傾向にある。

(3)　出土土器各群の流れ

以上、出土土器を７つのグループに分類してみたが、本遺跡の出土状況からはそれぞれの細かな年代的位置付けについて語ることはできない。加えて接合不能な小片が大半を占め、文様構成の明らかな資料に恵まれないこともあって、各群のより細かな分類には資料的限界が伴うことになる。したがって、ここでは各群相互の大きな流れについて述べるに留めたい。

まず、縄文時代中期後葉については、大きくは第Ⅰ群→第Ⅱ群となる。第Ⅰ群の時期までは、本遺跡の西方丘陵上に位置する莇生遺跡〔西野　1978〕でも集落の形成がみられたが、第Ⅱ群の時期に至り莇生遺跡の集落が急速に消滅に向かうのと入れ替わるようにして、本遺跡は手取川扇状地左岸扇側部を代表する拠点的な遺跡に成長するようである。調査地点が縁辺部に限られたため、今回の発掘では竪穴住居跡等を検出することはできなかったが、県営ほ場整備事業に係る事前の試掘調査の結果、3万数千㎡に及ぶ範囲において厚い包含層の分布が明らかとなり、このことは一大集落跡の存在を想定するに十分といえる。長滝遺跡の地域の拠点としてのあり方は後期前葉の第Ⅶ群（気屋Ⅰ式）まで続くものと推定される。

手取川を挟んで北加賀と対峙する本遺跡の地理的な位置のためか、第Ⅱ群には北加賀方面の影響を受けた土器群が少量伴うようである。これが第Ⅲ群としたものであり、その比率は恐らく梯川流域以南の南加賀の該期の諸遺跡に比して高いと推定される。また、これとは別に東海（西日本）方面の影響を受けた一群の存在も知られる。加賀市藤ノ木遺跡の出土資料〔中村他　1985〕においても、「近畿・東海系の土器を一括」した「第Ⅳ群土器」が報告されている。奇しくも本稿においても第Ⅳ群と呼ぶことになったこの系統の土器群については、小時期・遺跡による多寡の差が予想されるとはいえ、中期後葉の南加賀においてはある程度普遍的に存在する可能性があり注意を払う必要があろう。それとともに、今回の報告では第Ⅰ群（古府Ⅱ式）に伴うものと中期末葉～後期初頭に比定できるものがあるという漠然とした指摘に留まった点を反省し、今後の課題としたい。なお、前記の愛知県林ノ峰貝塚〔山下　1990〕の場合、「後期初頭」の「G層」出土資料中に条痕文を施した土器が8％位含まれるということであるが、一見条痕文風である本遺跡の東地区18類についても器形を異にするもののこの方面から影響を受けている可能性を考えられなくもない。

次に後期初頭から前葉にかけては、およそ第Ⅴ・Ⅵ群→第Ⅶ群という流れで理解できるものと思われる。これら三者は胎土中に砂粒を多く含むことにおいて共通する。第Ⅰ・Ⅱ群で顕著であった焼土粒はほとんど姿を消すようである。第Ⅵ群としたものは外反器形で口縁部に無文帯を有するものを主体とするが、口縁上端が強く外反して横に張り出す形状を呈するものはほとんど確認できない。第Ⅴ群については下開発茶臼山遺跡〔西野　1982〕が、また第Ⅶ群については岩本遺跡〔西野　1987〕をそれぞれ辰口町における類例としてあげることができる。

(4)　今後の課題

長滝遺跡は金沢大学考古学研究会による能美丘陵周辺の踏査活動のなかで、1974年12月に発見された〔金沢大学考古学研究会　1976〕。その折の採集地点は第31図に示したとおりである。その後、県営ほ場整備事業に先立つ県立埋蔵文化財センターによる試掘が実施され、遺跡の範囲が確定するところとなった。発掘調査は今回が初めてであるが、縁辺部のごく一部に限られたために遺跡の全貌の把握には程遠い感がある。長滝遺跡の集落跡としての様相の解明は今後の調査に委ねられているといっても過言ではない。

本章を記すにあたっては、西野秀和・米沢義光・本田秀生・垣内光次郎の各氏よりご教示を得ている。また、岐阜県徳山村における近年の発掘資料のうちの一部について、財団法人岐阜県文化財保護センターの武藤貞昭・鈴木昇・小谷和彦の各氏のご好意により実見させて頂く機会を得ている。ここに感謝申し上げる次第です。

門外漢の筆者が短期間で不勉強なままに書き上げたため、本章の記述はきわめてまとまりのないものになってしまった。その反省を今後の糧にできればと考えている。刊行後もご教示・ご叱正を賜ることができれば大変に幸いである。

参考・引用文献

高掘勝喜・吉岡康暢　1968　「石川県石川郡鶴来町白山上野住居址群第１・２次調査概報」『石川考古学研究会々誌』第11号　石川考古学研究会。

金沢大学考古学研究会　1976　『金沢大学考古学研究会活動報告』第２号。

西野秀和　1978　『莇生遺跡』　辰口町教育委員会。

西野秀和　1982　『辰口町下開発茶臼山古墳群』　辰口町教育委員会。

中村準一他　1985　『藤ノ木遺跡』　加賀市教育委員会。

南　久和　1985　『北陸の縄文時代中期の編年』　転形書房。

南　久和他　1985　『金沢市東市瀬遺跡』　金沢市教育委員会。

工藤俊樹他　1985　『右近次郎遺跡Ⅱ』　大野市教育委員会。

西野秀和　1987　「第二節　縄文時代」『辰口町史』第二巻　辰口町役場。

西野秀和・本田秀生　1987　『金沢市笠舞Ａ遺跡（Ⅲ）』　石川県立埋蔵文化財センター。

米沢義光　1989　「気屋式土器様式」『縄文土器大観』４　小学館。

山下勝年　1990　「東海地方」『調査研究集録』第７冊　横浜市埋蔵文化財センター。

Ⅱ　長滝Ｂ遺跡（1987年度）

県営ほ場整備に伴う緊急発掘調査であり、能美郡辰口町長滝地内に所在する。調査期間は1987年５月７日～７月15日、調査面積は800㎡である。丘陵山裾部に位置する集落遺跡と考えられるが、後世の攪乱が多く遺構は錯綜している。現況は水田および荒地である。遺物量は少なく、パンケースに２箱であった。第57～59図は全体の遺構実測図である。調査幅は南北約7.5m、グリッドは調査区西側を通る農道上を基点にして10mごとに設け、１～９区を設定した。西から東に調査は進められ、遺物が出土した遺構には遺構番号を付した。溝１～８号、土坑１～８号、ピット１～７である。また遺構および調査区脇の番号はセクションポイントを示している。

遺　構

１・２号溝　２・３区に位置する。幅50cm前後、深さ５～10cm。両溝平行して弧を描くように走り、１号溝は北上し攪乱坑につながる。灰色粘土質の覆土を持つ近代溝である。

３号溝　４区北壁からはじまり、調査区を縦断して８区まで続く。幅80cm前後、深さ５～20cm。覆土も場所によって異なり、黄灰色砂礫層、灰褐色粘質砂層などがある。各遺構と接する。

４号溝　３号溝と平行して５号溝を切り、６・７区に位置する。幅100cm前後、深さ20cm。覆土は黒褐色粘質土層である。

５号溝　６区に位置し、調査区を南北に横断する。幅60～100cm。深さは南側が25cm、北側は45cm。

６号溝　４号溝と接し７号溝とつながる不定形の溝状遺構である。深さは10cm前後と浅く、表面に散在する礫の中には石錘が１点認められた。

７号溝　６・７区に位置し、６号溝につながる。深さ５～10cm。

８号溝　７区に位置する。３・７号溝に挟まれ、４号溝とつながる。幅15cm前後、深さは５cmと浅い。

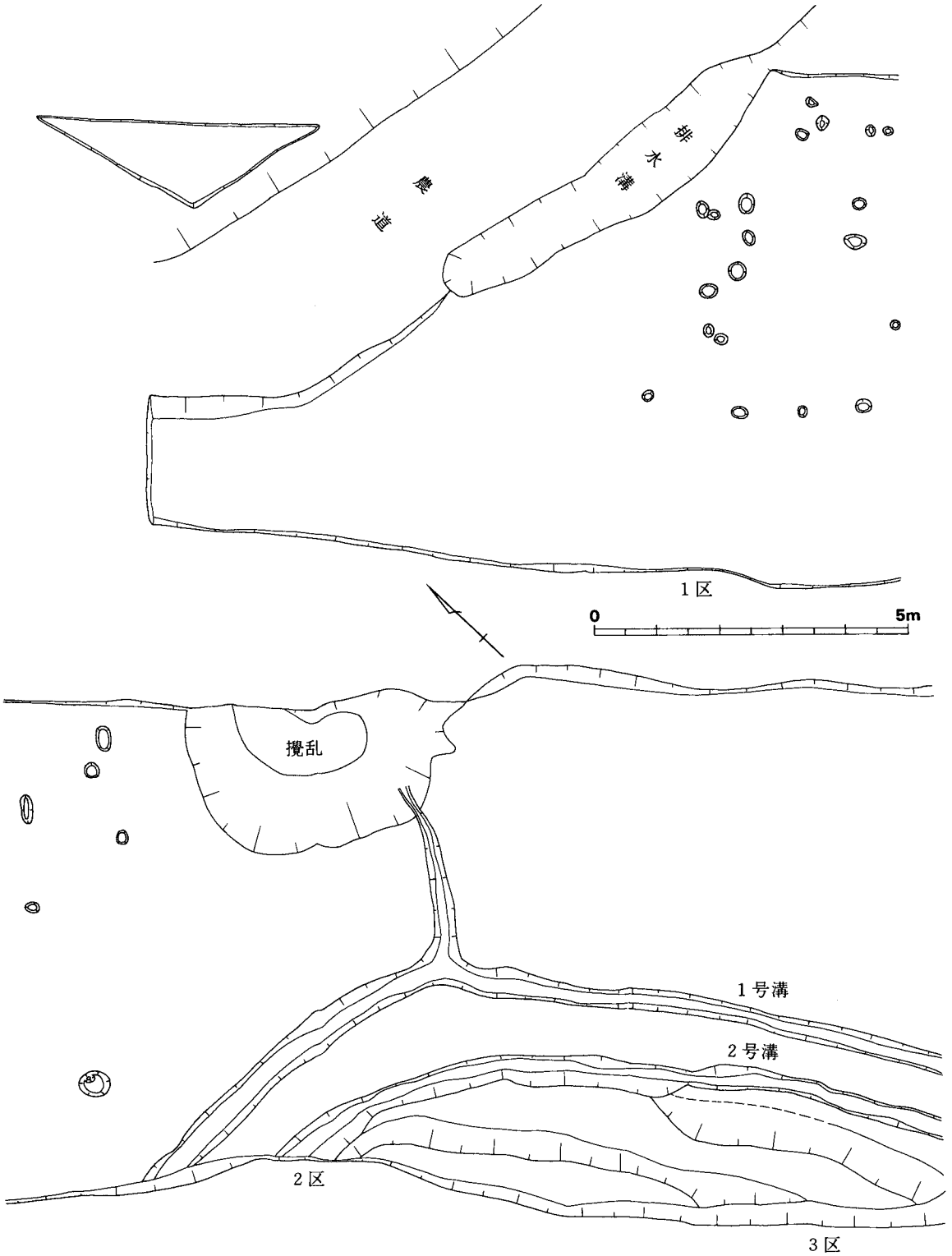
１号土坑　６区北壁に接する。平面形は楕円に近いか。確認できる最長部は230cm、深さは37cmである。覆土は二層からなり、黒褐色粘土層、灰黄色粘土層である。

２号土坑　６区に位置する。円形で径70cm、深さ33cm。床面は平担である。上層部には炭化物を含み、最下層は粘性の強い褐色粘土層である。

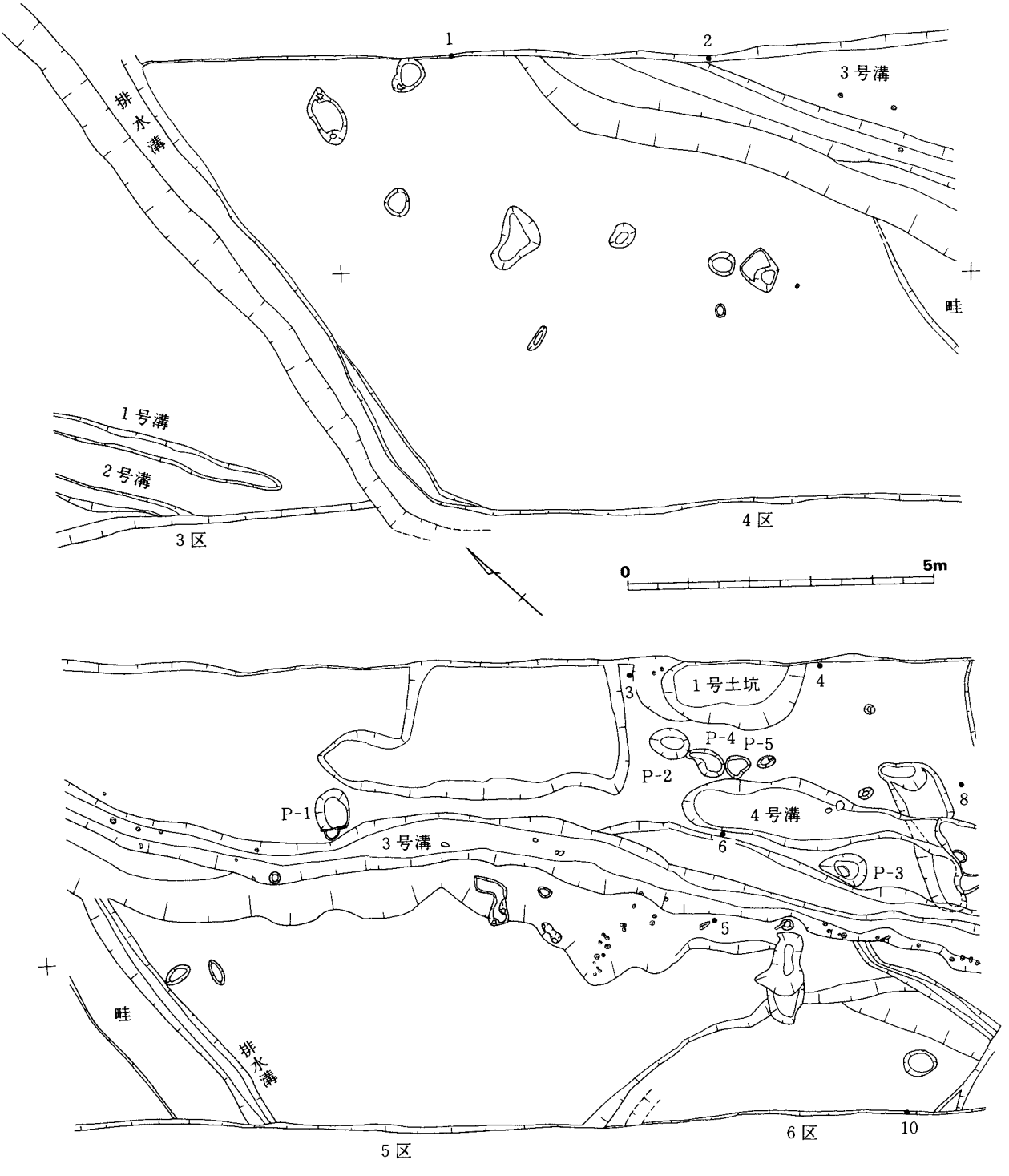
３号土坑　２号土坑のすぐ脇に位置する。長径110cm、短径100cm、深さ55cmである。やはり床面は平担で２号土坑との関連性を窺わせる。時期を特定できる遺物は出ていないが、桶を利用した近世の便所遺構の可能性はないだろうか。

４号土坑　７区に位置する。楕円形で長径100cm、短径70cm、深さ26cmで床面隅に深さ10cm程度のへこみがある。

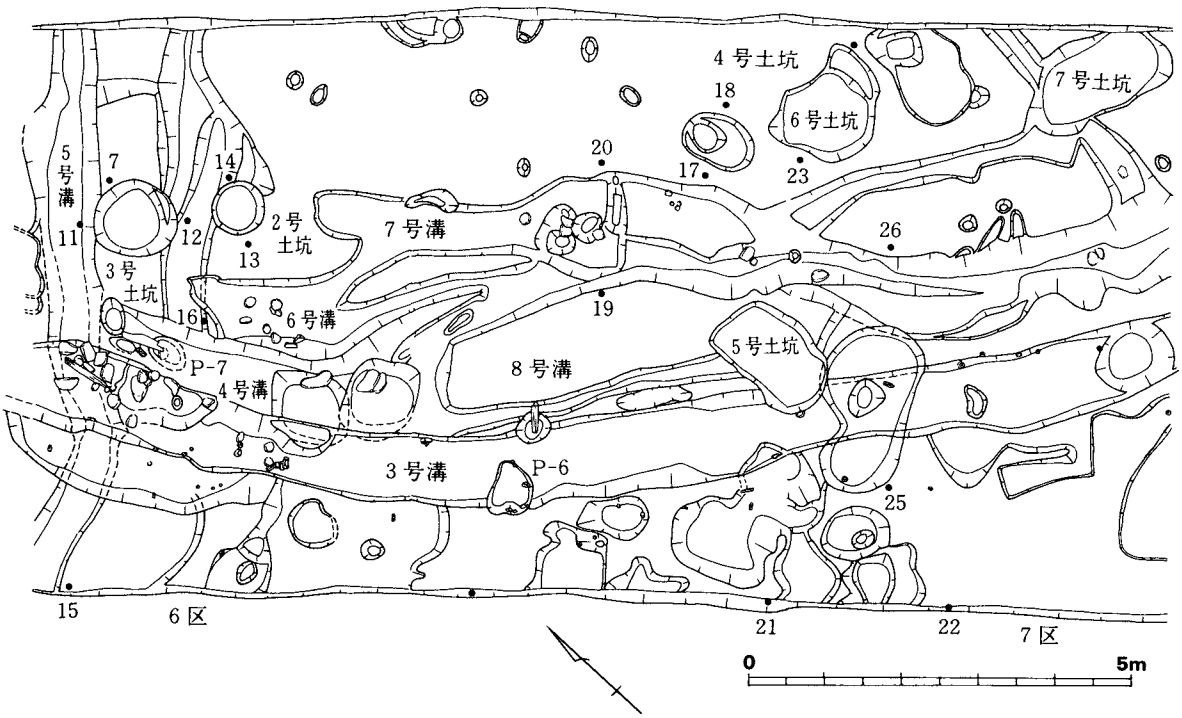
５号土坑　７区に位置する方形状の土坑である。３・８号溝を切り、縦160cm、横100cm、深さ28cm。

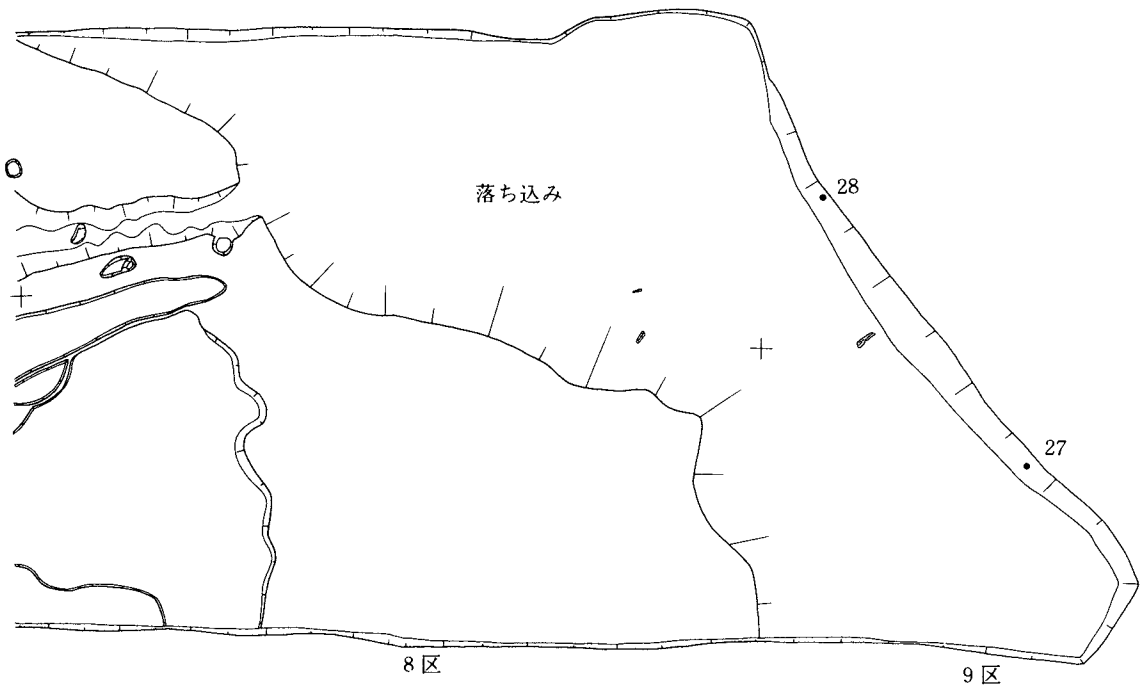


第57図　長滝B遺跡遺構実測図1～3区（1/50）

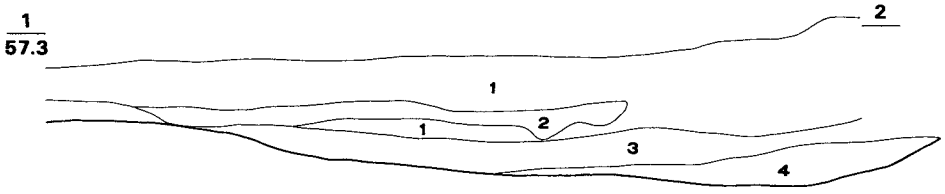


第58図　長滝B遺跡遺構実測図3～6区（1/50）

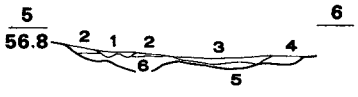




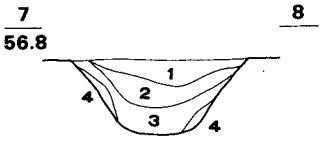
第59図　長滝Ｂ遺跡遺構実測図６～９区（1/50）



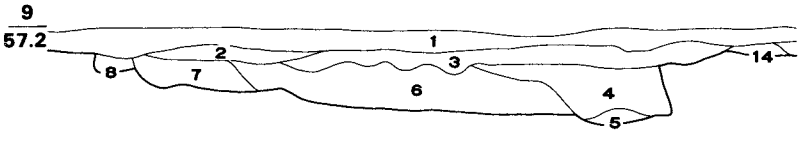
1．表土
2．黒褐色粘質土
3．暗褐色粘質土層
4．黄灰色砂礫層（3号溝）



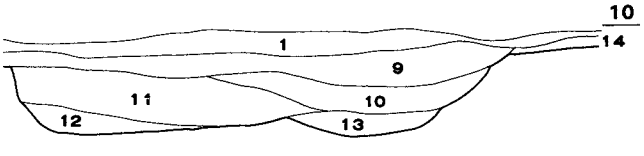
1．灰黄色地山質土層
2．暗褐色粘質土層
3．黒褐色粘質土層
4．暗褐色砂質土層
5．灰褐色砂質土層
6．暗灰褐色砂層（3号溝）



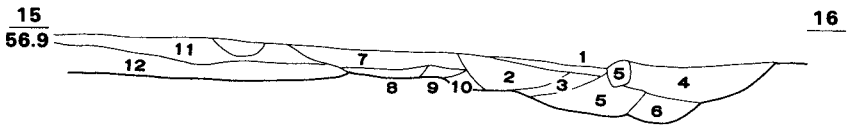
1．黒褐色粘質土層
2．暗褐色粘土層
3．灰褐色粘土層
4．灰黄色粘土層（地山質）



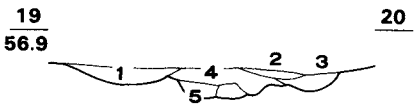
1．表土
2．暗褐色粘質土層
3．極暗褐色粘質土層（地山ブロック混入）
4．極暗褐色粘質土層（しまり弱い）
5．黄白色粘土層
6．地山土に4層混入
7．暗褐色粘土層
8．黄褐色粘質土層
9．暗褐色粘質土層（地山粒混入）
10．褐色粘質土層
11．灰褐色粘質土層
12．11に黄色砂粒混入
13．暗褐色粘土層（5号溝）
14．黄褐色粘質土層



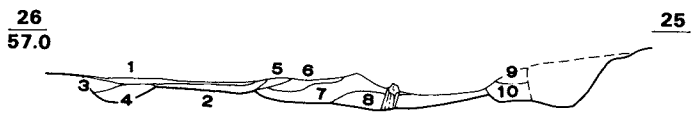
第60図　土層断面実測図（1/40）



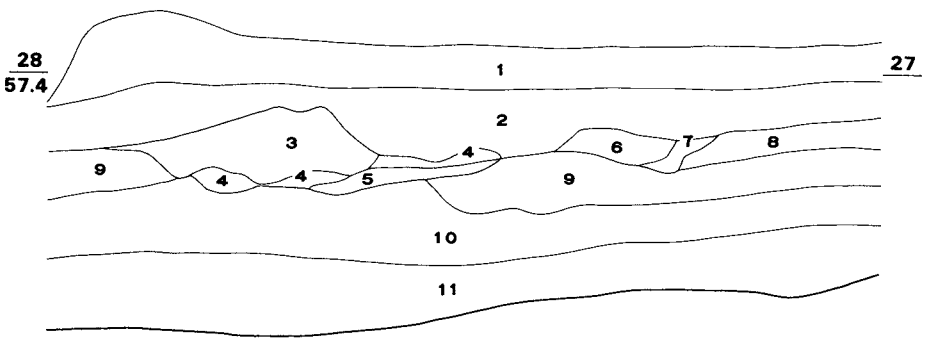
1．灰色粘質土層
2．灰褐色粘質砂層 } 3号溝
3．褐色粘質土層
4．黒褐色粘質土層（4号溝）
5．暗褐色粘質土層
6．4に黄色砂層混入（P-7）
7．灰褐色粘質土層
8．灰色粘質土層
9．地山土層
10．灰褐色粘質土層
11．灰色粘質土層
12．灰褐色粘質土層



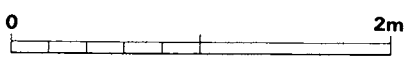
1．暗黄褐色粘質砂層
2．褐色粘質土層
3．黄褐色砂質土層
4．暗褐色粘質土層
5．4に地山土混入



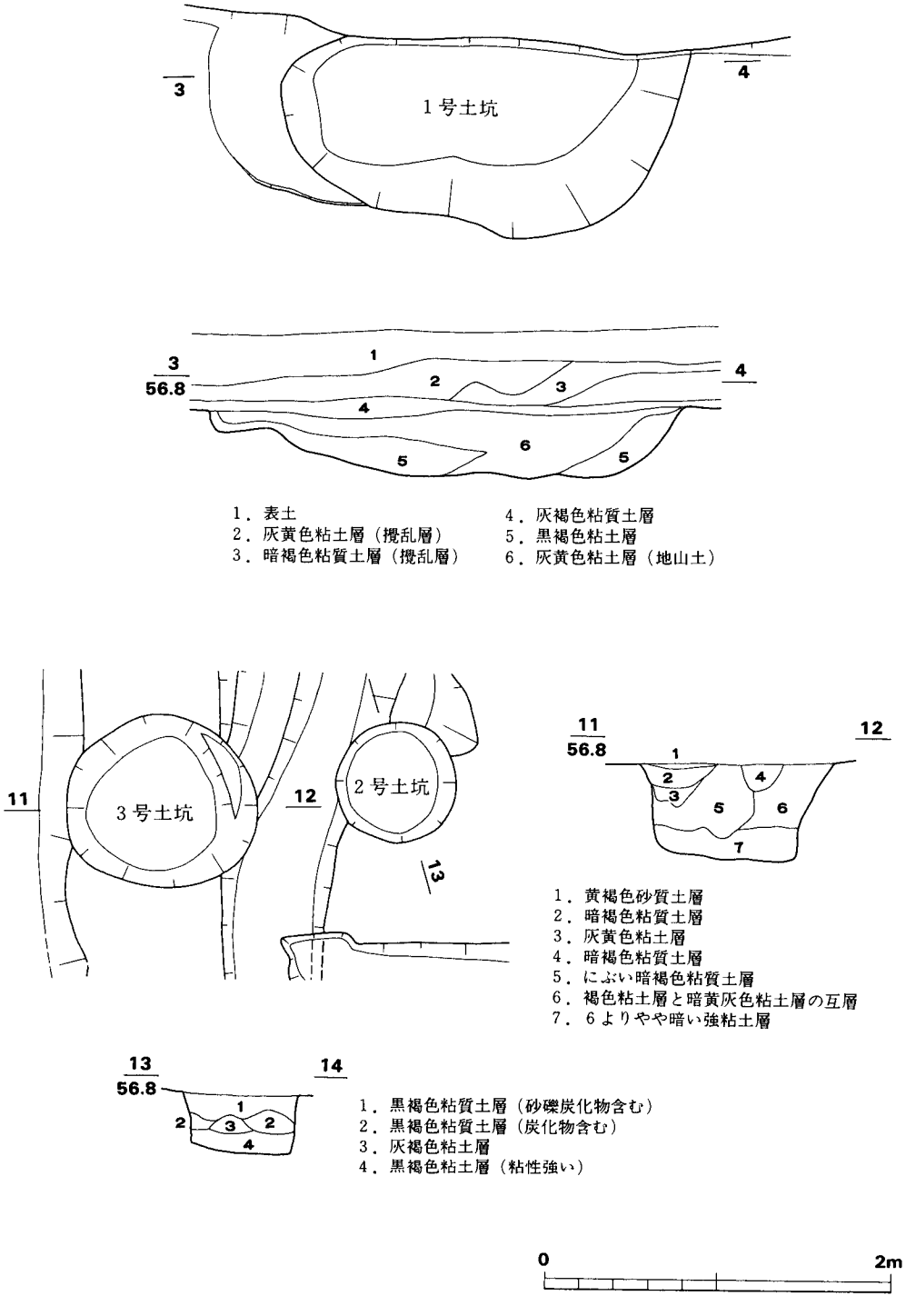
1．灰褐色粘質砂層 } 3号溝
2．赤褐色砂礫層
3．黒褐色粘質土層（地山ブロック含む）
4．黒褐色粘質土層（炭化物含む）
5．灰褐色粘質砂層（砂礫含む）
6．暗灰褐色粘質土層（地山ブロック多く含む）
7．暗灰褐色粘質土層（地山ブロック含む） } 7号溝
8．灰白色粘土層
9．黒褐色粘質土層
10．暗褐色粘質土層



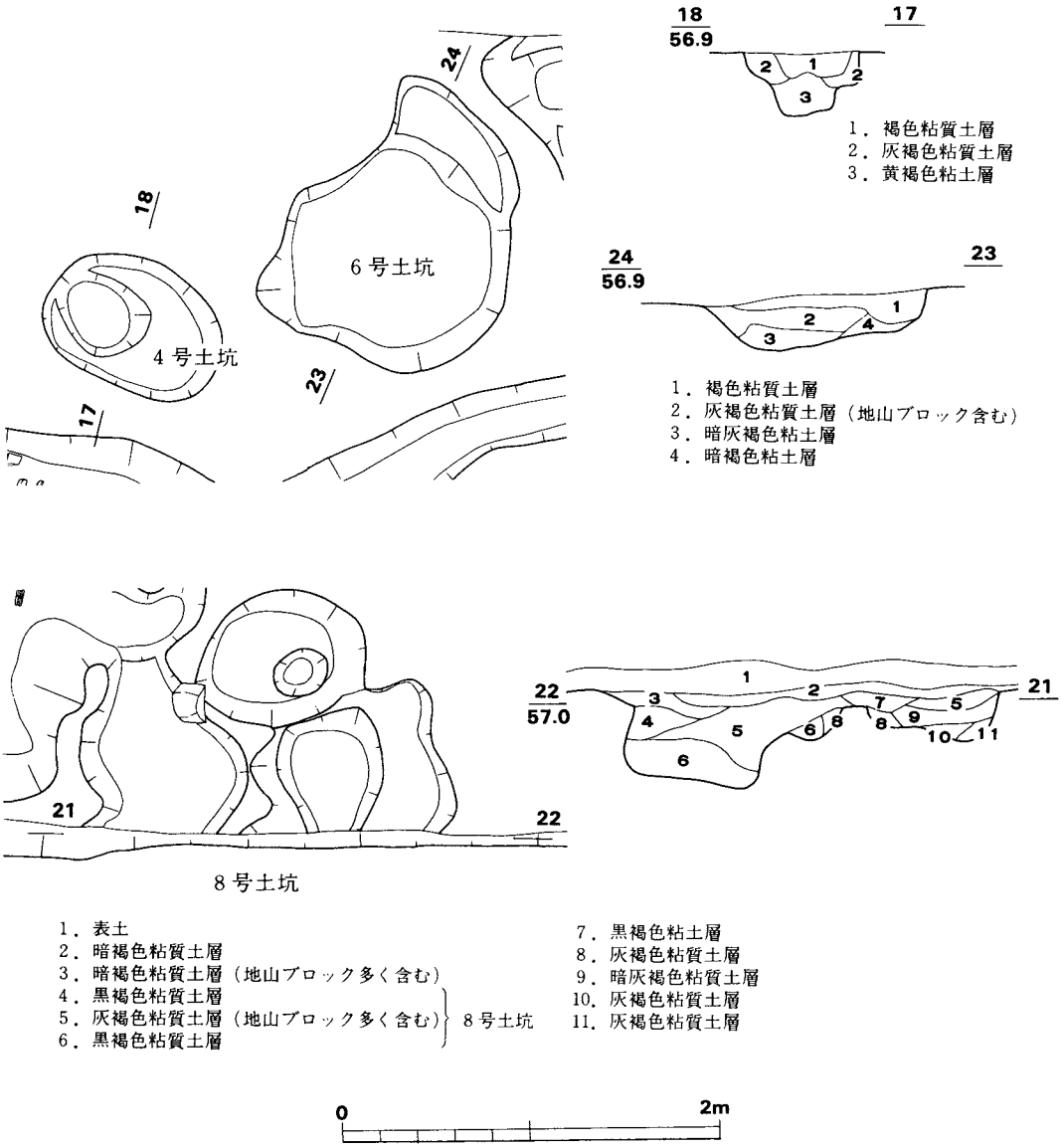
1．表土
2．暗褐色粘質土層（灰白色ブロック含む）
3．黄灰色粘質砂層（小礫含む）
4．黄灰色砂礫層
5．灰黄色粘質土層（砂礫多く含む）
6．暗褐色粘質土層（炭化物含む）
7．暗灰黄色砂層
8．暗褐色粘質土層
9．暗褐色粘質土層（炭化粒含む）
10．黒褐色粘質土層
11．灰褐色粘土層



第61図　土層断面実測図（1/40）



第62図　土 坑 実 測 図（1/40）



第63図　土 坑 実 測 図（1/40）

6号土坑　7区に位置する不整形の土坑である。径120cm前後で深さは28cmである。

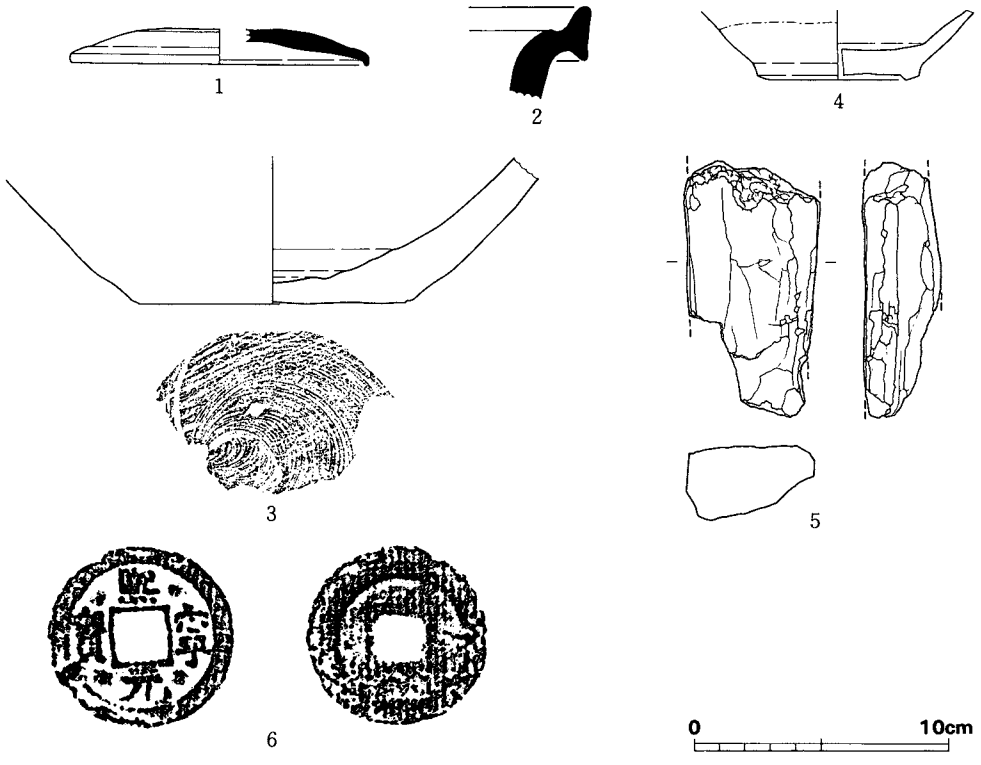
7号土坑　7区に位置する。楕円形で長径200cm、短径110cm、深さ22cmである。

8号土坑　7区南壁に接する。不整形で壁際での長さが105cm、深さは45cmである。覆土は黒褐色粘質土層、灰褐色粘質土層からなる。

ピットは七ケ所で遺物が確認されているが、多くは細片である。

遺　物

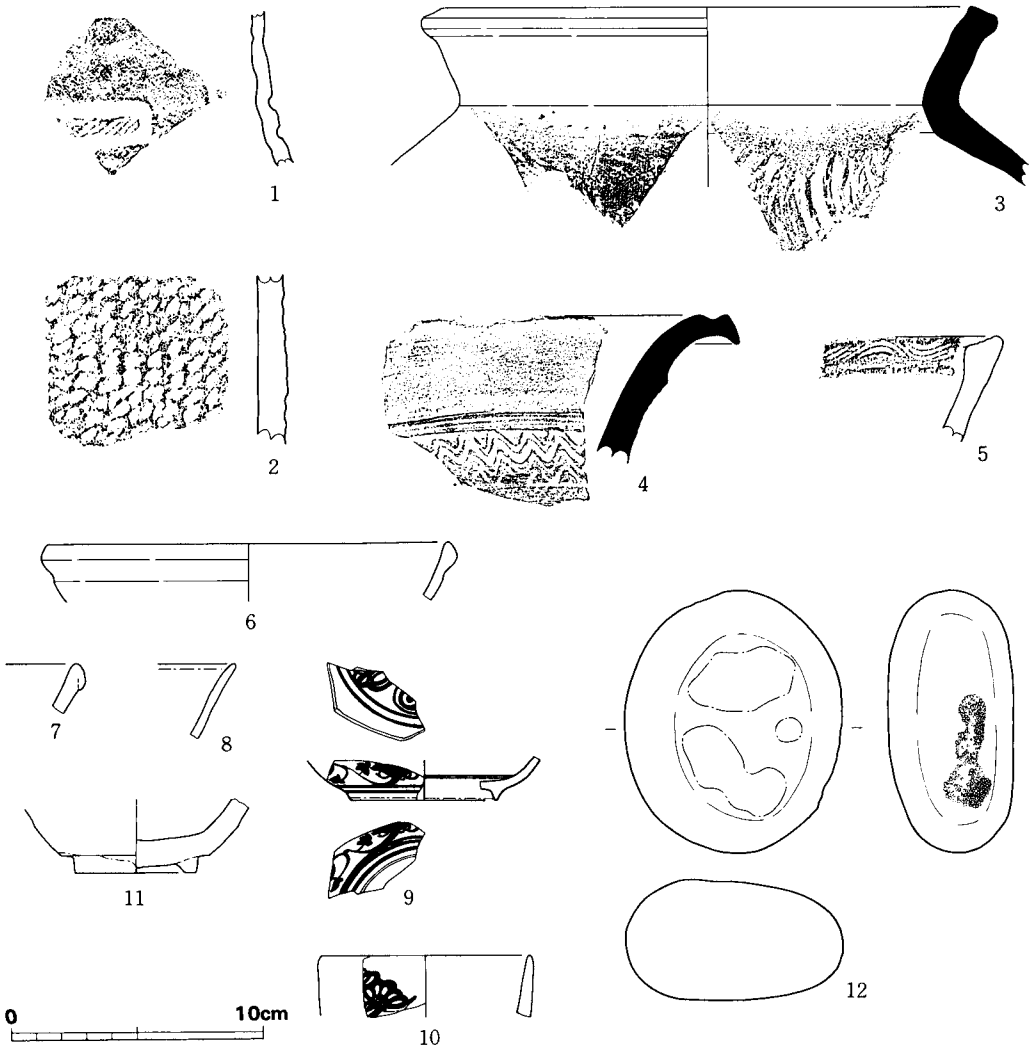
遺構からは6点が実測されている（第64図1～6）。1はつまみを欠く小型の蓋である。天井



第64図　出土遺物実測図（⅓・6＝⅙）

部にはケズリ調整が見られる。内面はやや平滑で墨痕が残るため、転用硯として利用されたのかもしれない。胎土には多量の砂粒が認められる。1号土坑出土。2は甕の口縁部片である。口縁部はほぼ垂直に引き出され、縁帯下端は断面三角形となる。内外面に降灰釉が見られる。14世紀代の加賀焼と思われる。7号溝出土。3は壺類の底部である。内外面灰色で外底部には回転糸切り痕をとどめる。内面は平滑であり何等かの使用を窺わせる。12世紀後半代の珠洲焼と思われる。3号溝出土。4は白磁碗の底部である。内面立ち上がり部に沈線を持ち、高台は浅い台形状となる。高台周辺は露胎となり、釉は灰色味を帯びる。白磁碗Ⅳ類に区分され、11世紀後半に出現し12世紀後半まで量を占める。ピット6出土。5は凝灰岩質の石製品として実測したが、使用面に見えるのは自然の剝離面かもしれない。6号溝出土。6は熙寧元宝。初鋳1068年である。8号溝出土。

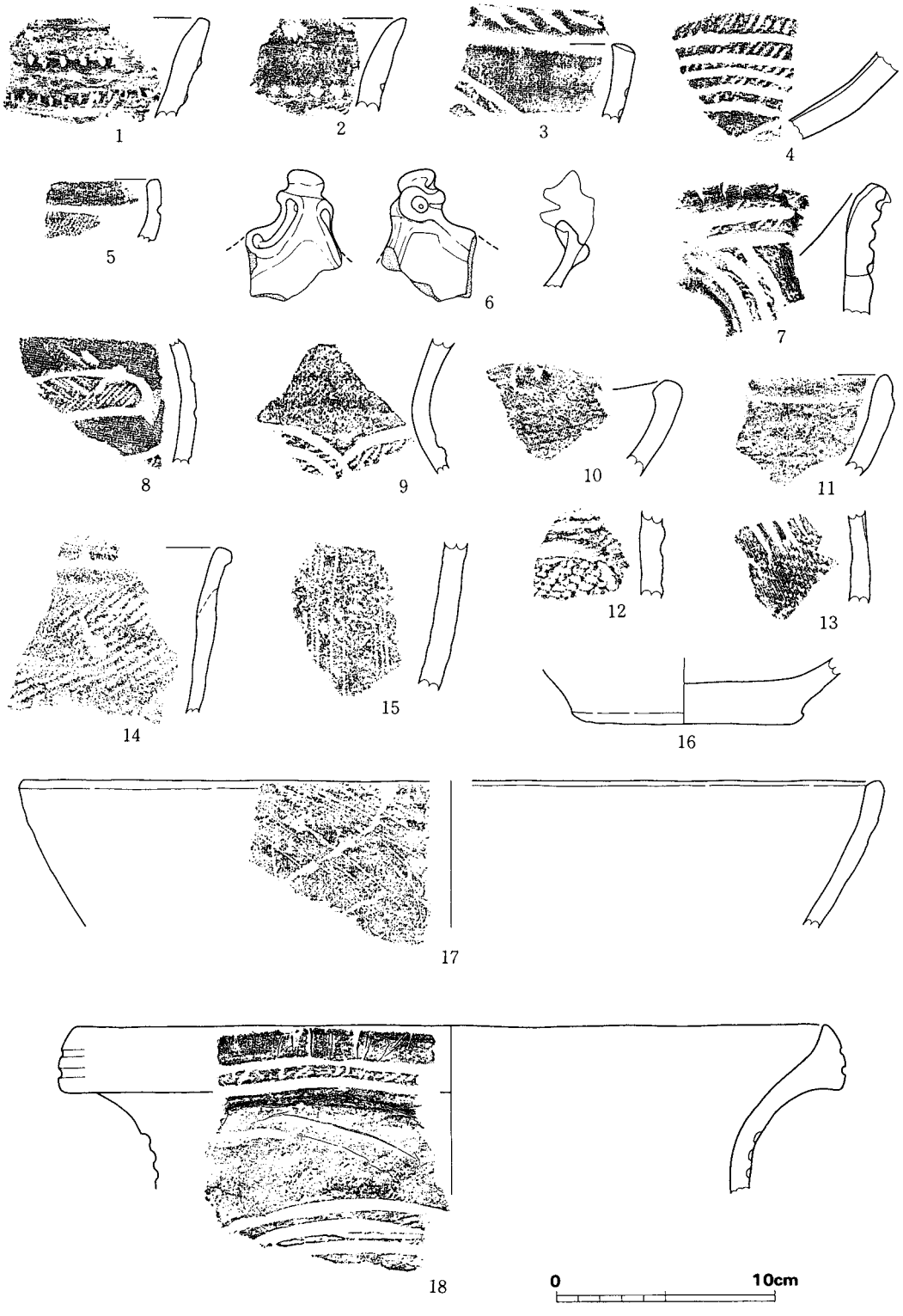
包含層からは12点が実測されている（第65図1～12）。1は斜行縄文を施文して工字状の区画を設け、区画外を擦り消している。2は条が縦に施文されている。3は口唇部の肥厚する須恵器の壺口縁部片である。4は須恵器の甕口縁部片である。外面には四条の波状文が巡っている。5は珠洲焼の擂鉢口縁部片である。口唇部には波状文が見られる。6・7は口縁部が玉縁状となる白磁碗片である。共に白磁碗Ⅳ類か。8は細片のため明確ではないが、口縁端部を露胎とする白



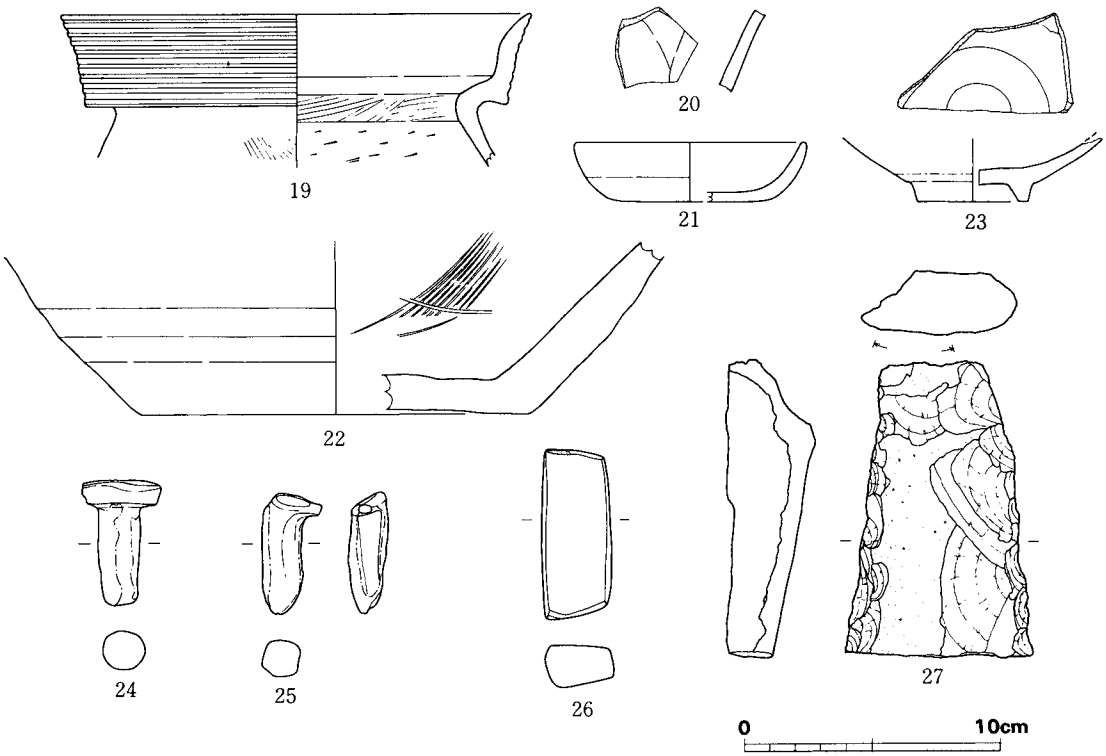
第65図　出土遺物実測図（⅓）

磁碗と思われる。白磁碗Ⅸ類に区分され、13世紀後半～14世紀前半に増加する。9は染付皿の底部片である。外面に牡丹唐草文、内面に十字花文を配する。明の製品で染付皿Ｂ１群Ⅵ類に区分され、15世紀後半～16世紀前半に多い。10は外面に菊文のコンニャク印判を押した染付碗である。18世紀前半代の肥前の製品と思われる。11は内外面鉄釉の天目碗か。高台部は露胎となる。越中瀬戸の可能性がある。12は槁石である。一部に擦痕も認められる。粗粒砂岩。

遺跡脇の長滝川沿いの水田部分は分布調査のトレンチを４本あけた。縄文時代の遺物を中心に27点が実測されている（第66～67図１～27）。１は貼り付けの粘土帯が二段見え、刻みが入る。内面は鮮やかな橙色である。２は口縁部下に一列の刺突文が見られる。３は口唇部と口縁部下に明瞭な平行沈線が入る。４は内面に文様を持つ鉢か。５は口縁部下が沈線で区画され、上部は施文が擦り消されている。６は波状口縁の突起部である。粘土帯を貼り付け、刺突と沈線によって



第66図　出土遺物実測図（⅓）



第67図　出土遺物実測図（⅓）

成形している。7も突起部であり、方向の異なる沈線によって区画される。片側にアーチ状のえぐりが見える。8は沈線の区画内に施文を残し、区画外を擦り消している。9は円弧状の平行沈線で区画され、区画外の施文を擦り消している。10は波状口縁の一部である。口唇部は丸く内湾する。11は口縁部上方に弱い沈線が巡る。12は沈線の区画内に施文が見られる。内面は橙色である。13の沈線は鋭角に入り、内面には黒褐色の内容物が付着する。14の口唇部は玉縁状に肥厚する。15は縦に櫛状の浅い施文が見られる。16は外底部に粗い筋状痕が入る。17は細い櫛状具で斜めに施文している。18は口縁部に二条の沈線が巡り、その間には施文が残る。胴部上方には緩い弧を描く太い沈線が見られる。19は擬凹線を持つ有段口縁の甕である。口縁部は幅広く先端は外反する。沈線は鋭角に入り、内面には黒褐色の内容物が付着する。14の口唇部は玉縁状に肥厚する。15は縦に櫛状の浅い施文が見られる。16は外底部に粗い筋状痕が入る。17は細い櫛状具で斜めに施文している。18は口縁部に二条の沈線が巡り、その間には施文が残る。胴部上方には緩い弧を描く太い沈線が見られる。19は擬凹線を持つ有段口縁で甕である。口縁部は幅広く先端は外反する。20は体部外面に蓮弁文を削り出した青磁碗である。オリーブ灰色で鎬は不明瞭。14世紀前半代に多い。21は中世の土師器皿である。細片のため時期等は不祥。22は加賀焼の擂鉢底部か。

一部に動きのある卸し目が見られ、内面は平滑で良く使い込まれている。胎土中に大粒の流紋岩が目立つためカミヤ窯の可能性がある。13世紀後半〜14世紀前半代。23は見込を蛇ノ目状に釉剝ぎし、高台周辺は露胎となる白磁皿である。17世紀末〜18世紀前半代の肥前の製品である。24・25は不明陶製品である。良く焼き締まり、部分的に黒褐色の釉が付着する。窯道具か。26は三面に研面を持つ砥石である。凝灰岩質砂岩。27は打製石斧の胴部上部で刃部を欠く。凝灰岩質安山岩。

全体の遺物量は少ないが、時期をある程度押さえられる資料は何点か出土している。縄文時代の遺物では後期のものが多く、一括性が認められる。中世以降では12世紀後半、14世紀前半、18世紀前半の遺物が若干まとまっているようである。

調 査 前 風 景（東から）

表 土 除 去 風 景

調　査　区　全　景（東から）

調　査　区　全　景（西から）

東地区作業風景

東地区全景

東　地　区　SK03

東　地　区　SK05

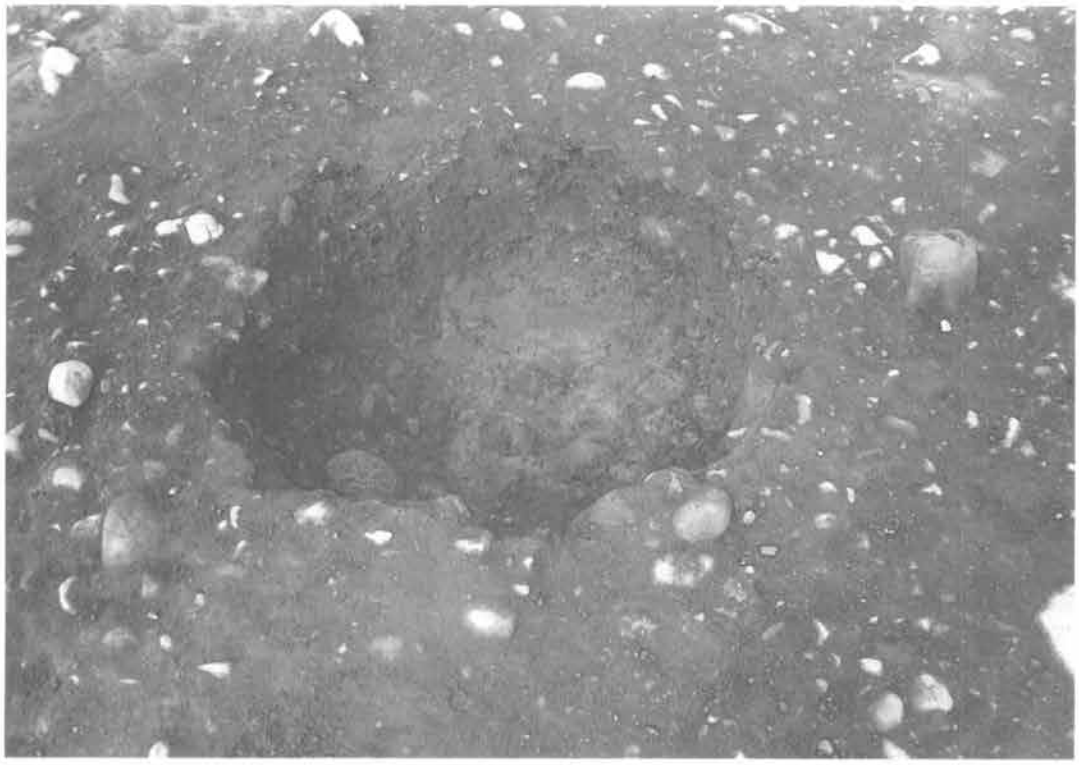
東 地 区 土 層（SK02付近）

中 央 地 区 作 業 風 景

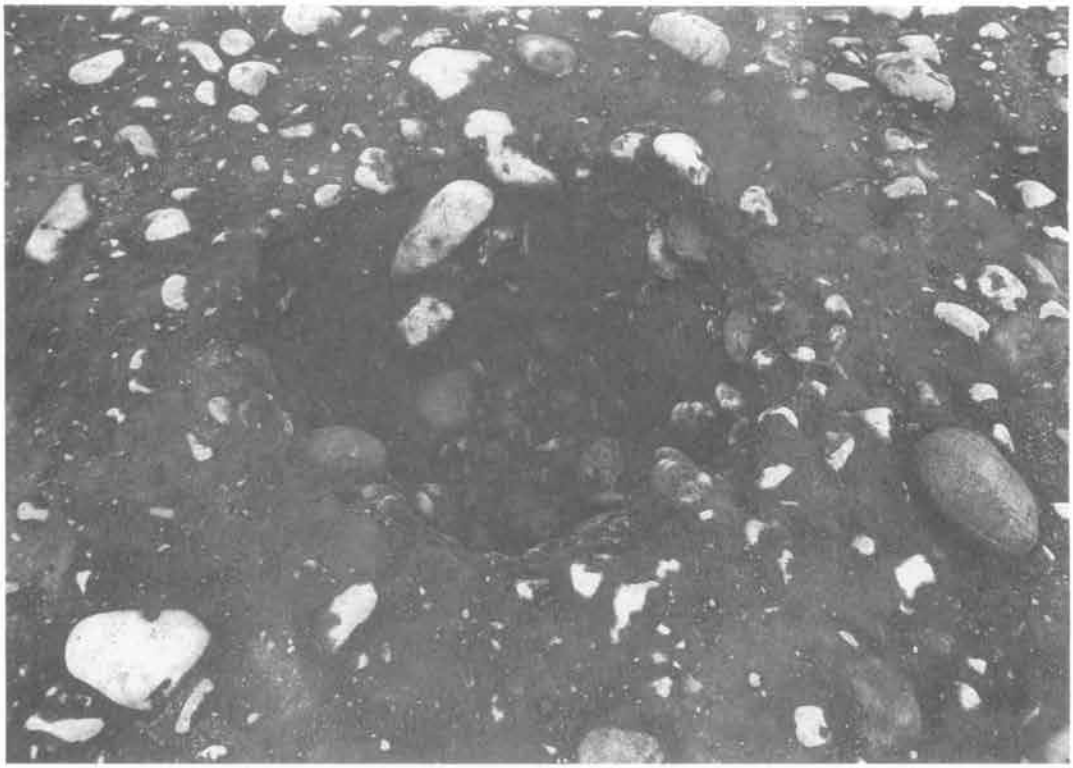
中　央　地　区　SX01～SX05

同　　上

中央地区全景



中央地区 SX02



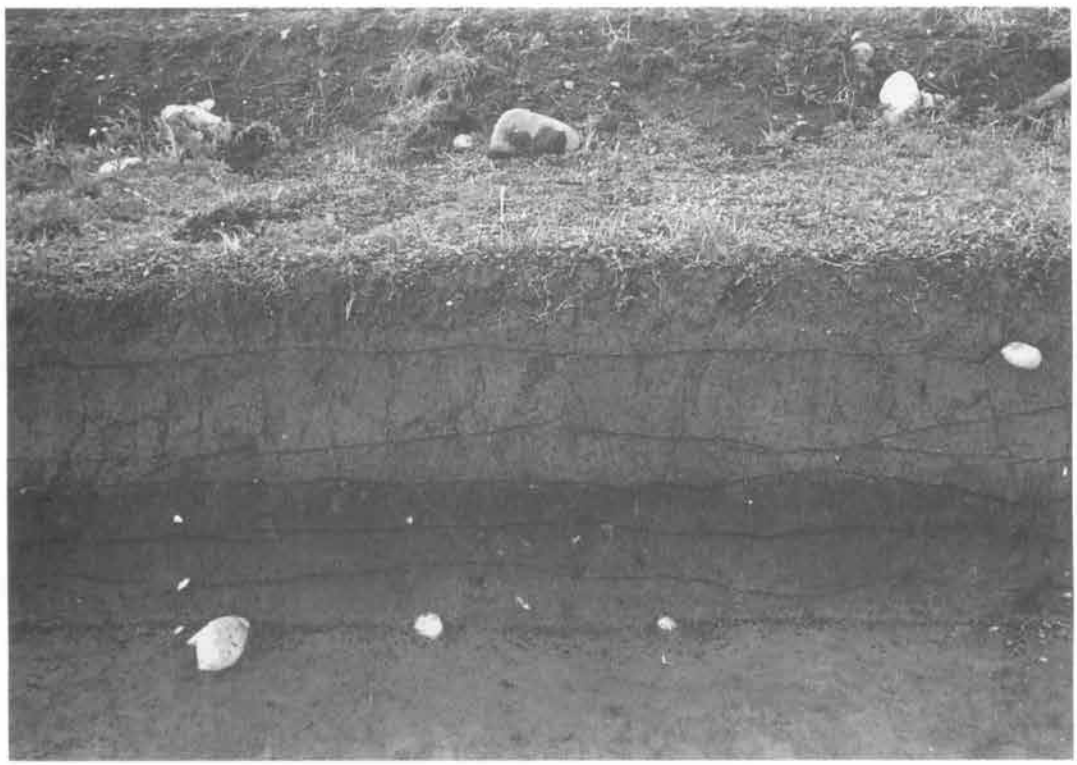
中 央 地 区 SX03

中 央 地 区 SX04

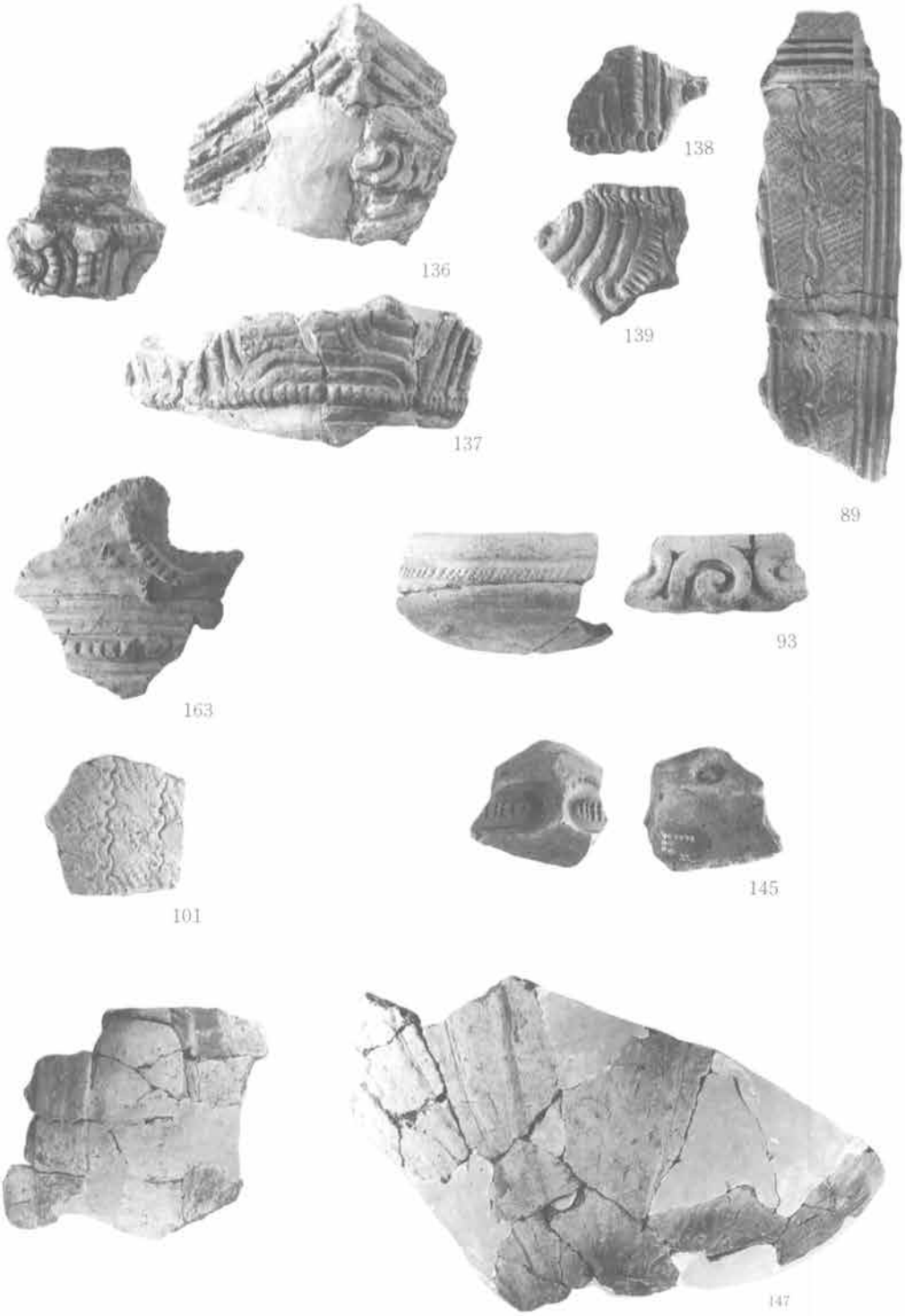
中央地区 SX05

西地区作業風景

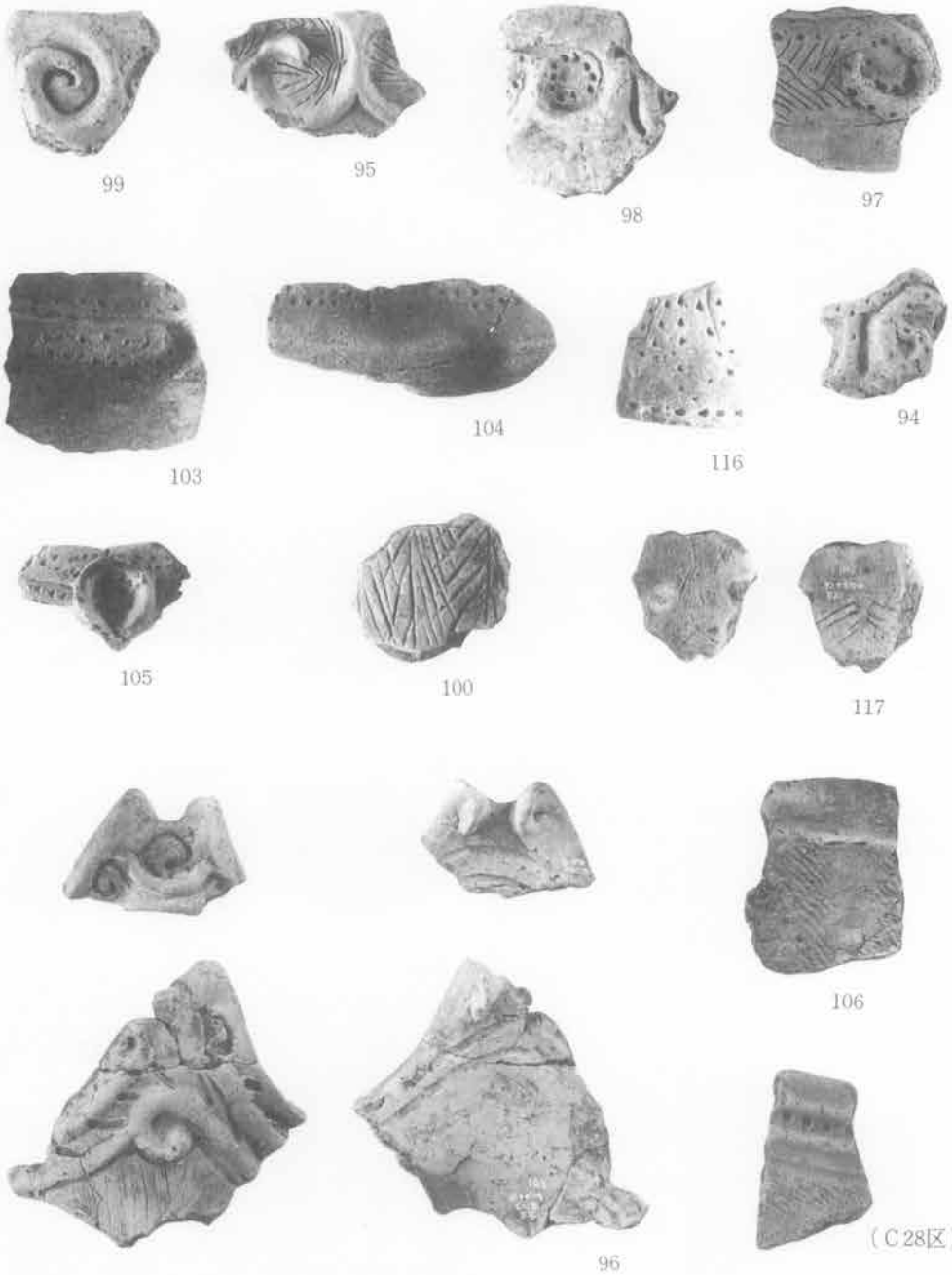
西 地 区 全 景



西 地 区 土 層



第 I 群 土 器



第Ⅱ・Ⅲ群土器

91

（B 22区）

146

（C 24区）

（C 24区）

（C 35区）

（B 22区）

57

165

（C 24区）

第 IV 群 土 器 そ の 他

27

29

28

23

26

30

168

（B 21区）

170

第 V 群 土 器

10

15

107

108

168

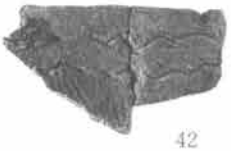
54

36

110

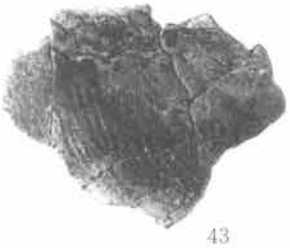
58

41



42

44



43

第 VI ・ VII 群 土 器

68

62

111

112

102

114

115

164

(C26区)

(B21区)

(B21区)

92

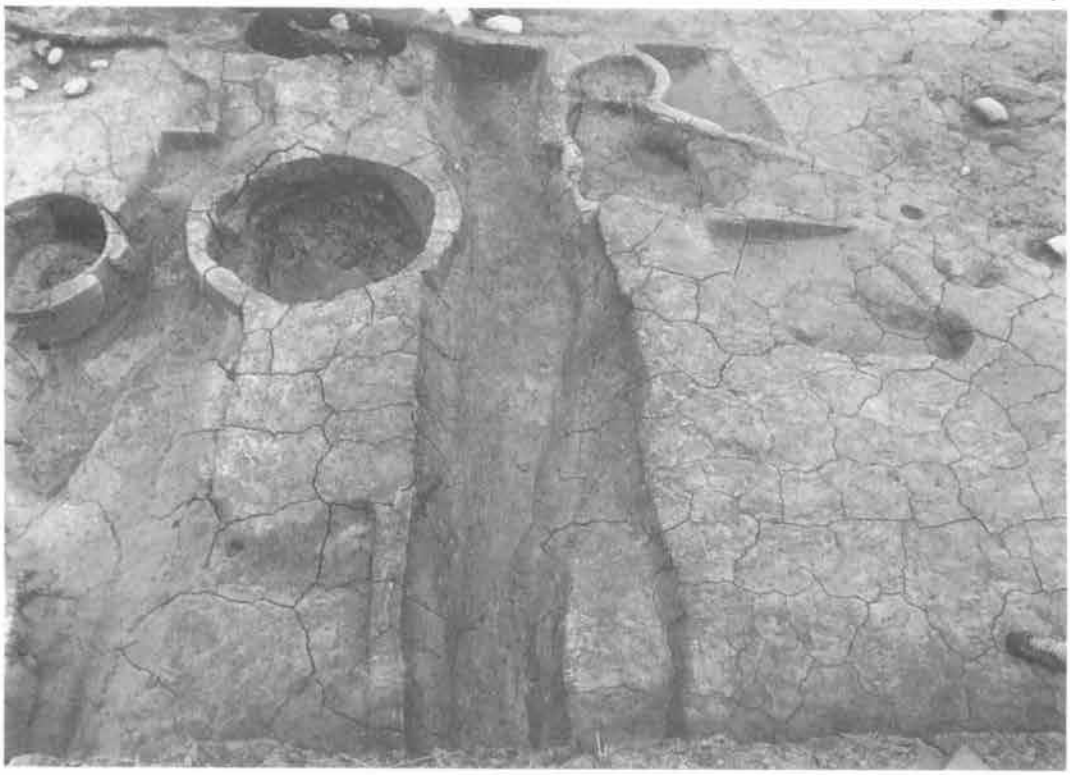
弥生土器(表採)

弥生土器(表採)

その他の土器

作　業　風　景（西から）

作　業　風　景



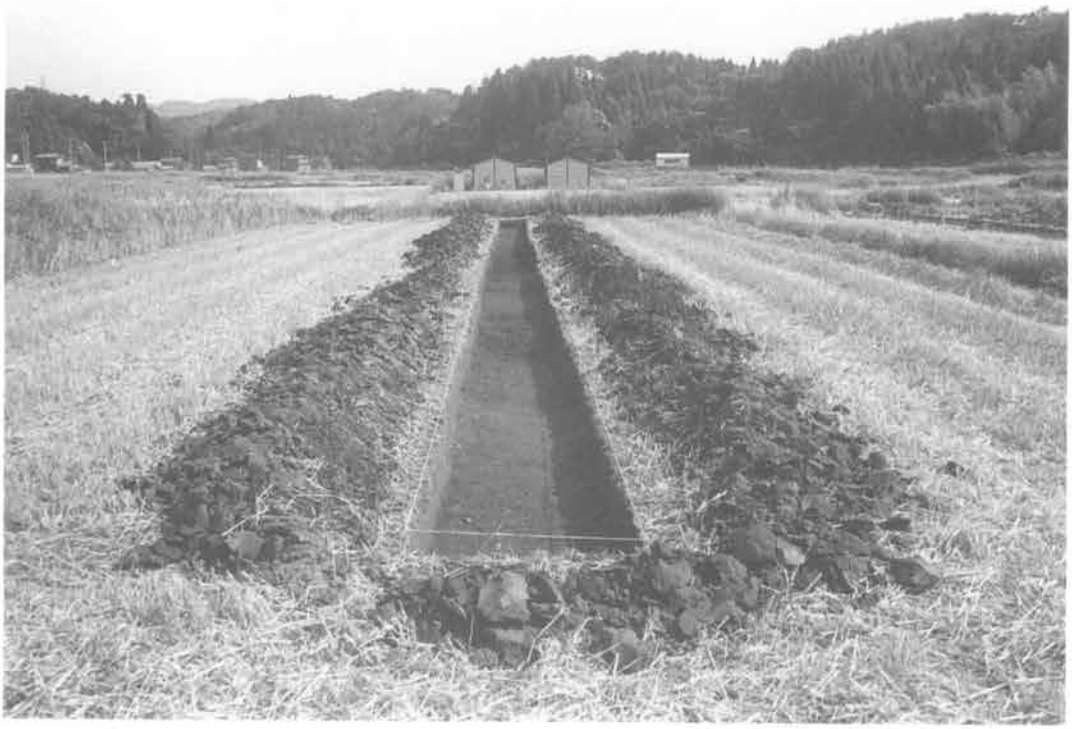
完　掘　状　況（6区南から）

5号溝土層断面（西から）

完 掘 状 況（東から）

完 掘 状 況（西から）

分布調査第２トレンチ



分布調査第４トレンチ

岩内遺跡・長滝遺跡群発掘調査報告
1993年3月発行
発行者　石川県立埋蔵文化財センター
〒920 金沢市米泉4丁目133
電話　0762(43)7692
印刷　ヨシダ印刷株式会社